

**YAMAGUCHI UNIVERSITY  
ARCHAEOLOGICAL MUSEUM REPORT Vol.7**

CONTENTS

Chapter I	The project on the Yamaguchi University campus in the 2008 fiscal year	..... 1
Section 1	General outline of the project on the Yamaguchi University campus in the 2009 fiscal year	..... 1
Section 2	Excavation on the Yoshida campus "Yoshida site"	..... 5
Section 3	Excavation on the Shiraishi campus "Shiraishi site"	..... 90
Section 4	Excavation on the Kogushi campus "Yamaguchidaigaku-Igakubukounai site"	..... 93
Section 5	Excavation on the Tokiwa campus "Yamaguchidaigaku-Kougakubukounai site"	..... 94
Section 6	Excavation on the Hikari campus "Mitarai site and Tshukimachiyama site"	..... 95
Section 7	Excavation on the other campus	..... 103
Appendix 1	The gist of researches and studies at Yamaguchi University in the 2009 fiscal year	.... 104
Appendix 2	List of researches in Yamaguchi University campus	..... 107
 Chapter II	Report of the Yamaguchi University Archaeological Museum activities	.... 130
Section 1	Exhibition activities	..... 131
Section 2	Social education activities	..... 138
 Appendix1	Identification Report : Plant Remains Excavated from the Yoshida site, Yamaguchi Prefecture	..... 142
Appendix2	Archaeological finds at Oyashikiyama barrow (Kudamatsu City)	..... 147

山口大学埋蔵文化財資料館年報

**山口大学埋蔵文化財資料館年報  
－平成21年度－**

平成二十一年度

Published by  
Yamaguchi University Archaeological Museum  
Yamaguchi, 2013

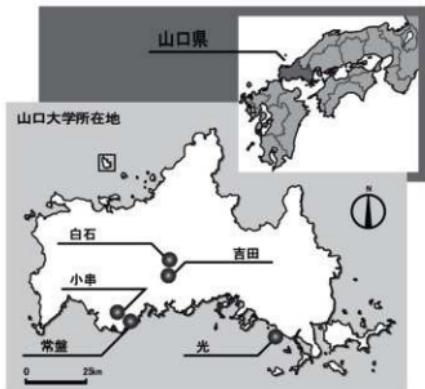
二〇一三年

2013

山口大学埋蔵文化財資料館

# 山口大学埋蔵文化財資料館年報

平成21年度 山口大学構内遺跡発掘調査概報  
平成21年度 山口大学埋蔵文化財資料館活動報告



2013

山口大学埋蔵文化財資料館



## 序

山口大学埋蔵文化財資料館は、吉田構内をはじめ小串・常盤・白石・光地区に所在する山口大学構内遺跡における埋蔵文化財の発掘・保護を基幹業務としています。同時に、学術資料の管理と発信を主要業務とする大学情報機構所属の一組織として、これら埋蔵文化財の調査成果や学術的価値を広く社会に告知するため、資料展示や広報誌発行、社会教育活動など、情報発信活動にも積極的に取り組んでおります。

さて、2009(平成21)年度は、本学中期計画の最終年となり、多くの地下の掘削を伴う工事計画が実施されました。少人数で組織される当館としては、埋蔵文化財保護業務に追われる日々となりましたが、吉田構内経済学部東アジア研究科・経済学研究科棟新営工事や、同じく吉田構内野球場防球ネット設置工事に伴う予備発掘調査では、主として弥生時代に関する多大な成果を得ることができました。また、光構内教育学部附属光中学校校舎改修工事に伴う本発掘調査においては、古墳時代のものと見られる多数の遺構を確認するに至っています。工事立会においても、吉田構内丘陵部において多数の遺構、遺物包含層が検出され、貴重な遺物が多数発見されました。

本書には、当館が同年に実施した構内遺跡の調査成果をはじめ、収蔵資料の展示活動や社会連携活動、館員の研究活動を収録しております。本書が山口大学および学外研究機関、地域社会において幅広く活用されることを願います。

当館は、埋蔵文化財保護体制をはじめ、遺物の整理・保管場所の不足が年々深刻化するなど多くの課題を抱えていますが、学術研究・教育の場として、今後ともこうした課題に全力をつくして取り組む所存です。これまで当館の調査・研究活動にご支援、ご協力を頂いた関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年3月  
山口大学埋蔵文化財資料館長  
山内 直樹



## 例言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」と呼称)が平成21年度に実施した、山口大学構内の遺跡発掘調査成果報告と、同年度に資料館が実施した社会教育等の活動報告を記したものである。
2. 構内遺跡発掘調査に関しては、現地での調査は資料館員である田畠直彦(大学情報機構埋蔵文化財資料館助教)・横山成己(大学情報機構埋蔵文化財資料館助教)・藤野好博(事務局情報環境部学術情報課教務補佐員※当時)が担当した。  
また、現地での調査に際しては、有限会社久富工務店、旭建設工業株式会社、中林建設株式会社に協力を依頼した。
3. 出土資料の整理は、平成21年度から平成24年度にかけて、資料館員である山畠・横山・藤野・乃美友香(事務局情報環境部学術情報課事務補佐員)・松浦暢呂(事務局情報環境部学術情報課教務補佐員※平成22年4月1日より)が担当した。
4. 発掘調査における現地での実測は山畠・横山・藤野が、写真撮影は山畠・横山が行った。出土遺物に関しては、火薬・写真撮影を山畠・横山・松浦が行った。製図・整図は山畠・横山・松浦・乃美が行った。
5. 発掘調査に伴う事務は、事務局情報環境部学術情報課総務係が統括した。
6. 発掘調査の諸記録類と出土資料は資料館で適正に保管している。
7. 本文の執筆分担は日次に記した。
8. 本書の編集は資料館員の補佐を得て横山が行った。

## 凡例

1. 山口大学の吉田・白石・小串・常盤・光構内は、いずれもが文化財保護法(法律第214号)で示される「周知の埋蔵文化財包蔵地」内に位置する。各構内の位置する遺跡名は以下の通りである。

吉田構内～吉田遺跡 白石構内～白石遺跡 小串構内～山口大学医学部構内遺跡  
常盤構内～山口大学工学部構内遺跡 光構内～御手洗遺跡・月待山遺跡

2. 吉山構内における調査区および層位・遺構の位置は、日本測地系に基づいた国上座標を基準として北から南へ1～24、西から東へ8～7の番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のA-2 4区南北隅を起点(構内座標x=0, y=0)とする構内座標値で表示している。なお、平面直角座標系第III系における座標値(X, Y)と構内座標値(x, y)とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206,000$$

$$y = Y + 64,750$$

3. 平成21年度に実施した予備発掘調査に関しては、以下の略号により資料整理を行っている。  
吉田構内東アジア研究棟・経済学研究科新宮工事に伴う予備発掘調査……………YD2009-1  
吉山構内野球場防球ネット設置工事に伴う予備発掘調査……………YD2009-2  
吉田構内教育学部A棟改修工事に伴う予備発掘調査……………YD2009-3  
吉田構内里山整備工事に伴う予備発掘調査……………YD2009-4  
吉田構内農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う立会調査……………YD2009DIC  
吉田構内農学部附属農場水田暗渠排水工事に伴う立会調査……………YD2009NSD  
吉田構内農学部附属植物工場新宮工事に伴う立会調査……………YD2009NSK  
光構内教育学部附属光中学校校舎改修工事に伴う本発掘調査……………MTR2009-1

4. 各遺構は下記の記号で表記することがある。

堅穴住居……SB

掘立柱建物……SH

土壙……SK

溝……SD

柱穴・ピット……Pit・SP

落ち込み……SX

5. 本書で使用した方位は、吉田構内では国上座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

6. 標高数値は海拔標高を示す

7. 上層および上器の色調記号は、農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準上色帖』(1976)に準拠した。

8. 遺物の分類は、下記のように分類した。

断面黒塗り……須恵器、陶器、磁器

断面白抜き……繩文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、石器、木器、金属器

## 本文目次

第1章	平成21年度山口大学構内遺跡の調査	
第1節	平成21年度に実施した遺跡調査の概要	(横山) ..... 1
第2節	吉田構内(吉田遺跡)の調査	
1	経済学部東アジア研究科・経済学研究科棟新営工事に伴う予備発掘調査	(横山) ..... 5
2	野球場防球ネット設置工事に伴う予備発掘調査	(横山) ..... 23
3	教育学部A棟改修工事に伴う予備発掘調査・立会調査	(田畠) ..... 37
4	里山整備工事に伴う予備発掘調査・立会調査	(田畠) ..... 41
5	新教育研究棟新営工事に伴う立会調査	(田畠) ..... 44
6	ビオトープ周辺雨水排水水管取扱工事に伴う立会調査	(田畠) ..... 47
7	仮設高圧線引込工事に伴う立会調査	(田畠) ..... 48
8	ため池整備工事に伴う立会調査	(横山) ..... 49
9	基幹整備(鉄筋管改修)工事に伴う立会調査	(横山) ..... 50
10	事務局外灯設置工事に伴う立会調査	(横山) ..... 51
11	第1事務局庁舎東駐車場カーポート設置工事に伴う立会調査	(横山) ..... 52
12	基幹環境整備(第1体育館周辺排水整備)工事に伴う立会調査	(横山) ..... 53
13	男子学生寮東側丘陵災害復旧工事に伴う立会調査	(横山) ..... 54
14	人文学部外灯改修工事に伴う立会調査	(横山) ..... 55
15	人文学部西側アプローチ改修工事に伴う立会調査	(横山) ..... 56
16	教育学部研究実験A棟改修電気設備工事に伴う立会調査	(横山) ..... 57
17	理学部ソーラー外灯設置工事に伴う立会調査	(田畠) ..... 58
18	農学部インターロックング設置工事に伴う立会調査	(田畠) ..... 59
19	農学部附属動物医療センター改修二期工事に伴う立会調査	(横山) ..... 60
20	農学部附属農場水田暗渠排水工事に伴う立会調査	(横山) ..... 68
21	農学部植物工場新営工事に伴う立会調査	(横山) ..... 76
22	男子学生寮新営工事に伴う立会調査	(横山) ..... 81
23	ラグビー場排水整備工事に伴う立会調査	(横山) ..... 85
24	アーチェリー場整備工事に伴う立会調査	(横山) ..... 86
25	テニスコート改修工事に伴う立会調査	(横山) ..... 87
26	共通教育講義棟改修工事に伴う立会調査	(横山) ..... 88
27	右影火薬場整備その他工事に伴う立会調査	(田畠) ..... 89
第3節	白石構内(白石遺跡)の調査	
1	教育学部附属山口小学校共用棟・教室棟B間渡り廊下屋根取扱工事 に伴う立会調査	(横山) ..... 90
2	教育学部附属幼稚園園内中庭池改修整備工事に伴う立会調査	(横山) ..... 91
3	教育学部附属山口中学校庭庇付工事に伴う立会調査	(横山) ..... 92
第4節	小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査	
1	小串宿舎B棟修理ガス管改修工事に伴う立会調査	(横山) ..... 93
第5節	常盤構内(山口大学工学部校内遺跡)の調査	
1	上工学部ガス管改修工事に伴う確認調査	(横山) ..... 94
第6節	光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査	
1	教育学部附属光中学校校舎改修工事に伴う本発掘調査・立会調査	(田畠) ..... 95
2	教育学部附属光中学校校舎改修工事(プレハブ建設)に伴う立会調査	(田畠) ..... 102
第7節	その他構内の調査	
1	秋砲団地(ヨット艇庫)浄化槽改修工事に伴う確認調査	(横山) ..... 103
付箇1	平成21年度 山口大学構内遺跡調査要項	104
付箇2	山口大学構内の土上な調査	107
第2章	平成21年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告	(横山) ..... 130
第1節	資料館における展示・公開活動	
1	第28回企画展「上のからコニチワ～山口大学発掘調査連報展2009～」を開催	(横山) ..... 131
2	第29回企画展『大学発道碑行き～やまぐら時空列車の旅～』を開催	(横山) ..... 132
3	学内連携企画展『鉱物・岩石七変化』を開催	(横山) ..... 133
4	『山口大学所蔵学術資料展』にて資料展・ワークショップを開催	(横山) ..... 134
5	人文学情報機構2009 in 常盤『Ees』にて資料展・ワークショップを開催	(横山) ..... 135
6	『山口大学所蔵学術資料展』にて資料展・ワークショップを開催	(横山) ..... 136
7	第10回～第11回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催	(横山) ..... 137
第2節	資料館における社会教育活動	
1	第9回公開授業 「古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－」を開催	(田畠) ..... 138
2	中学生職場体験の受け入れ	(横山) ..... 141
付篇1	山口県吉田遺跡出土植物遺体の同定調査報告	(吉田生物研究所) ..... 142
付篇2	下松市御屋敷山古墳の出土遺物	(横山) ..... 147

## 挿図目次

第1章第1節 平成21年度に実施した遺跡調査の概要	
図1 山口大学吉田・白石構内位置図	2
図2 小串・常盤構内位置図	4
図3 光構内位置図	4
第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査	
図4 調査区位置図	5
図5 調査区平面図・断面図	7・8
図6 自然河川埋土出土土器実測図	13
図7 自然河川埋土出土木製品実測図	14
図8 自然流路埋土出土土器実測図	19
図9 遺構面直上出土土器実測図	18
図10 調査区位置図	23
図11 調査区位置詳細図	25
図12 異色区平面図・断面図	27
図13 出土土器実測図	31
図14 山上石器・鉄器実測図	32
図15 調査区位置図1	37
図16 調査区設定図2	37
図17 調査区詳細図	39
図18 A調査区平面図・断面図	39
図19 異色区位置図	41
図20 調査区詳細図	42
図21 E調査区平面図・断面図	42
図22 調査区位置図	44
図23 D調査区平面図	44
図24 出土遺物実測図	46
図25 調査区位置図	47
図26 調査区位置図	48
図27 調査区位置図	49
図28 異色区位置図	50
図29 調査区位置図	51
図30 十層断面模式図（S=1/20）	51
図31 調査区位置図	52
図32 異色区位置図	53
図33 調査区位置図	54
図34 調査区位置図	55
図35 調査区位置図	56
図36 十層断面模式図（S=1/20）	56
図37 調査区位置図	57
図38 調査区位置図	58
図39 調査区位置図	59
図40 調査区位置図	60
図41 平成20年度調査区と平成21年度立会調査区 平面図・断面図	61
図42 出土土器実測図	63
図43 調査区位置図	68
図44 調査区十層断面図	69
図45 山上土器実測図	73
図46 調査区位置図	76
図47 調査区断面図	77
図48 出土土器実測図	77
図49 調査区位置図	81
図50 調査区上層柱状図	82
図51 調査区位置図	85
図52 調査区位置図	86
図53 調査区位置図	87
図54 調査区位置図	88
図55 十層断面模式図	88
図56 調査区位置図	89
第1章第3節 白石構内（白石遺跡）の調査	
図57 調査区位置図	90
図58 十層断面模式図	90
図59 調査区位置図	91
図60 上層断面模式図	91
図61 調査区位置図	92
図62 上層断面模式図	92
第1章第4節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査	
図63 調査区位置図	93
図64 十層断面模式図	93
第1章第5節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査	
図65 調査区位置図	94
第1章第6節 光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査	
図66 調査区位置図	95
図67 A・B調査区平面図・断面図	98

図68 SK 1～3 十層断面図	98
図69 山上遺物実測図	99
図70 調査区位置図	102
第1章第7節 その他構内の調査	
図71 調査区位置図	103
第1章付第2 山口大学の主な調査	
図72 山口大学吉田構内地区剖および上な 調査区位置図	123・124
図73 山口大学白石構内（幼稚園・小学校） 調査区位置図	125
図74 山口大学白石構内（中学校） 調査区位置図	126
図75 山口大学中牟病内調査区位図	127
図76 山口大学常盤構内調査区位図	128
図77 山口大学光構内調査区位図	129
付録2 下松市御屋敷山古墳の出土遺物	
図78 周辺古墳分布図	148
図79 御屋敷山古墳平面図・断面図	149
図80 山上遺物実測図	151

## 写真目次

第1章第1節 平成21年度に実施した遺跡調査の概要	
写真1 吉田構内航空写真	2
写真2 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校） 航空写真	2
写真3 白石構内（教育学部附属山口中学校） 航空写真	2
写真4 小中構内航空写真	4
写真5 常盤構内航空写真	4
写真6 光構内航空写真	4
第1章第2節 吉田構内（吉田通説）の調査	
写真7 調査区周辺遠景	5
写真8 調査前全景	5
写真9 南北トレント遺構検出状況	9
写真10 南北トレント遺構完掘状況	9
写真11 南北トレント北壁土層断面	10
写真12 南北トレント東壁土層断面	10
写真13 自然河川埋土内土器出土状況	10
写真14 自然河川埋土内木製品出土状況	10
写真15 自然流路完掘状況	10
写真16 自然流路埋土内土器出土状況	10
写真17 自然流路埋土断面	11
写真18 埋1完掘状況	11
写真19 東西トレント掘削状況	11
写真20 東西トレント完掘状況	11
写真21 東西トレント南壁土層断面	11
写真22 東西トレント南壁土層断面	11
写真23 自然河川埋土出土土器①	16
写真24 自然河川埋土出土土器②・木製品	17
写真25 自然流路埋土出土土器①	19
写真26 自然流路埋土出土土器②	20
写真27 遺構面高上山上上器	20
写真28 調査区周辺遠景	23
写真29 調査前全景	23
写真30 第1調査区遺構検出状況	28
写真31 第1調査区遺構検出状況	28
写真32 第1調査区南壁十層断面	28
写真33 第1調査区南壁上層断面	28
写真34 第2調査区遺構検出状況	28
写真35 第2調査区西部南壁土層断面	28
写真36 第2調査区東部南壁十層断面	29
写真37 第3調査区重機掘削風景	29
写真38 第3調査区遺物包含層削削状況	29
写真39 第3調査区遺構面検出状況	29
写真40 第3調査区西部南壁上層断面	29
写真41 第3調査区東部南壁十層断面	29
写真42 山上上器①	32
写真43 出土土器②	33
写真44 出土土器③・石器・鉄器	34
写真45 A調査区全景	39
写真46 A調査区北西部土層断面	39
写真47 B調査区全景	40
写真48 C調査区北西部土層断面	40

写真49 D 調査区全景	40	写真88 調査地点遠景	55
写真50 E 調査区南西壁上層断面	40	写真89 調査区上層断面	55
写真51 F 地点土層断面	40	写真90 調査区東壁土層断面	56
写真52 G 地点土層断面	40	写真91 C 地点南壁土層断面	57
写真53 G 地点土器出土状況	40	写真92 B 地点東壁十層断面	57
写真54 H 地点土層断面	40	写真93 A 地点土層断面	58
写真55 調査前全景	41	写真94 B 地点上層断面	58
写真56 横穴墓	41	写真95 調査区全景	59
写真57 Δ 調査区全景	43	写真96 調査区上層断面	59
写真58 C 調査区全景	43	写真97 平成20年度調査区谷埋土様出状況	60
写真59 E 調査区全景	43	写真98 平成20年度調査区谷埋土上層断面	60
写真60 I 地点全景	43	写真99 写真記録1 1十層断面	62
写真61 J 調査区全景	43	写真100 写真記録2 上層断面	62
写真62 K 調査区全景	43	写真101 写真記録3 十層断面	62
写真63 L 調査区全景	43	写真102 写真記録4 土層断面	62
写真64 M 調査区全景	43	写真103 写真記録5 十層断面	62
写真65 B 地点土層断面	44	写真104 写真記録6 土層断面	62
写真66 出土遺物	46	写真105 出土土器①	64
写真67 C 地点河川検出状況	46	写真106 出土土器②	65
写真68 C - 1 地点上層断面	46	写真107 調査前全景	71
写真69 D 地点遺構検出状況	46	写真108 第1区南側東西管路北壁土層断面	71
写真70 D 地点溝・柱穴完掘状況	46	写真109 第1区南北管路西壁上層断面	71
写真71 E - 1 地点土層断面	46	写真110 第1区南北管路西壁十層断面	71
写真72 F - 2 地点土層断面	46	写真111 第1 - 2区東西管路北壁土層断面	71
写真73 調査区東部	47	写真112 第4区東西管路北壁土層断面	71
写真74 A 地点土層断面	47	写真113 出土土器①	73
写真75 B 地点土層断面	48	写真114 出土土器②	74
写真76 C 地点土層断面	48	写真115 調査地点遠景	76
写真77 調査区周辺遠景	49	写真116 調査区北西壁上層断面	76
写真78 ため池堤断面	49	写真117 出土土器	79
写真79 Δ 地点上層断面	50	写真118 調査区周辺遠景	81
写真80 B 地点土層断面	50	写真119 調査区近景	81
写真81 調査区西壁断面	51	写真120 A 地点土層断面	83
写真82 工事計画地	52	写真121 B 地点十層断面	83
写真83 B 地点土層断面	52	写真122 C 地点土層断面	83
写真84 A 地点北西壁十層断面	53	写真123 D 地点十層断面	83
写真85 A 地点南西壁土層断面	53	写真124 E 地点遺構検出状況	83
写真86 被災の模様	54	写真125 F 地点遺構検出状況	83
写真87 復旧工事の模様	54	写真126 A 地点土層断面	85

写真127 B 地点土層断面	85	第1章第7節 その他構内の調査	
写真128 丘陵断面	86	写真162 調査区全景	103
写真129 日吉神社横穴墓	86	写真163 北壁土層断面	103
写真130 調査区全景	87	第2章第1節 資料館における展示公開活動	
写真131 D調査区北西壁土層断面	87	写真164 第28回企画展ポスター	131
写真132 調査区北西壁土層断面	88	写真165 展示の模様	131
写真133 B 地点上層断面	89	写真166 第29回企画展ポスター	132
写真134 G 地点土層断面	89	写真167 展示の模様	132
第1章第3節 白石構内（白石遺跡）の調査		写真168 学内連携企画展ポスター	133
写真135 土層断面	90	写真169 展示の模様	133
写真136 上層断面	91	写真170 山口大学所蔵学術資料展の模様	134
写真137 十層断面	92	写真171 大学情報機構2009 in 常盤Fes.	
第1章第4節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査		の模様	135
写真138 北西壁土層断面	93	写真172 山口大学所蔵学術資料展の模様	136
第1章第5節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査		写真173 第10回大学情報機構埋蔵文化財	
写真139 調査区全景	94	特別展	137
写真140 土層断面	94	写真174 第11回大学情報機構埋蔵文化財	
第1章第6節 光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査		特別展	137
写真141 調査前全景	95	第2章第2節 資料館における社会教育活動	
写真142 A・B調査区設定状況	95	写真175 繩ない	139
写真143 A調査区北西壁土層断面	96	写真176 苗の説明	139
写真144 B調査区北西壁上層断面	96	写真177 苗の観察	139
写真145 出土遺物	99	写真178 田植え	139
写真146 A調査区南西壁土層断面	100	写真179 稲の状況	139
写真147 B調査区北部北西壁土層断面	100	写真180 収穫具の説明	139
写真148 A調査区埴輪出土状況	100	写真181 稲摘み	139
写真149 A調査区遺構発掘状況	100	写真182 脱穀・初仕りの説明	139
写真150 A調査区須恵器出土状況	100	写真183 脱穀・初仕り1	140
写真151 A調査区SK1 上層断面	100	写真184 脱穀・初仕り2	140
写真152 A調査区SK2・Pit40土層断面	101	写真185 初仕り後の風景	140
写真153 A調査区SK3 上層断面	101	写真186 初仕り後の選別	140
写真154 B調査区遺構状況	101	写真187 足踏み脱穀機による脱穀	140
写真155 B調査区完掘状況	101	写真188 植と茎の使用状況	140
写真156 B調査区Pit25半蔵状況	101	写真189 ドングリクリッキー	140
写真157 C調査区全景	101	写真190 食事風景	140
写真158 C調査区北東壁土層断面	101	写真191 中学生職場体験風景	141
写真159 D調査区土層断面	101	付録1 山口県吉田遺跡出土植物遺体の同定検査報告	
写真160 調査区全景	102	写真192 試料1	143
写真161 A地点断面	102	写真193 試料2～6	144

写真194 試料 6～7	145	写真198 御屋敷山古墳推定地	148
写真195 試料 7	146	写真199 出土遺物（土器）	152
付録 2 下松市御屋敷山古墳の出土植物		写真200 出土遺物（鉄製品）①	153
写真196 御屋敷山古墳出土鉄針 ※保存処理前状況	147	写真201 出土遺物（鉄製品）②	154
写真197 御屋敷山浄水場	148	写真202 鉄製品 X 線画像①	155
		写真203 鉄製品 X 線画像②	156

## 表目次

第1章第1節 平成21年度に実施した遺跡調査の概要		表10 出土遺物（土器）観察表	100
表1 平成21年度山口大学構内遺跡調査一覧表	1	表11 山口大学構内の主な調査一覧	107
第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査		第2章 山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告	
表2 山上遺物（土器）観察表	21	表12 埋蔵文化財資料館利用者の推移	130
表3 出土遺物（木製品）観察表	21	表13 平成21年度月別入館者数	130
表4 山上遺物（土器）観察表	35	付録 1 山口県吉田遺跡出土植物遺体の同定調査報告	
表5 出土遺物（石器・鉄器）観察表	35	表14 分析試料一覧表	142
表6 山上遺物（土器）観察表	66	表15 植物遺体同定結果	143
表7 出土遺物（土器）観察表	75	付録 2 下松市御屋敷山古墳の出土遺物	
表8 出土遺物（土器）観察表	80	表16 出土遺物（土器）観察表	157
表9 遺構観察表	97	表17 出土遺物（鉄製品）観察表	157

# 第1章 平成21年度山口大学構内遺跡の調査

## 第1節 平成21年度に実施した遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口市(吉田・白石構内)、宇部市(小串・常盤構内)、光市(光構内)の県内各市に分散しているが、各構内は「周知の埋蔵文化財包蔵地」内、つまり遺跡の上に立地している。各構内の様相を概観すると、吉田構内は縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての全時代を網羅する複合集落遺跡として県内でも著名である古田遺跡内に、白石構内は弥生時代から古墳時代を中心

表1 平成21年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	本書掲載頁
本財團	教育学部附属光中学校校舎改修工事	光		96.2	5月18日～6月4日	95～101
	東アジア研究棟・経済学研究科新營工事	吉田	K-21	117	4月13日～4月24日	5～22
予備発掘	野球場防球ネット設置工事	吉田	H-23 I-24 K-24	40	7月8日～7月28日	23～36
	教育学部A棟改修工事	吉田	H-17・18 J-18 E-20	35.3	8月1日～8月20日	37～40
	里山整備工事	吉田	Q-10 O-P-Q-11	36.9	2月15日～2月17日	41～43
	新教育研究棟新營工事	吉田	L-13・14 M-11・12 N-12	340.5	7月2・3・6日 9月17日 11月18日	44～46
	ビオトープ周辺雨水排水管設置工事	吉田	H-12	60	3月29日～3月31日	47
	仮設高圧引込工事	吉田	L-M-10・11	7	3月19日～3月31日	48
	ため池整備工事	吉田	S-8	130	12月7日	49
	基礎整備(鉄筋管改修)工事	吉田	J-14・15	156	11月9・12日	50
	事務局外灯設置工事	吉田	J-14	1	8月21日	51
	第1事務局庁舎東駐車場カーポート設置工事	吉田	L-14	1.2	9月4日	52
	県幹・県境整備(第1体育館周辺排水整備)工事	吉田	H-13	300	3月25日	53
	男子学生寮東側丘陵災害復旧工事	吉田	N-8 O-8・9	200	2月2日	54
	人文学部外灯設置工事	吉田	N-21	10	6月11日	55
	人文学部西側アプローチ改修工事	吉田	M-20	750	2月16日	56
	教育学部研究実験棟A棟改修電気設備工事	吉田	K-18	40	12月28日	57
	理学館ゾーン外灯設置工事	吉田	O-20	0.3	10月21日	58
	農芸学部インターポッキング設置工事	吉田	P-17	9	3月3日	59
	農学部附風動物医療センター改修III期工事	吉田	S-19・20	154	5月28日～12月1日	60～67
	農学部附風農場水田暗渠排水工事	吉田	Q-15・16 R-15 S-15 T-15 U-15 V-15	96	11月16日～27日	68～75
	農学部植物工場新營工事	吉田	P-15	98	2月8日～10日	76～80
	男子学生寮新營工事	吉田	M-10・11	1350	9月14日～1月27日	81～84
	ラグビー場排水整備工事	吉田	E-20 F-21	58.6	2月12・13日	85
	アーチェリー場整備工事	吉田	N-7・8 O-7・8	750	2月23日・3月19日	86
	テニスコート改修工事	吉田	C-17 D-16・17 E-15・16	18.3	3月26日	87
	共通教育講義棟改修工事	吉田	L-17	11.6	3月15日	88
	石庭実習場整備その他工事	吉田	N-O-P-Q-9	29	9月8・15・17日	89
	教育学部附属山口小学校共用棟・教室B棟間渡り廊下下層根取り工事	白石		2.5	8月4日	90
	教育学部附属幼稚園園内中庭池改修整備工事	白石		50	8月17日	91
	教育学部附属山口中学校中庭根取り工事	白石		1.5	12月28日	92
	小串宿舎B棟改修設ガス管改修工事	小串		58	1月14日	93
	教育学部附属光中学校校舎改修工事	光		11.8	12月11日	95～101
	教育学部附属光中学校校舎改修工事に伴う一時ハザード建設工事	光		245	6月18日	102
確認	工学部ガス管改修工事	常盤		12.5	10月13日	94
	秋桜園地(ヨット駐車場)浄化槽改修工事	秋桜		4.5	9月19日	103

平成21年度に実施した道路調査の摘要

とした集落遺跡である白石遺跡内に、小巾・常盤構内は旧石器時代から江戸時代にかけての遺物が出土する山口大学医学部構内遺跡内・山口大学工学部構内遺跡内に、光構内は縄文時代から江戸時代にかけての集落遺跡・遺物散布地である御手洗遺跡と月待山遺跡内にまたがって位置している。

このような環境の下、山口大学埋蔵文化財資料館は山口大学構内に埋存する貴重な埋蔵文化財を保護・調査・研究・活用する施設として、昭和53年に教職員が配置されて以来、その重責を担い続けている。当館の平成21年度時の調査体制は以下の通りである。

まず、各構内において地下掘削を伴う工事が立案・計画された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において事業計画の確認を行った後、文化財保護法の諸手続の下、山口大学各構内が位置する地方公共団体(山口県および各市)の指導により、埋蔵文化財保護の立場から本発掘・予備発掘・立会の三種の方法で調査を厳密に行っている。「周知の埋蔵文化財包蔵地」外に位置する大学関連施設(職員宿舎等)敷地内で地下掘削を伴う工事が実施される場合においても、埋蔵文化財の新規発見の



写真1 吉田構内航空写真（南東から）



図1 山口大学吉田・白石構内位置図



写真2 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校）  
航空写真（東から）



写真3 白石構内（教育学部附属山口中学校）  
航空写真（南から）

可能性を考慮して、出来る限り工事掘削時に資料館員が確認調査を行っている。これらの調査に対する当館の現状の職員配置は、専任教員2名と教務補佐員1名、事務補佐員1名である。

上記の調査の結果で埋蔵文化財が確認された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において、遺跡のさらなる現状変更を避けるべく、工事計画、工事設計の変更等で現状保存が可能であるかどうかについて厳密な協議を行い、保存方法を選定している。また、調査成果については地方公共団体への報告後、内業整理等を経て可能な限り迅速に発掘調査概報(木書)を刊行している。

上記の調査体制の下、平成21年度に当館が実施した大学構内における埋蔵文化財の調査は、下記の通り本発掘調査1件、予備発掘調査4件、立会調査28件、確認調査2件の計35件であった。

#### 吉田構内(本部、人文・教育・経済・理・農の各学部:山口市吉田1677-1、教育学部附属養護学校:同吉田3003所在)

平成21年度の埋蔵文化財調査は吉田構内に集中し、その件数は予備発掘調査4件、立会調査22件を数える。経済学部南側空閑地にて実施した予備発掘調査では、弥生時代に埋没した自然河川とともに、東に近接し、現在遺跡保存公園として埋め戻し保存されている弥生時代集落が営まれた微高地の東縁辺部と見られる安定地盤を検出した。頗るな遺構は確認されなかつたが、弥生時代の生活環境を復元する上で極めて重要な調査結果となつた。自然河川埋土からは、弥生土器とともに木材2点が出土している。野球場防球ネット設置予定地にて実施した予備発掘調査では、弥生時代に形成された遺物包含層を確認するとともに、東側に設けた第1調査区にて時期不明の造構を多数確認した。遺物包含層からは弥生土器が多数出土している。教育学部A棟改修工事および里山整備工事に伴う予備発掘調査では頗るな埋蔵文化財は発見されなかつた。立会調査では、農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事や農学部附属農場水田暗渠排水工事、農学部植物工場新営工事、新教育研究棟新営工事など主として構内東部丘陵地において実施した調査にて、造構、遺物包含層、自然河川などが検出された。遺物としては奈良から平安時代の土器が多数出土している。

#### 白石構内(教育学部附属山口幼稚園:山口市白石一丁目1-2、西山口小学校:白石一丁目1-1、同山口中学校:白石一丁目9-1所在)

立会調査3件を実施した。この内、教育学部附属幼稚園園内中庭池改修工事では、造構の可能性を有する落ち込みを確認した。

#### 小串構内(医学部、同付属病院:半部市小串1丁目1-1)

立会調査1件を実施したが、埋蔵文化財に支障の生じるものではなかつた。

#### 常盤構内(1学部:半部市常盤台2丁目16-1、尼山寮:同上野中町2858-3所在)

確認調査を1件実施したが、埋蔵文化財の発見には至らなかつた。

#### 光構内(教育学部附属光小学校、同光中学校:光市室津8丁目1番1号)

本発掘調査1件、立会調査2件を実施した。教育学部附属光中学校校舎改修工事に伴う本発掘調査では、古墳時代中～後期のものと推定される多数のピットと土壙を検出し、光構内における埋蔵文化財の分布を知る上に貴重な成果を得ることとなつた。

この他、山口市秋穂田地(山口市秋穂東706-2)にて実施した浄化槽改修工事に伴う確認調査では、浜堤砂層中に黒色砂層を検出したが、遺物は確認できなかつた。

平成21年度に実施した道路調査の概要



図2 小串・常盤構内位置図



写真4 小串構内航空写真（南東から）



写真5 常盤構内航空写真（南から）



写真6 光構内航空写真（北東から）



図3 光構内位置図

## 第2節 吉田構内(吉田遺跡)の調査

### 1. 経済学部東アジア研究科・経済学研究科棟新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内K-21区

調査面積 117m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年4月13日～24日

調査担当 横山成己、藤野好博

#### 調査結果

##### (1) 調査の経緯(図4、写真7・8)

吉田構内南部、経済学部E棟南側駐車場地に経済学部東アジア研究科・経済学研究科棟の新営が計画されたことを受け、埋蔵文化財資料館専門委員会にて予備発掘調査を実施し、計画地下の様相を確認することが決定された(平成20年度第7回埋蔵文化財資料館専門委員会:平成21年1月26日開催)。調査対象地は校舎建設予定地となる東西22.5m、南北14m範囲である。

調査対象地の北隣接地においては、昭和55年(1980)に経済学部E棟(講義棟)新営に伴う試掘調査<sup>1)</sup>が、東隣接地においては平成6年(1994)に商品資料館新営に伴う試掘調査<sup>2)</sup>が、平成13年(2003)には経済学部校舎改修(プレハブ校舎新営)に伴う試掘調査<sup>3)</sup>がそれぞれ実施されている。これらは範囲を限定してのトレント調査であったが、いずれも表土・造成土下に旧耕土・旧床土、その下位に河川堆積土を検出している。一部河川堆積土から縄文土器小片が出土しているが、顕著な埋蔵文化財は確認されていない状況である。

当開発予定地においても同様の成果が予想されたが、予定地の北西方約70mには弥生時代の集落址が確認された「遺跡保存公園」調査地が存在しており、集落造営に適した安定的微高地が検出される可能性も排除できなかった。よって、開発予定地の南縁から西縁にかけて、幅2mでL字形に予備発掘調査区を設け、調査を実施する運びとなった。

#### 【註】

1) 河村吉行(1992)「吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調



図4 調査区位置図

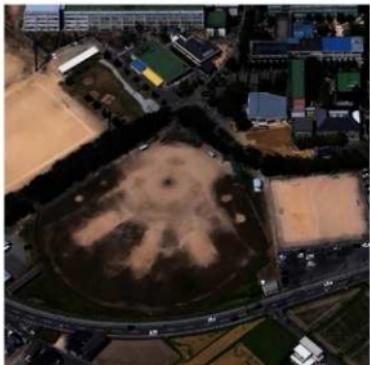


写真7 調査区周辺遠景 (南上空から)



写真8 調査前全景 (南西から)

- 表」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、山口  
2)豆谷和之(2000)「経済学部商品資料館新館工事に伴う試掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調  
査研究年報 XIV』、山口  
3)調査報告書未刊行

#### (2) 調査の経過

調査は平成21年4月13日より着手した。L字形トレントの東西トレント東端部より西方に重機掘削を進めたところ、想定通り旧耕土・旧床土下に河川堆積土が検出された。河川堆積土上面を追ってさらに西方に掘削を続けたところ、調査区西端部(L字形トレントコーナー)から東4.8m地点より地山と目される明黄色粘土層が確認された。この粘土層は開発予定地西縁部に設けた南北トレント全面に広がっており、その上面には部分的に遺構が存在することも判明した。

この結果から、開発予定地は遺跡保存公園弥生集落址が形成された微高地の東縁部に当たることが予想された。幅2mで設定したトレント調査では、この微高地が東方にどの程度存在するのかが不明確であったため、①予備発掘調査後の本発掘調査の実施、②予備発掘調査範囲の拡大の両者を視野に埋蔵文化財資料館と開発部局である施設環境部との調整が行われた。その結果、本体工事着手までの期日と発掘調査費用の軽減を鑑み、開発予定地内縁部に設けた南北トレントを東に4m拡張し、地山と目される明黄色粘土層の範囲を確認することとなった。

その後、季節外れの台風に見舞われたものの、調査は順調に進行し、着手より2週間後の4月24日に予定通り終了することとなった。

#### (3) 基本層序(図5、写真11・12・19~22)

東西トレント南壁に見る基本層序は①アスファルト(0.05m)、②造成土(0.4~0.6m)、③灰色(10Y4/1)粘質土に5mmの礫が極少量混ざる…旧耕土(0.05~0.2m)、④灰オリーブ色(5Y6/2)質度に5mm以下の礫が極少量混ざる…旧床土(0.2~0.4m)、⑤河川堆積土もしくはにぶい黄色(2.5Y6/3)粘土…地山、である。⑥層として、河川堆積底面の地山として他に明緑灰色(5G7/1)砂質土、明緑灰色(5G7/1)シルトも見られる。

南北トレントにおいては、部分的に③の旧耕土が削平されている状況が見られたが、それ以外の堆積状況に差はなく、開発予定地全域において基本層序は統一的なものであることが予想される。

#### (4) 遺構

自然河川、自然流路、溝が確認された。

#### 自然河川(図5、写真9・10・12~14・19~22)

従来より経済学部敷地において過去において自然河川が集中することが指摘されてきたが、その西限部を確認することができた。河川は、その底面の傾斜によって走向を確定することはできないが、周辺地形および現況地形、既往の調査成果等により、南から北に走るものと思われる。河川幅は東西トレント南壁で18.9mを測るもの、上層断面や地山の遺存状況を見るにこれは一時の河川幅ではなく、河道の変化や氾濫を繰り返した結果と見られるが、今回は厳密な精査を実施していない。河川の深度は最深部で0.75m以上となる。

河川堆積土の掘削は東西トレント部は全て重機により行い、人力掘削は南北トレントのみで行った。

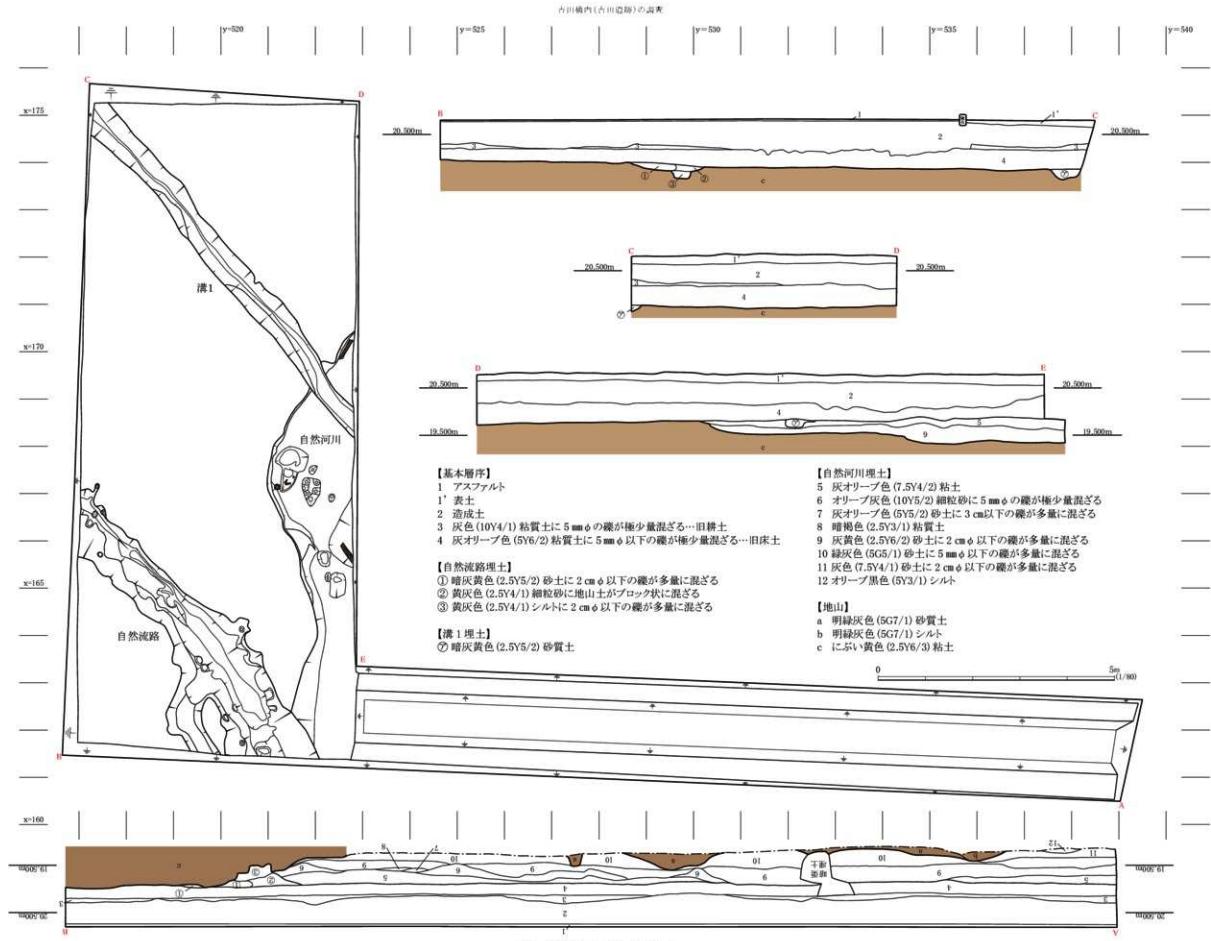




写真9 南北トレンチ遺構検出状況（北西から）



写真10 南北トレンチ遺構完掘状況（北から）

古川橋内(古川道路)の調査



写真 11 南北トレンチ北壁土層断面（南から）



写真 12 南北トレンチ東壁土層断面（北西から）



写真 13 自然河川埋土内土器出土状況（東から）



写真 14 自然河川埋土内木製品出土状況（北から）



写真 15 自然流路完掘状況（北西から）



写真 16 自然流路埋土内土器出土状況（南東から）



写真 17 自然流路埋土断面 (東から)



写真 18 溝1完掘状況 (北西から)



写真 19 東西トレンチ掘削状況 (西から)



写真 20 東西トレンチ完掘状況 (西から)



写真 21 東西トレンチ南壁土層断面 (北西から)



写真 22 東西トレンチ南壁土層断面 (北東から)

そのため、遺物は全て南北トレンチに検出された河川埋土からの出土となることを断った上で河川の埋没時期を推察すると、河川堆積であるため検出した上層(灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘土)・下層(オリーブ灰色(10Y5/2)細粒砂に5mmの礫が極少量混ざる)には時期の異なる資料の混在が見られ、明確な時期差を見出すことは困難であるものの(図6)、河川としては弥生時代終末期、少なくとも古墳時代前期までに埋没を終えたものと思われる。また、河川埋土内からは用途不明品であるが木材2点が出土している(図7、写真14)。

#### 自然流路(図5、写真8・9・15~17)

南北トレンチ南西部にて検出した。形状と堆積土質から自然流路と判断しているが、北東に平行する溝1と走向を等しくしていることは注意が必要であろう。

南壁断面図と西壁断面図を見ると流路は北西から南東に走っているかに思えるが、全体的な底面の傾斜は南東ー北西方向の流路であったことを示している。南東部で2筋に分岐していた流路は北西に向かい合流し1筋となっている。流路幅は南東端部で約1.6m、北西端部で約1m、深さは最深部で約0.45mを測る。流路埋土は南東部で明確に自然河川埋土を切り込んでおり、自然河川理渉後に形成されたことが分かる。

流路埋土は大きく①上層…暗灰黄色(2.5Y5/2)砂土に2cmの礫が多量に混ざる、②中層…黄灰色(2.5Y4/2)細粒砂に地山上がブロック状に混ざる、③下層…黄灰色(2.5Y4/2)シルトに2cmの礫が多量に混ざる、に分層される。下層の上に中層が堆積するが、上層は中層を抉り込むように堆積しており、強い水流があつたことを窺わせている。

遺物は上～下層すべてに包含されている(図8)。最下層出土遺物から、この流路の形成時期を6世紀後半から7世紀前半と見なしておきたい。

#### 構1(図5、写真8・9・18)

南北トレンチ北部にて検出した。埋積土はかつて水流があつたことを窺わせるが、断面形態および不自然に直線的であることから、人工物と判断した。上記の自然流路同様北西ー南東方向に延びるが、底面は南東ー北西に低下していることから、水流の方向も自然流路と同様であったことが分かる。幅は約0.4m～0.7m、深さは最深部で0.2mを測る。

なお、南北トレンチで検出した地山面には人または家畜の足跡と見られる凹みが多数検出された。土地の耕作に伴うものであろうが、その方向は溝1と同一であるように思われた。溝1の南西に平行して検出された幅約0.5～1mの灰オリーブ色粘土は、旧耕土との分層が不可能であったため、これも人または家畜の通路となっていた凹みに旧床土が埋積したものと判断している(写真9)。

#### (4) 遺物(図6～9、写真23～27)

当調査において出土した遺物は、自然河川埋土出土、自然流路埋土出土、南北トレンチ造構面(地山)直上(旧床土最下面)出土資料に大別される。土器の大半は小片であったが、できる限りの図化作業を行った。以下に報告を行う。

#### 自然河川埋土(図6・7、写真23・24)

前述したが、遺物は南北トレンチにて検出した埋土にのみ確認した。埋土は上層、下層に分層され、両層とも遺物を包含している。

1～3は上層出土土器。1は縄文土器深鉢口縁部片。尖り気味の口縁下に刻目突起を巡らす。全面風化が著しく、器面調整の観察は困難であるが、内面の極一部に横ハケ状の痕跡が見られる。2は弥生

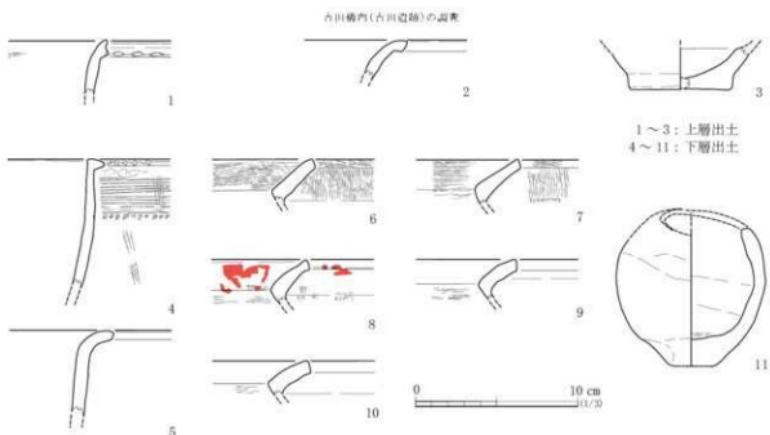


図6 自然河川埋土器実測図

上器鉢類の口縁部か。口縁を緩やかに外反させ、端部は横ナデにより面とりを行っている。下端部は断面三角形状に肥厚させている。3は弥生土器底部片。平底の底部から渦き気味に体部に立ち上がる。底径6.0cm、残高2.6cmを測る。内外面ともナデ調整のみ観察される。

4～11は下層出土土器。4は弥生土器壺口縁一体部片。小片のため反転復元不能である。胴部は膨らまず砲弾状の器形となる個体であり、口縁上端は横ナデにより面が形成され、ほぼ直角に折り曲げた口縁外端部に不明瞭ながら刻みを施しているようである。口縁下の外面には6条単位の櫛描き沈線を上下に2条施しており、その直下に左下→右上方向の刺突文を横方向に連続して施している。全面風化が著しいが、外面には部分的に縦ハケが残る。内面は剥離が激しく調整は観察できない。5も弥生土器壺口縁一体部片。小片のため反転復元不能。直線的に立ち上がる胴部から口縁は緩やかに外反する。口縁端部はナデにより面を取るようである。内外面とも風化が激しく調整痕は残らない。6～11は壺堀類の口縁部小片で、いずれも反転復元不能である。6はくの字に強く屈曲する口縁部片で、外面に縦ハケ、内面に横ハケが明瞭に残る。端部はハケ調整により面が形成されている。7も同様の特徴を有するが、口縁断面形態が異なるため別個体と判断した。8も同じくくの字状に強く屈曲する口縁部片であるが、口縁端部付近の内外面を強く横ナデするため口縁内外端が肥厚するように見える。端部は横ナデにより面を取る。外面には縦ハケ、内面には横ハケが施されており、内外面ともに部分的に赤色塗彩が残る。9・10も同様にくの字状に強く屈曲する口縁部片であるが、器壁が厚く口縁も短い。内外面を横ナデし、端部もナデにより面取りする。11は出土上器類中唯一完形に復元可能な小型鉢である。自然河川西肩部より出土している(図5、写真13)。口縁から底部までが遺存しているが、口縁の大部分を欠失する(写真24の11a,b)。小ぶりながら平底の底部から、内湾気味に体部に立ち上がる。胴は球形に膨らむがゆがみが大きく、口縁も大きく傾くようである。器壁の厚みも安定せず、体部低位に比して口縁付近が厚くなる。部分的にしか遺存していないが口縁端部は面を取るようである。内外面ともわずかに指押さえ痕が見られる他、器面調整痕は観察されない。復元口径は5.0～5.8cm、胴部最大径9.2cm、底径2.4cm、残高8.45cmを測る。

この他、図示不能な土器小片が数点存在するが、大半は弥生土器壺堀類の破片と見られる。

古川橋内(古川道路)の調査

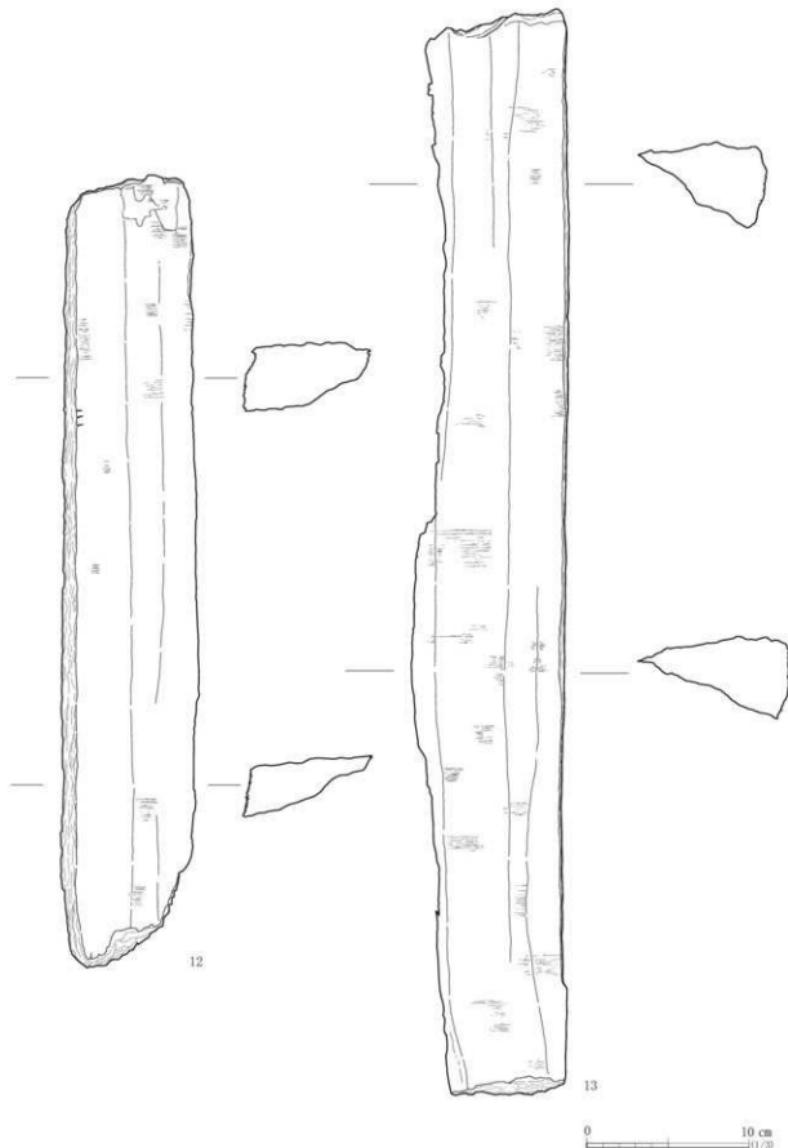


図7 自然河川埋土出土木製品実測図



写真23 自然河川埋土出土土器①

古川橋内(古川道路)の出土



8a



9a



10a



8b



10b



11a



11b



12



13

写真24 自然河川埋土出土土器②、木製品

前記の土器類の他、自然河川埋立から出土している(図7)。いずれも下層出土品である。12は検出した河川の北端部から出土した(図5、写真14)。片平面を斜辺とする断面直角三角形状の板材である。所々に擦痕が見られる他に明確な加工痕は観察できない。残長48.7cm、最大幅12.5cm、最大厚4.0cmを測る。13はその南方約4.4m地点から出土している(図5)。片端部が調査区東壁に差し込まれた状態で出土したが、調査終了時に引き抜きを行った。12と同様の形態、特徴を有する資料であるが、両者は接合しない。残長65.8cm、最大幅9.45cm、最大厚5.2cmを測る。

#### 自然流路埋土(図8、写真25・26)

埋土は上層、中層、下層に分層され、いずれの層からも土器が出土している。

14~19は上層出土土器。14は弥生土器鉢口縁部片か。口縁を屈曲気味にやや強く外反させる。口縁端部は丸く取める。内外面とも横ナデが施されている。15は弥生土器底片。厚みのある平底の底部片であり、体部との接合部分で折損している。体部下端外面には継方向のヘラミガキが施されている。復元口径8.3を測る。16も弥生土器底部片と見られる。15に比して器壁が薄い。風化が激しく内外面とも調整の観察は不能である。17は土師器兜の口縁部片。全面風化が激しく器面調整が不明であるが、端部は面を取っているようである。18も土師器兜口縁部片。短く外反する口縁部片で、端部は丸く取める。器壁の厚い頸部から口縁にかけて徐々に器壁が薄くなっている。外面は横ハケ後横ナデ、内面は横ナデが施されており、頸部外面上には斜線ヘラ記号が部分的に遺存している。19は須恵器環蓋口縁一天井部片。小片であるが、歪みがないと仮定すると復元口径は14.5cm内外となる。天井部から屈曲して口縁に至る。口縁端部は尖り気味に丸く取める。天井部外面上に回転ヘラ削り、口縁内外面に回転ナデ調整が施される。

20~21は中層出土。図化不能資料を含め、上・下層に比して中層の土器包含量は少ない。20は須恵器环身口縁部片。小片であるため径は復元できない。受け部から口縁にかけての破片であるが、口縁端部を欠失している。21は壺蓋類の口縁部片か。胎土は精緻であるものの焼成不良品である。口縁外面を肥厚させているが、粘土の折り曲げか付加によるものか判別できない。

22~23は下層出土。22は須恵器环蓋であり、口縁の大部分を欠失するものの完形に近く、遺存状態も良好である(写真26の22a,b)。検出された自然流路の北西端部付近において、底面に接する状態で出土している(写真16・17)。丸みを帯びた天井部から内湾して口縁に至り、口縁端部を尖り気味に丸く取める。天井径3.7cm、復元口径12.8、器高4.0cmを測り、口径に比して器高が高く、ドーム状の器形を呈する。器壁は分厚く、天井部外面上1/4に回転ヘラ削り、以下に回転ナデ調整が施されており、内面は天井部にのみ不定方向の直線ナデが、以下は回転ナデ調整が施されている。平面形態はやや歪みがあり、梢円形状となっている。23は土師器兜口縁部片。器壁が分厚く、外面を強く横ナデしながら外反させている。口縁端部は鈍く面を取っている。小片であるが、歪みが少なければ復元口径は17cm内外となる。

この他、自然流路からも數十点の土器小破片が出土しているが、いずれも図化不能資料であり、大部分は弥生土器または土師器の壺蓋類部片である。

#### 遺構面直上(図9、写真27)

重機掘削後、遺構面(地山)検査中に出土した遺物で、所属層は基本層序第4層…灰オリーブ色(5Y 6/2)質度に5mmφ以下の礫が極少量混ざる(旧床土)となる。遺物出土量は少なく、図化可能資料も4点に過ぎない。

24は須恵器环蓋口縁部片。小片であるため口径復元不能である。天井部から緩やかに内湾しながら下降し、口縁をわずかに外反させる。端部は尖り気味に丸く取っている。風化が著しく、内外面ともほぼ

## 古川橋内(古川遺跡)の調査

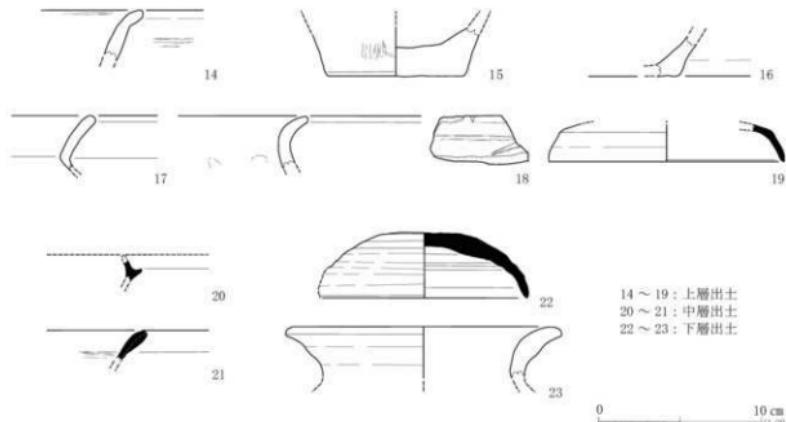


図8 自然流路埋土出土土器実測図

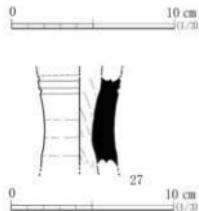


図9 造構面直上出土土器実測図

原面を留めない。25は須恵器高台付环底部片。高台端部を欠失する。高台は底部外端のわずかに内側に付き、ハの字状に開くものと思われる。体部は開き気味に直線的に立ち上がる。外面は底部に不定方向の直線ナデ、以外は回転ナデが施される。内面造存部は全て回転ナデ。26も須恵器高台付环底部片。当資料も高台端部を欠失するため、高台接合部で反転復元を行った。底部外端に器壁が厚く、長くハの字状に開く高台が付加されている。端部は欠失するが、突出する内端部で接地するタイプである。高台内外面に回転ナデが施されるが、外面は部分的に縦方向のヘラナデが行われている。内面は底面中央部に不定方向の直線ナデ、外縁部に回転ナデが施されている。27は須恵器長頸壺頸部片。器壁は厚く、最大厚1.4cmを測る。外面には平行する沈線2条が巡る。器面調整は外面に回転ナデが施され、内面にはしづり痕が残る。

## (5)まとめ

この度の調査の最大の成果は、存在が予想されつつもこれまでに確認することができなかった、弥生時代集落(遺跡保存公園)が造営された沖積平地内微高地の南東縁辺部が確認されたことにある。ただし、当地に確認された基本層序から、本学統合移転前には微高地はすでに大きく削平されていたものと推定される。その削平の要因は、中世以降の農地拡大に求められる。統合移転前の調査地周辺の土地利用状況は、南東から北西に延びる丘陵を活用した棚田および区画水田となっており、高地は階段状に削平され、低地は区画を設けることにより水田化が図られている。沖積平地に当たる調査地は、微高地であるが故にその上面を大きく削平されたのである。また、集落造営時に河川を望んでい

古川橋内(古川道路)の出土



写真25 自然流路埋土出土土器①



20

21

23



22a

22b

写真 26 自然流路埋土出土土器②



24

25

26



27a

27b

写真 27 遺構面(地山)直上出土土器

表2 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁②底面③側面	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	自然河川上層	溝文土器 深鉢	口縁部		①黄灰色(2.5Y4/1) ②黒色(2.5Y2/1)	やや粗: 0.3~1mmの砂粒 多く混ざる	斜面突堤を 有する
2	自然河川上層	弥生土器 鉢か	口縁部		①浅黄色(2.5Y7/3) ②黒褐色(10YR7/3)	やや粗: 0.5~4mmの砂粒 多く混ざる	
3	自然河川上層	弥生土器 壺	底部	②(6.0)	①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)	密: 0.5~1.5mmの砂粒多く 混ざる	
4	自然河川下層	弥生土器 壺	口縁~体部		①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密: 0.3~2mmの砂粒少量 混ざる	口縁端部切 目: 6条単位の 櫛揃文が 2条施される
5	自然河川下層	弥生土器 壺	口縁~体部		①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰白色(10YR8/2)	やや粗: 0.5~4mmの砂粒 多量に混ざる	風化激しい
6	自然河川下層	弥生土器 壺	口縁部		①にぶい褐色(7.5YR7/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密: 0.3~1mmの砂粒極少 量混ざる	
7	自然河川下層	弥生土器 壺	口縁部		①暗黒色(N3/) ②浅黄色(2.5Y7/3)	密: 0.3~0.5mmの砂粒少量 混ざる	
8	自然河川下層	弥生土器 壺	口縁部		①灰白色(10YR8/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/3) 鑿痕: にぶい褐色(5YR6/4)	密: 0.2~2mmの砂粒少量 混ざる	内外面に鑿 痕が見られ る
9	自然河川下層	弥生土器 壺	口縁部		①灰白色(10YR8/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密: 0.5~2mmの砂粒やや 多く混ざる	
10	自然河川下層	弥生土器 壺	口縁部		①②にぶい黄橙色 (10YR7/4)	粗: 1mm以下の砂粒多く混ざ る	風化激しい
11	自然河川下層	弥生土器 小型鉢	完形	①(5.0~5.8) ②2.4~0.845	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②褐色(7.5YR7/6)	密: 0.3~2mmの砂粒やや 多く混ざる	ゆがみが大 きい
14	自然流路上層	弥生土器 鉢か	口縁部		①②灰黄色(2.5Y7/2)	密: 0.1~3mmの砂粒多く混 ざる	
15	自然流路上層	弥生土器 壺	底部	②(8.3)	①灰白色(2.5Y8/2) ②浅黄色(2.5Y8/3)	粗: 1~3mmの砂粒多く混ざ る	
16	自然流路上層	弥生土器 壺か	底部		①浅黄褐色(10YR8/3) ②暗灰色(N3/)	密: 0.1~2mmの砂粒少量 混ざる	
17	自然流路上層	土師器 壺	口縁部		①②浅黄色(2.5Y8/3)	やや粗: 0.5~1.5mmの砂粒 多く混ざる	風化激しい
18	自然流路上層	土師器 壺	口縁部		①灰黄褐色(10YR6/2) ②灰色(5Y4/1)	密: 0.1~0.5mmの砂粒極少 量混ざる	外面にヘラ 印跡あり
19	自然流路上層	須恵器 壺蓋	口縁~ 天井部	①(14.5)	①灰色(N6/) ②灰色(N7/)	密: 0.1~0.5mmの砂粒極少 量混ざる	
20	自然流路中層	須恵器 壺蓋	口縁~ 受け部		①②灰色(N6/)	密: 0.1~1.5mmの砂粒極少 量混ざる	
21	自然流路中層	須恵器 壺か壺	口縁部		①灰白色(2.5Y8/1) ②黄灰色(2.5Y7/1)	精緻	焼成不良
22	自然流路下層	須恵器 壺蓋	完形	①12.8 ③4.0	①②灰白色(N7/)	密: 0.1~2mmの砂粒少量 混ざる	ややゆがみ が大きい
23	自然流路下層	土師器 壺	口縁部	①(17.0)	①②灰黄褐色(10YR6/3)	密: 0.1~3mmの砂粒多く混 ざる	
24	遺構面直上	須恵器 壺蓋	口縁部		①②灰色(N6/)	密: 0.1~1mmの砂粒やや 多く混ざる	風化激しい
25	遺構面直上	須恵器 高台付坪	底部		①②灰白色(N7/)	密: 0.1~0.5mmの砂粒極少 量混ざる	高台端部欠 損
26	遺構面直上	須恵器 高台付坪	底部		①灰白色(N7/) ②灰白色(2.5Y7/1)	密: 0.5mmの砂粒極少量混 ざる	高台端部欠 損
27	遺構面直上	須恵器 長頸壺	頸部		①灰白色(N7/) ②灰色(N6/)	精緻	沈縫2条透 る

表3 出土遺物(木製品)観察表

法量( )は残存値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
12	自然河川下層	木材	残存長(48.7) 残存最大幅(12.5) 残存最大厚(4.0)	所々に擦痕が見られる
13	自然河川下層	木材	残存長(65.8) 残存最大幅(9.45) 残存最大厚(5.2)	所々に擦痕が見られる

た弥生人は、その河川の埋没とともに集落を放棄し、より高所の低丘陵上に移住したものと想像される。

微高地土面が大きく削平され、自然流路や溝など深度の深い遺構しか遺存していないために、河川埋没後の土地活用状況は不明確である。想像をたくましくすれば、自然流路埋土<sup>a</sup>および地山直上精査時の出土遺物から、弥生集落放棄後は6世紀後半以降7～9世紀にかけて再び調査区周辺地において人類活動が再開されたものと思われる。しかしながら、既往の調査により周辺地において遺構が確認された事例ではなく、該当期の遺構はさらに東一北東方向の丘陵地にのみ確認されている。<sup>b</sup>

なお、確認された微高地は北に隣接する経済学部E棟(講義棟)敷地では確認されていないことから、南北トレンチの北で急に西折するものと予想される。これは、遺跡保存公園の北東に隣接しつつ自然河川もしくは流路しか確認されていない第1学生食堂敷地と関連し考えなくてはならない問題であろう。微高地の南限域に關しては、野球場、ハンドボール場などが位置するため有力な地下の情報が存在しない状況にある。

今回の新校舎建設により経済学部周辺の空閑地はさらに狭まり、南に運動場施設が隣接することからも、調査地周辺における新規建物等が計画される可能性は極めて低いと思われる。ただし、吉田地区統合移転工事中に発見され、吉山遺跡を象徴し、今まで保存されている弥生時代集落を取り巻く古墳群には未だ不明部分が多く残される。周辺地においては、設備工事等小規模工事に際しても、地下の様相を確認するために丁寧な埋蔵文化財保護対応を行うことが望まれる。

#### 【注】

- 1)a:河村吉行ほか(1985)「吉田橋内大学企画新宮に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口
  - b:田嶋直彦(2002)「平成10年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
  - c:田嶋直彦(2002)「平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
  - d:横山成己(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報一平成18年度一』,山口
  - e:横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報一平成20年度一』,山口
- 2)山口大学吉田遺跡調査会(1976)小野忠照(編)『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査報告』,小野忠照(編),山口

## 2. 野球場防球ネット設置工事に伴う予備発掘調査

調査地区 古田構内H-23区、I-24区、K-24区

調査面積 40m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年7月8日～28日

調査担当 横山成己 藤野好博

## 調査結果

## (1) 調査の経緯(図10、写真28・29)

吉田構内南西部に位置する野球場において、外野ホームランゾーン外周に防球ネットを設置する工事計画が立案された。開発予定地周辺は調査歴が少なく、わずかに昭和42年(1967)に本学小野忠熙氏により実施された吉田遺跡第III地区東南区調査と、山口市教育委員会と埋蔵文化財資料館の合意により実施された市道神郷1号線および問田神郷線の送水管埋設に伴う立会調査があるに過ぎない。

前者に関しては調査記録が曖昧であり、本学吉田地区統合移転完了後に刊行された発掘調査概報に「第III地区東南区 野球場予定地の南東縁付近に弥生土器が出たことから、仮設排水溝とその周辺部の試掘調査を行った。その結果、溝の底より約10cm深いところに弥生前期の生活面があることがわかった。また、それより約50cmばかり高いところに、黒色シルトが充填した弥生中期の縦穴住居跡が埋存していることを明らかにすることができた。」という報告文と出土遺物が残るのみである。また後者に関しては工事中の立会調査ということで上層断面の部分的な柱状図しか報告されておらず、球場南西部に弥生時代の遺物包含層が堆積しており、その下位に弥生時代の遺構が存在する可能性が高いことが指摘されているに過ぎない。

工事計画は、既設の外野フェンスに沿って新規の支柱を19本埋設するというものであるが、ボーリング掘削工事中の立会調査では地下の状況を把握することが困難であること、また工事予定地に弥生時代の集落跡が存在する可能性が高いことなどから総合的に判断し、地下的状況を把握すべく予備発掘調査を実施することが提案され、了承された(平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会)



図10 調査区位置図

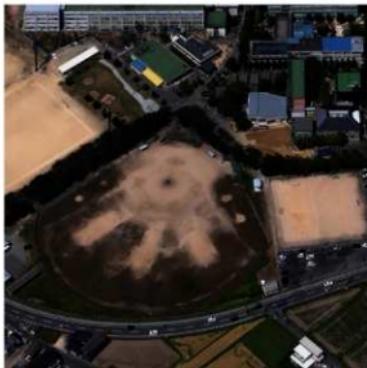


写真28 調査区周辺遠景(南上空から)



写真29 調査前全景(西から)

会;平成21年3月18日開催)。

#### 【註】

- 1)山口大学古川道路調査団(1976)『山口大学構内古川道路発掘調査概報』,小野忠照(編),山口
- 2)a:河村吉行(1987)「市道神郷1号線および開田神郷線の透水管埋設に伴う立会委調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)  
『山口大学構内道路調査研究年報VI』,山口
- b:鶴田潔(1991)「吉田透跡」,鶴田潔(編)『吉田透跡・障子岳南(山木水園)遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第40集),山口

#### (2) 調査の経緯(図11)

調査区の設定に関しては、開発予定地に調査区を設定すると後に支柱の安定性が保持できないとの指摘から、開発予定地から野球場方向に2.5m移動した地点3ヶ所に調査区を設定した。諸々の事情から、調査区規模は東から第1調査区(1m×20m)、第2調査区(1m×10m)、第3調査区(1m×10m)となっている。調査経過は以下の通りである。

7月8日(木)…3調査区の重機掘削

7月9日(木)・13日(月)・14日(火)…第3調査区 包含層掘削、造構面・断面精査、諸記録作成

7月15日(水)・16日(木)・22日(水)…第2調査区 包含層掘削、造構面・断面精査、諸記録作成

7月23日(木)・24日(金)・27日(月)…第1調査区 造構面・断面精査、諸記録作成

7月28日(火)…3調査区の埋め戻し

調査は予定通り実働11日で終了したが、元来が梅雨時期であり、さらに7月21日に山口県を襲った豪雨災害を受け、第2調査区調査実施中に長期間発掘現場を封鎖することとなった。

#### (3) 基本層序

##### 第1調査区(図12、写真32・33)

第1調査区の基本層序は①表土および造成土(層厚0.7~1.0m)、②地山、である。

造成土直下が地山であり、地山面は微弱な高低差を有するが標高20.7m内外でほぼ水平である。本学吉田地区移転時の造成工事により旧耕土・旧床土・旧堆積層・地山が削平されたものと推定される。よって地山上面が造構検出面となっている。

##### 第2調査区(図12、写真35・36)

第2調査区の基本層序は①表土(層厚0.4~0.6m)、②造成土(層厚0.04~0.22m)、③黄褐色(2.5Y5/6)砂質土…旧床土(層厚0.07m)、④黒褐色(2.5Y3/1)粘質土…遺物包含層(層厚0.05~0.09m)、⑤暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質土…遺物包含層(層厚0.22m)、⑥地山、である。

この調査区においても地山上面が造構検出面となっており、調査区東端部で地山検出面は標高20.5mを測るが、西に向かい徐々に降下し、調査区西端部では標高20.2mが検出面となる。この地山降下部に上下2層の遺物包含層が形成されている。調査区東端部は造成土直下地山となっていることから第1調査区と同様の削平が行われたものと見られるが、旧床土の遺存状態から見て、当地が耕地化した際にも旧地形は一定の削平を受けているものと推察される。

##### 第3調査区(図12、写真40・41)

第3調査区の基本層序は①表土(層厚0.2~0.4m)、②造成土(層厚0.18~0.33m)、③にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土…旧耕土(層厚0.04m)、④褐色(10YR4/4)砂質土…旧床土(層厚0.07~0.17m)、⑤黄褐色(2.5Y5/4)砂質土…旧耕土(層厚0.04~0.08m)、⑥黄褐色(2.5Y5/6)砂質土…旧床土(層厚0.

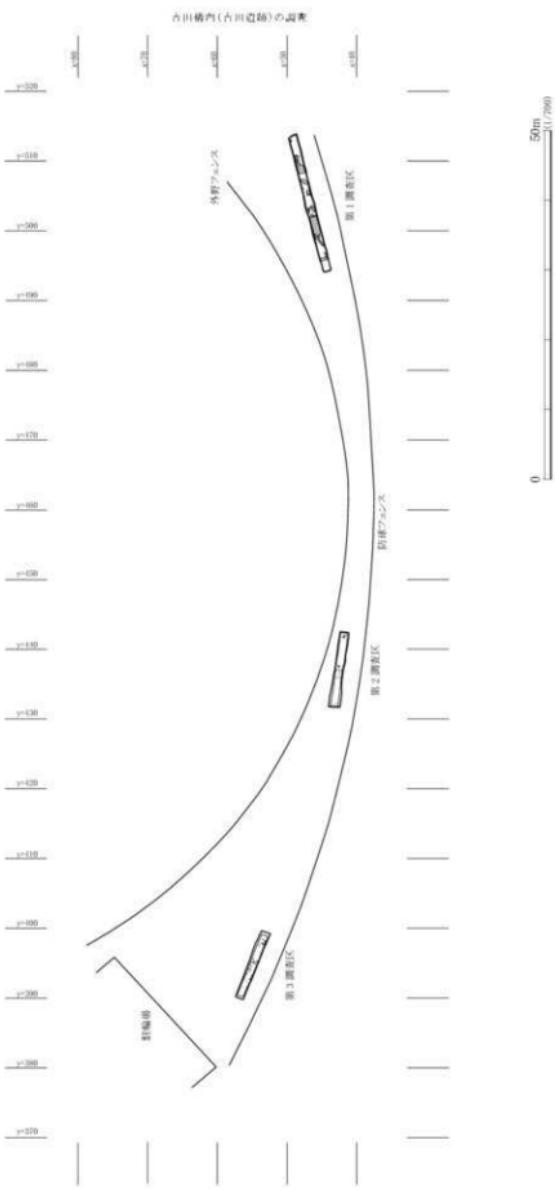


図 11 調査区位置詳細図

04～0.1m)、⑦黒褐色(2.5Y3/1)粘質土…遺物包含層(層厚0.12～0.22m)、⑧暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土…遺物包含層(層厚0.02～0.08m)、⑨暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質土…遺物包含層(層厚0.09～0.27m)、オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質土…地山、である。

第1・2調査区同様、地山上面が造構面となっているが、地山は調査区東端部においては標高20.02mで検出され、西に向かって緩やかに降下し、西方約6m地点で最深部となり、標高19.66mを測る。その後西方に再び上昇し、調査区西端部では標高19.84mで検出される。包含層は調査区全域に堆積しているが、第2調査区にて確認された2層の遺物包含層間に、調査区東端から1.6m地点より土質の異なる薄い遺物包含層が形成されている。

この他、調査区西端部において表土下に地山上面にまで達する擾乱坑を確認した。配管埋設に伴う掘削とも見られず、掘削底面が不自然に地山上面に一致することから、「仮設排水溝とその周辺部の試掘調査を行った」と報告される昭和42年(1967)の試掘トレンチと想像される。

#### (4) 造構

今回実施した予備発掘調査では、開発域における地下の状況を確認することを目的としたものの、開発部との調整により工事計画地からやや外れた地に調査区を設定したため、埋蔵文化財保護の観点から造構の掘削は行っていない。

##### 第1調査区(図12、写真31・32)

調査区全域において多数の造構を確認した。前述したように、第1調査区は造成土直下が地山であるため、地山上面が造構面となる。検出した造構には、溝状造構、ピット、土壤状造構、流路、杭列、鋪構状造構など多岐にわたる。造構埋土の土質による識別に努めたが、第1調査区の調査実施期間中小雨にたたられたため、土質の記録には至っていない。

##### 第2調査区(図12、写真34・36)

第2調査区では、地山は東から西に降下するが、調査区東部域において検出したピット2基は上部を遺物包含層に覆われていない状況であったため、造構の時期が保証されていない。調査区東端部において検出したピットは平面二等辺三角形状を呈しており、長軸幅0.56m、短軸幅0.34mを測る。その西方約4m地点にて検出したピットは橢円形状を呈し、長軸幅0.34m、短軸幅0.3mを測る。また、調査区西側においては、包含層下に3基の杭跡と見られる小穴を検出している。

##### 第3調査区(図12、写真39)

第3調査区は全面にわたり遺物包含層が堆積しており、造構検出面である地山上面の時期を保証している。しかしながら、検出された造構はいずれも杭列または足跡、植物腐食痕と見られる小規模なものであった。古田遺跡において本だ確認されていない弥生時代の農耕地であった可能性を残すが、根拠に乏しい。周辺域における今後の調査が期待される。

#### (5) 遺物(図13・14、写真42～44、表4・5)

この度の調査では造構掘削を実施していないため、出土した遺物は全て遺物包含層掘削中および断面精査中に検出したものである。

内業整理作業において、第3調査区の基本層序を基準に遺物包含層を3層に分け、出土遺物の所属層の分別に努めたが、第2調査区は降雨による堆積層の泥化があったため、厳密に所属層を分別することは困難と判断し、地山直上出土資料のみ「遺物包含層3」出土とした。第3調査区に関しては、薄く堆

古川橋内(古川道路)の断面

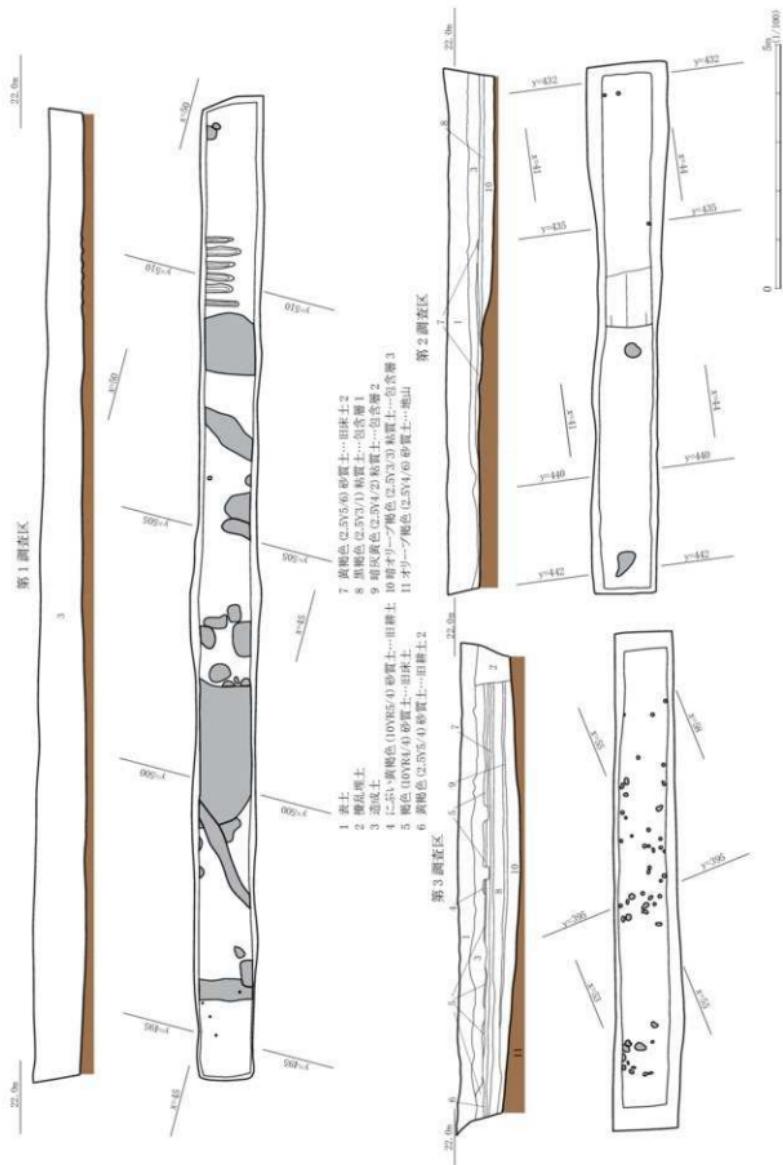


図 12 調査区平面図・断面図

古川橋内(古川道路)の調査



写真 30 第1調査区遺構検出状況（西南西から）



写真 31 第1調査区遺構検出状況（東北東から）



写真 32 第1調査区南壁土層断面（北西から）



写真 33 第1調査区南壁土層断面（北東から）



写真 34 第2調査区遺構検出状況（西から）



写真 35 第2調査区西部南壁土層断面（北西から）



写真 36 第2調査区東部南壁土層断面 (北東から)



写真 37 第3調査区重機掘削風景 (西北西から)



写真 38 第3調査区遺物包含層掘削状況 (北西から)



写真 39 第3調査区遺構面検出状況 (西北西から)



写真 40 第3調査区西部南壁土層断面 (北西から)



写真 41 第3調査区東部南壁土層断面 (北西から)

積した遺物包含層2と下位に堆積する遺物包含層3との遺物取り上げ状況に確信が持てなかつたため、両者を「遺物包含層3」出土として報告することにする。

#### 第1調査区

遺物包含層が遺存しない調査区であり、図化可能資料は断面精査時に造成土中から出土した土器1点である。1は瓦質上器熔接把手へ体部片。炭素吸着が高くほぼ上質焼成となっている。

#### 第2調査区

第3調査区に比して遺物包含層中の遺物包含量は少ない。確実に遺物包含層3から出土した資料中、図化可能資料は1点のみである。2は繩文土器浅鉢口縁部片。内外面とも横方向に丁寧に磨かれており、摩滅の少ない資料である。

3~10は遺物包含層1出土弥生土器。3は甌口縁部小片。鈍く外反させた口縁の端部に刻日を施す。4は外反する口縁部片で、内面に横方向のヘラミガキを施す。口縁端部は凹線状に窪んでいる。甌口縁か。5も外反口縁。器壁の薄い個体であり、内外面とも斜め方向にハケを施すが、外面は横ナデを加えている。口縁端部に面を取る。6は壺体部小片。外面に二枚貝による文様が施されているが、やや弧を描いていることから重弧文または木葉文の可能性がある。7は壺頸部片。2条の突帯を巡らし、端部に刻日を施している。8も壺頭部片か。現状で6条の櫛引き沈線が觀察される。内面は完全に剥離している。9は壺底部片。平底と見られ、器壁の厚い底部からほぼ直線的に体部に立ち上がる。風化が激しく、内外面とも摩滅している。10は壺底部片か。小片であるが、底部はわずかに上げ底状を呈し、緩やかに湾曲しながら外開きに体部に移行する。内外面とも風化が激しく、器面調整不明。

#### 第3調査区

11~22は包含層1出土弥生土器。11は甌。遺物包含層出土土器の中で、破片がある程度まとまりをもつて出土した唯一の資料である(写真38)。底部は欠失しているが、体部下位から口縁にかけて反転復元可能な資料である。卵形の体部から口縁を強く外反させる器形であり、口縁端部は面を取る。体部外面は上半部に左上→右下方のハケ、下半部に下→上方向のハケを施している。口縁部及び体部内面は著しく風化しているため調整痕が残っていない。復元口径18.5cm、胴部復元最大径23.4cmを測る。12も甌口縁一体部片。膨らみの少ない胴部から、口縁を直線的に強く外反させている。体部外面に縱ハケ、内面にはケズリが施される。口縁は内外面とも丁寧な横ナデが行われており、口縁端部もナデにより面を取っている。13~15は甌口縁部片。13は内外面とも横ナデが施されているが、外面には部分的にハケ工具端部が当たられた痕跡を残す。14は端部を丸く取める口縁部片。風化が激しく器面が荒れてい。15も外反口縁であるが、器壁が薄い個体である。全面摩滅しており器面調整は不明である。口縁端部は鈍く面を取っているように思われる。16は鉢の口縁部か。直線的に聞く体部から口縁をわずかに外反させている。口縁端部は鈍く面を取る。内外面に部分的に縦ハケが見られるが、ナデ消しているようである。17~19は壺体部。17は厚い器壁の外面上に現状で5条のヘラ引き沈線が残る。沈線下にはわずかに刺突文が見られる。18は外面に二枚貝による文様が施された体部片である。小片ではあるが、3条の横位平行沈線下に縦位の沈線2条で文様区画を設け、各々の区画に3条の斜め沈線が施されている。19も壺体部片と見られるが、縦横断面ともにほぼ弧を描かない。大型品であろうか。内外面とも丁寧にミガキが施されており、外面には赤色塗装が残る。20は高环坏一口縁境界部片。坏底と口縁端部を欠失する。21は壺底部片。平底と見られ、内外面ともに風化が激しいが、外面にわずかに縦ハケが残る。復元底部径6.6cmを測る。22は完形復元可能な鉢。小さな平底から内湾して体部に立ち上がり口縁に至る。口縁端部は丸く取まる。外面調整は縦ハケ、内面調整は横ハケ。復元口径10.9cm、復元底部径2.4cm、

古田橋内(古川遺跡)の器類

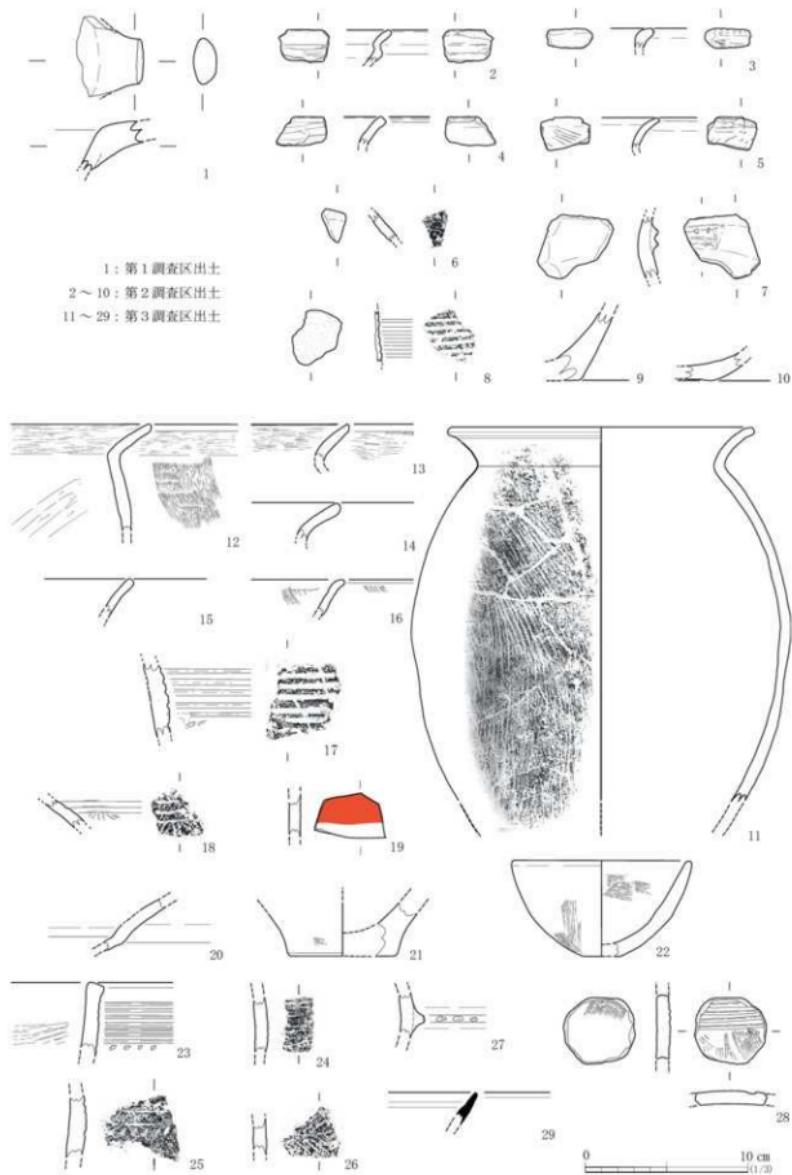


図 13 出土土器実測図

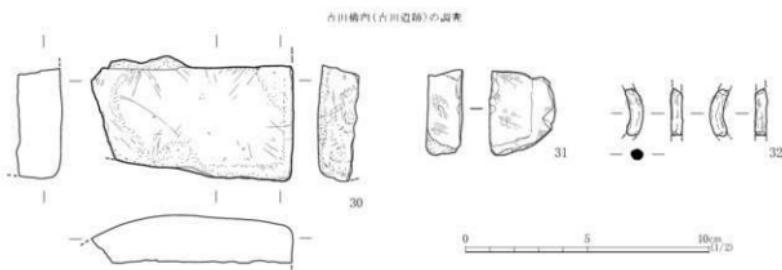


図 14 出土石器・鐵器実測図



写真 42 出土土器①

古川橋内(古川道路)の出土



10



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23

写真43 出土土器②



11



12



24



25



26



27



28



29



30



31



32

写真 44 出土土器③・石器・鉄器

表4 出土遺物(土器)の観察表

遺物番号	遺構・位置	器種	部位	法量(cm) ①口縁②底縁③側面	色調 ①外面 ②内面	胎土	法量( )は復元量
							備考
1	第1調査区 断面	瓦質土器 埋焼	把手		①灰色(6.6) ②灰色(2.5Y8/2)	密: 1~2mmの砂粒少量混ざる	
2	第2調査区 包含層3	陶文土器 浅鉢	口縁部		①②黒褐色(2.5Y3/1)	密: 0.5mm以下の砂粒多く少量混ざる	
3	第2調査区 包含層	弥生土器 壺	口縁部		①灰黃色(2.5Y7/2) ②にい・黃褐色(10YR7/4)	密: 0.5~3mmの砂粒多量に混ざる	口唇刻み有
4	第2調査区 包含層	弥生土器 壺	口縁		①褐灰色(10YR6/1) ②灰黃褐色(10YR6/2)	やや粗: 1~2mmの砂粒少く混ざる	
5	第2調査区 包含層	弥生土器 壺	口縁		①にい・黃褐色(10YR6/3) ②にい・黃褐色(10YR7/3)	やや粗: 1~2mmの砂粒多く混ざる	
6	第2調査区 包含層	弥生土器 壺	体部		①浅黃褐色(7.5Y8R/6) ②明黄褐色(10YR7/6)	粗: 1~2mmの砂粒極めて混ざる	
7	第2調査区 包含層	弥生土器 壺	頸部		①にい・黃褐色(10YR5/3) ②にい・黃褐色(10YR5/3)	粗: 0.5~2mmの砂粒多く混ざる	
8	第2調査区 包含層	弥生土器 壺	頸部		①褐灰色(10YR6/1)	粗: 1~3mmの砂粒多く混ざる	
9	第2調査区 包含層	弥生土器 豆か	底部		①にい・黃褐色(10YR6/3) ②にい・褐褐色(10YR5/3)	粗: 1~2mmの砂粒多く混ざる	風化激しい
10	第2調査区 包含層	弥生土器 壺か	底部		①灰黃褐色(10YR5/2) ②淺黃褐色(10YR4/1)	粗: 1~3mm砂粒多く混ざる	風化激しい
11	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	口縁~ 体部	①(18.5)	①黒褐色(10YR3/1) ②黃褐色(2.5Y8/3)	粗: 3~6mmの砂粒多量に混ざる	
12	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	口縁~ 体部		①にい・黄色(2.5Y6/3) ②浅黄色(2.5Y7/3)	やや粗: 0.2~2mmの砂粒やや多く混ざる	
13	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	口縁部		①にい・黃褐色(7.5YR6/4) ②にい・黃褐色(10YR6/3)	密: 0.2~1mmの砂粒少量混ざる	
14	第3調査区 包含層1	弥生土器 豆か	口縁部		①②にい・黃褐色 (10YR5/3)	粗: 0.5~2mmの砂粒多量に混ざる	
15	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	口縁部		①にい・黃褐色(7.5YR7/4) ②灰黃褐色(10YR6/2)	やや粗: 1mmの砂粒混ざる	風化激しい
16	第3調査区 包含層1	弥生土器 豆か	口縁部		①繪色(7.5YR7/6) ②にい・褐褐色(7.5YR7/4)	密: 0.2~3mmの砂粒少量混ざる	
17	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	体部		①にい・黃褐色(10YR7/4) ②浅黃褐色(10YR8/4)	粗: 2~4mmの砂粒多く混ざる	
18	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	体部		①②浅黃褐色(10YR8/3)	粗: 1~3mmの砂粒多く混ざる	
19	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	体部		①にい・黃褐色(10YR7/4) ②繪形: にい・繪色(5YR6/4) ③浅黄色(2.5Y7/3)	密: 0.2~0.5mmの砂粒極少量混ざる	外表面形
20	第3調査区 包含層1	弥生土器 高壺	壺部		①にい・繪色(7.5YR7/3) ②にい・黃褐色(10YR5/3)	密: 0.2~2mmの砂粒極少混ざる	
21	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	底部	②(6.6)	①繪色(7.5YR6/6) ②にい・黃褐色(10YR6/3)	密: 0.3~1.5mmの砂粒やや多く混ざる	
22	第3調査区 包含層1	弥生土器 豆	完形	①(10.9) ②(2.4) ③5.9	①浅黃褐色(10YR8/3) ②にい・黃褐色(10YR7/3)	密: 0.3~2mmの砂粒少量混ざる	風化激しい
23	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	口縁部		①にい・黃褐色(10YR7/3) ②浅黃褐色(10YR8/3)	密: 0.5~2mmの砂粒多く混ざる	
24	第3調査区 包含層3	弥生土器 壺	体部		①②にい・繪色(7.5YR6/4)	密: 0.3~2mmの砂粒やや多く混ざる	
25	第3調査区 包含層3	弥生土器 豆か	体部		①灰黃褐色(2.5Y7/2) ②灰白色(2.5Y7/1)	密: 0.2~2.5mmの砂粒多く混ざる	
26	第3調査区 包含層3	弥生土器 壺	体部		①浅黃褐色(10YR8/3) ②灰白色(2.5Y8/2)	密: 0.3~3mmの砂粒やや多く混ざる	
27	第3調査区 包含層3	弥生土器 壺	体部		①にい・黃褐色(10YR7/3) ②灰白色(10YR8/1)	密: 0.2~2.5mmの砂粒やや多く混ざる	
28	第3調査区 包含層3	弥生土器 壺	体部		①にい・黃褐色(10YR7/3) ②にい・繪色(7.5YR6/4)	密: 0.3~2mmの砂粒少量混ざる	土質円盤として転用か
29	第3調査区 断面	須恵器 壺	口縁部		①②灰白色(7.5Y7/1)	精緻	

表5 出土遺物(石器・鉄器)の観察表

法量( )は残存量

遺物番号	遺構	種別	法量(cm)	備考
30	第3調査区 包含層	砥石	残長(8.2) 残存最大幅(5.15) 残存最大厚(1.9) 重量125.1g	残存する2面を主に使用
31	第3調査区 包含層3	砥石	全长3.45 最大幅2.7 最大厚1.35 重量20.46g	表裏・側面を集中的に使用
32	第3調査区 包含層3	棒状鉄製品	残長(1.87) 最大厚0.5 重量0.77g	緩やかに湾曲する棒状製品

器高5.9cmを測る。

23～28は包含層3出土弥生土器。23は壺口縁一体部片。直立する口縁の外端をやや肥厚させ、上端に面を取る。口縁下に7条の櫛描き沈線を施し、その下位に刺突文を付加する。24は壺体部片。外面に二枚貝により無軸羽状文を施す。25は壺体部片か。残存する外面には、2条の平行沈線とその上下に刺突文が施されている。26は壺体部片。外面に二枚貝による有軸羽状文が施されている。27は壺胴部片。貼り付け突帯端部に刺突文が施される。28は壺体部片。外面には4条の櫛描き沈線が見られ、内外面とも縦ハケが施されている。また外面沈線下には種子状の圧痕が見られる。当資料は、破断面が摩滅しており、平面形態が不自然に円形となっていることから、土製円盤として転用されている可能性を残している。

29は断面精査中に出土した須恵器壺口縁部片。口縁端部を尖り気味に丸く收めている。内面口縁下に凹線が巡るが、意図的なものか不明である。所属層位不明。

この他、第3調査区からは石器と鉄器も出土している。30は砥石。3面を欠失している。表面と短側面を使用面としており、長側面は原面を残す。残長8.2cm、最大幅5.15cm、最大厚1.9cmを測る。重量は125.1g。31も小型の砥石。表裏面と片長側面を主使用面としている。全長3.45cm、最大幅2.7cm、最大厚1.35cmを測る。重量20.46g。32は棒状鉄製品。断面精円形の棒状製品であり、緩やかに湾曲しているが、両端を欠失している。残長1.87cm、断面0.46～0.5cmを測る。重量0.77g。30は包含層1、32・33は包含層2出土である。

#### (6)まとめ

今回の調査により、古田構内南端部である野球場縁辺部には遺構及び遺物包含層が良好な状態で遺存していることが明らかとなり、既往の調査成果を裏付ける結果となった。

第1調査区では、時期不明ではあるが大字移転時の造成で削平されながらも地面上に密に遺構が分布することが確認された。第2・第3調査区では、弥生時代の2～3枚の弥生時代遺物包含層が確認された。遺物の遺存状態は良好とは言えないものの、量的には豊富であった。調査地周囲に弥生時代の生活域が存在していることは明らかであり、3調査区における地山面の標高を見る限りでは、高地である野球場東側に集落が形成され、西側の低地に遺物包含層が形成されたと想像される。昭和42年(1967)に野球場縁辺部で実施された調査にて確認された「弥生中期の堅穴住居跡」も、その信憑性が高まったと言えるのではないかろうか。

防球ネット設置工事との関わりで述べると、支柱を保持する根カセ(軽0.5m×長さ1.5m規模)の設置深度は地下0.6m地点であるため、造構面および遺物包含層の破壊は免れるものと判断される。支柱自体の設置に関しては、地下3mまでボーリングが行われることから、遺跡の破壊は免れ得ない。工事は0.45mの支柱を入れるボーリングであるため、工事中の立会は埋蔵文化財保護上無意味と判断された。調査終了後、埋蔵文化財資料館専門委員会での審議において、予備発掘調査をもって埋蔵文化財保護対応を終了し、工事着手を承認することとなった(平成21年度第5回埋蔵文化財専門委員会:平成21年7月29日開催)。

支柱は野球場縁辺19地点に入るため、ボーリングによる遺跡破壊総面積は5m<sup>2</sup>弱に及ぶ。埋蔵文化財の破壊が最小限に止まつたことを願うとともに、破壊規模の大小によらず、より有効な埋蔵文化財保護対応の確立に向けて、今後も度重なる検討が必要であろう。

## 3. 教育学部A棟改修工事に伴う予備発掘調査・立会調査

調査地区 古田構内H・I-17・18区、J-18区、

E-20区

調査面積 約46.6m<sup>2</sup>(予備発掘調査35.3m<sup>2</sup>、立会調査11.3m<sup>2</sup>)調査期間 予備発掘調査 平成21年8月5～20日  
立会調査 平成21年6月11日、11月13

日、平成22年1月26日

調査担当 田畠直彦

## 調査結果

## (1) 調査の経緯(図15・16)

古田構内において、教育学部A棟及び講義棟の改修工事が決定し、設備改修や環境整備に伴う掘削工事が行われることになった。教育学部A棟周辺においては、これまでほとんど調査が行われておらず、地下の状況に不明な点が多い。以上の点を踏まえ、平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会(3月18日開催)において、当該工事における埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、予備発掘調査(△～E調査区)・立会調査(F調査区・G～1地点)を実施することになった。

## (2) △～E調査区(図17・18、写真45～50)

## a. 基本層序

△～D調査区は階段・花壇等の基礎部分で工事掘削が現地表下約60cmまでの予定であったため、60cm以下の掘削は一部にとどめた。E調査区は検水槽新設箇所で調査区北部の側溝上面から約145cm下まで掘削を行った。基本層序は下記の通りである。

第1層：表土(層厚約20～30cm)

第2層：造成土(層厚約60～100cm)

第3層：旧耕土(層厚約20cm)

第4層：旧床土(層厚約5～10cm)

第5層：地山(△～D調査区：層厚15cm以上、E調査区：層厚130cm以上)

A調査区は、現地表下約100cmまでが第2層、以下、約100cmで第4層；オリーブ灰色(10Y6/2)シルト、約120cm、標高18.25mで第5層；緑灰色(7.5GY6/1)シルトを検出した。

B調査区は、現地表下約62cmまで掘削を行ったが、既設のコンクリート基礎による擾乱が著しかったため、掘削を一部にとどめた。その結果、第3層；オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルトを検出するにとどまった。



図15 調査区位置図1



図16 調査区位置図2

C調査区は現地表下約60cmまでが第2層、以下、約60~78cmで第3層:灰色(5Y6/1)シルト、約78~80cmで第4層:オリーブ黄色(5Y6/3)シルト、約80cm、標高18.5mで第5層:緑灰色(7.5GY6/1)シルトを検出した。

D調査区は、現地表下約115cmまでが第2層で、以下、約115~135cmで第3層:灰色(5Y6/1)シルト、約135~140cmで第4層:灰オリーブ色(5Y5/2)シルト、約140cm、標高18.08mで第5層:青灰色(5BG6/1)シルトを検出した。

E調査区はグランドの傾斜面に位置する。既設管等による擾乱が著しかったため、南西壁のみで土層を確認した。調査区北部では、現地表下約7cmまでが第2層、以下は第5層であった。第5層のうち、標高17.4~17.2mが黄灰色(10YR4/1)シルト、標高17.2~16.8mが灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト、標高16.8~16.56mがオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト、標高16.56~16.25mが灰色(7.5Y5/1)シルト、標高16.25~16.06mがオリーブ灰色(5Y6/3)シルトであった。

#### b 造構・遺物

A~E調査区において造構・遺物は皆無であった。

#### (3) F調査区・G~I地点(図17、写真51~54)

F調査区は排水管新設箇所である。現地表下約40~50cmまで掘削を行ったが、すべて造成土の範囲内であった。

G調査区は排水管新設箇所である。現地表下約120cmまではコンクリート・造成土で、以下、約120~178cmが浅黄色(7.5Y7/3)シルト、178~200cmが灰色(5Y5/1)粘質土であった。浅黄色シルト以下は地山に近似するが、同層には縄文土器片(後~晚期か)が含まれていたため、河川堆積土である可能性がある。

H~I地点は仮設電柱設置箇所である。H地点で現地表下約90cm、I地点で約30cm、J地点で約25cmまで掘削が行われたが、いずれも造成土の範囲内であった。

#### (4) 小結

A~D調査区においては工事予定掘削深度内で地山は検出されず、A・C・D調査区で第2層、B調査区で第3層内にとどまり、埋蔵文化財には支障はないことが判明した。また、深掘りを行った地点においても地山は検出されたものの、造構・遺物は皆無であった。以上からA~D調査区周辺は埋蔵文化財の分布が希薄であることが推測されるが、調査面積が狭小であるため、今後も慎重な対応が求められよう。また、E調査区は第2層直下で第5層が検出され、グランド造成等による擾乱が著しいことが判明した。立会調査においてはG地点の浅黄色シルトから縄文土器片が出土したことが注目される。G地点の約50m南に位置する共用棟B敷地では縄文時代の遺物包含層、上塙1基が検出されていることから、周辺に縄文時代の遺構が存在する可能性が高い。このため今後の開発工事において、G地点周辺では特に注意が必要である。

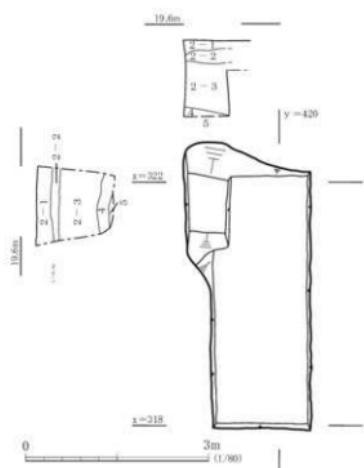
#### 【註】

- 1) 河村吉行(1982)「第3章第2節 教育学部H~I9区の発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報1』、山口

古川橋西(古川道路)の調査



図 17 調査区詳細図



- 2-1 造成土 沈オリーブ色 (7.5Y4/2) 土  
2-2 マサ土 沈オリーブ色 (7.5Y6/2) 粗砂にガレキ含む  
2-3 造成土 マサ土 [沈オリーブ色 (7.5Y6/2) 粗砂] に粗粒土・灰色 (10Y5/1) シルト・ガレキを含む  
4 砂床土 オリーブ灰色 (10Y6/2) シルト  
5 地山 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト

図 18 A 調査区平面図・断面図



写真45 A 調査区全景（北から）



写真46 A 調査区北西部土層断面（南西から）



写真47 B調査区全景（南から）



写真48 C調査区北西部土層断面（南東から）



写真49 D調査区全景（北から）



写真50 E調査区南西壁土層断面（北東から）



写真51 F地点土層断面（東から）



写真52 G地点土層断面（北東から）



写真53 G地点土器出土状況（北東から）



写真54 H地点土層断面（北西から）

#### 4. 里山整備工事に伴う予備発掘調査・立会調査

**調査地区** 古川構内Q-10、O・P・Q-11区

**調査面積** 約758m<sup>2</sup>(予備発掘調査約36.9m<sup>2</sup>・

立会調査約680.1m<sup>2</sup>)

**調査期間** 予備発掘調査 平成22年2月15~17日

立会調査 平成22年2月24日、

3月2日、3月31日

**調査担当** 山畑直彦

#### 調査結果

##### (1) 調査の経緯(図19)

古川構内東北部に位置する丘陵、通称「もり山」を「共育の丘」として利活用することが決定したことに伴い、頂上にモニュメント・東屋、石彫方位盤を設置し、遊歩道の整備が行われることになった。「もり山」には横穴墓が存在することが早くから知られており、現状で1基が開口している。また、頂上には円墳が存在するとも伝えられていることから、埋蔵文化財が存在する可能性が十分に考えられた。このため、平成21年度第11回埋蔵文化財資料館専門委員会(1月21日開催)で埋蔵文化財の取り扱いを協議した結果、丘陵頂部(A~I調査区)について予備発掘調査、その他の地点については立会調査を実施することになった。

##### (2) 予備発掘調査(図20・21、写真57~60)

###### a. 基本層序

予備発掘調査区は芝生広場として整備し、モニュメントを設置することになった箇所である。調査前は森林であったが、長年に渡って整備が行われておらず、倒木により根が起された箇所が多数存在するなど、かなり荒れた状況であった。現地形は東北から南西にかけて傾下している。標高は表土(層厚約10~30cm)除去後において、A調査区北東部で56.106m、I調査区南西部で54.962mである。基本層序は第1層:表土、第2層:旧耕土(層厚約5~37cm 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土)、第3層:地山(層厚20cm以上 明茶褐色(5YR5/6)粘質土及び同色を主体とする岩盤・岩盤風化土)である。第2層は根による浸食が著しい。

###### b. 遺構・遺物

調査区は森林となる前は畠だったようであり、A調査区以外で第2層が認められたが、遺構・遺物は皆



図19 調査区位置図



写真55 調査前全景(西上空から)



写真56 横穴墓(南東から)

無であった。調査区北部における地山の標高は、56.1m、B調査区北部で56.0m、C調査区北部で55.2m、D調査区北部で56.0m、E調査区北部で55.9m、F調査区北部で55.2m、G調査区南部で54.9m、H調査区南部で55.1m、I調査区南部で54.8mである。

#### (3) 立会調査(写真61~64)

J地点はモニュメント設置箇所、L地点は石彫方位盤設置箇所である。予偏発掘調査区同様の状況であったため、表土除去後に調査を行った。J地点では現地表下約60cmまで掘削したが、すべて地山の範囲内であった。K地点は現地表下約37cmまでが明茶褐色(5YR5/6)粘土、約37~84cmがにぶい橙色(5YR7/3)を主体とする岩盤風化土であった。L地点は現地表下15cmまでが造成土、約43~58cmが明茶褐色(5YR5/6)粘土であった。M地点は遊歩道の拡幅に伴い、法面の拡幅が行われた。現地表下約15cmまでが表土、約15~120cmが明赤褐色(5YR5/6)粘質土の地山であった。

#### (4) 小結

今回の調査の結果、遺構・遺物は皆無であり、埋蔵文化財に支障はなかった。「もり山」には、南部に宅地・畠跡と見られる平坦面や防空壕が存在するなど、土地改変が顕著な箇所も存在する。しかし、横穴墓は基數を含めて詳細は不明であり、地下の状況には不明な点が多い。このため、今後とも埋蔵文化財の保護に十分注意する必要がある。

#### 【註】

- 1) 石川卓美(1972)『半川文化散歩』、山口市半川公民館(編)、山口
- 2) 平成19年に横穴墓の位置、「もり山」の旧状等について統合移転前の旧住民を含む平川地域の方々から多大なご教示を得た。
- 3) 森田泰一(1985)「第6章 青吉構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報IV』、山口

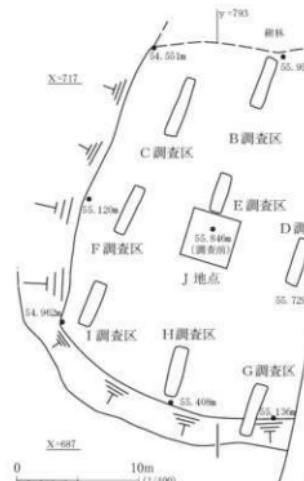
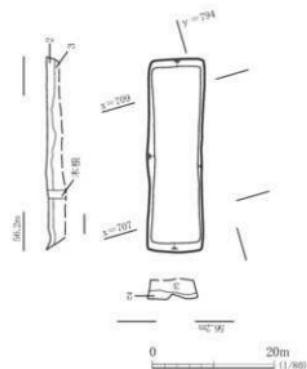


図20 調査区詳細図



2. 田耕土か、黄褐色(2.5Y5/3)粘質土  
3. 明茶灰色(5YR7/2)、黄色(10YR7/8)、暗色(D5R6/4)、青灰色(S5E5/1)の風化した片岩(上部を中心ににぶい橙色(5YR6/4)粘質土を含む)

図21 E調査区平面図・断面図



写真57 A調査区全景（南西から）



写真58 C調査区全景（南東から）



写真59 E調査区全景（北東から）



写真60 I地点全景（北東から）



写真61 J調査区全景（南東から）



写真62 K調査区全景（南東から）



写真63 L調査区全景（南東から）



写真64 M調査区全景（北東から）

## 5. 新教育研究棟新営工事に伴う立会調査



図22 調査区位置図1



写真65 B地点土層断面(南東から)

及び遺物の回収ができなかった。一方、導線整備に伴う掘削工事では、設備関連工事に伴う本発掘調査で検出した谷を再検出した。谷は本発掘調査で確認したように南東→北西方向に延びている。また、C-1地点では標高19.6mで谷の肩部があり、緩やかに南側に落ち込んでいる状況を確認した。

## (3) D調査区(図23、写真69・70)

D調査区は新教育研究棟敷地よりも1段高く、車両通行時の視界が不良となるため、削平されることになった箇所である。同棟新営工事に伴う本発掘調査区の北側に隣接することから、遺構が分布することが予想された。このため、施工業者に遺構面まで機械掘削を依頼し、記録作業を実施した。層序は敷地本発掘調査と同様であるので、同報告を参照されたい。調査の結果、遺物包含層の直下で検出した遺構面から溝1条、ピット39基、落ち込み3基を検出した。このうちSX1～4については掘削を行っていない。遺構面は東→西方向に緩やかに傾斜しており、西部は統合移転前に存在した棚田により削平を受けている。検出したピットのうち、Pit25、26は敷地本発掘調査時に検出したピットの再検出である。また、Pit20、30～32は敷地本発掘調査時に検出したSB1、SX4はSX3の延長部分と考えられる。検出した遺

調査地区 吉田構内L-13、14、M-11、12、N-12区  
調査面積 約340.5m<sup>2</sup>  
調査期間 平成21年4月9日、11日、29日、7月2、3、6日、9月17日、11月18日

調査担当 田畠直彦

## 調査結果

## (1) 調査の経緯(図22)

吉山構内において、新教育研究棟新営工事が決定したのに伴い、昨年度に引き続き立会調査を実施した。今回の調査対象は設備及び周辺環境整備に伴う掘削工事である。

## (2) A～C調査区(図22、写真65～67)

A調査区では電気設備工事に伴う掘削が行われた。東端部の井戸設置箇所では、現地表下約1.2m(標高20.4m)で、直径約15cm・深さ5.5cmのピット1基を検出した。遺物は出土していない。他の箇所は現地表下約100cmまで掘削したが、造成上の範囲内であった。

B調査区は外灯の新設工事に伴う掘削が行われた。現地表下約17cmで赤褐色(5YR4/4)粘土の地山が検出されたが、遺構・遺物は皆無であった。

C調査区は設備及び正門導線(道路)整備に伴う掘削工事が行われた。なお、設備関連工事に伴う掘削では壁面の崩落が著しかったため、記録作業

構の深さはPt40のように約50cmのものもあるが、大半は20cm以内であった。出土遺物には、遺物包含層から出土した土師器、須恵器、瓦質土器、青磁片、Pt25・28・30・32・34から出土した土師器微細片、Pt31から出土した鉄製品(図24 刀子か? 長さ4.0cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重量12.60g)がある。

#### (4) E-F区(図22、写真71・72)

E調査区は桜の移植箇所である。平面形80cm×80cmで現地表下約35~50cmの規模で掘削が行われた。調査の結果、E-1地点で現地表下約15cmで褐灰色(10YR4/1)シルトの遺物包含層を検出した。また、E-2~7地点では現地表下約20~30cmで岩盤風化土を主体とする地山を検出した。E-8・9は現地表下50cmまで掘削が行われたが、すべて造成土の範囲内であった。

F調査区は導線(道路)造成後、雨天時に顕著な湧水を排水するために新設された排水溝新設箇所である。このうち、F-1地点では現地表下10cmで、明青灰色(5B7/1)シルトを検出した。また、F-2地点付近では現地表下約40cmで谷理土の一部と考えられる灰色(7.5Y4/1)シルトを検出した。両調査区から遺物は出土しなかった。

#### (5) 小結

今回の調査では、平成20年度に検出した谷や遺構の延長部を検出するなど、大きな成果を得ることができた。今回の調査区を含め、新教育研究棟周辺は地形が大幅に改変されてしまったが、埋蔵文化財が遺存している箇所も多い。また、谷については西肩が検出できていないため、その規模は不明である。このため、今後も調査区周辺においては埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

#### 【註】

- 田畠尚彦(2012)「第1章第2節3 新教育研究棟敷地開削工事に伴う本発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成20年度—』、山口
- 田畠尚彦(2012)「第1章第2節4 新教育研究棟新宮に伴う本発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成20年度—』、山口

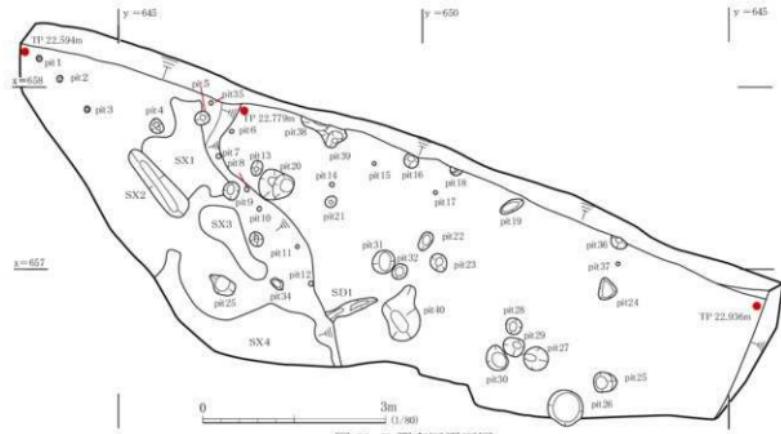


図23 D調査区平面図

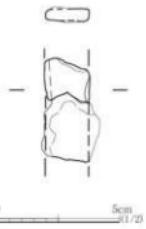


図24 出土遺物実測図

写真66 出土遺物



写真67 C地点河川検出状況（北西から）



写真68 C-1地点土層断面（北西から）



写真69 D地点遺構検出状況（南西から）



写真70 D地点溝・柱穴完掘状況（南西から）



写真71 E-1地点土層断面（北西から）



写真72 F-2地点土層断面（北西から）

## 6. ビオトープ周辺雨水排水管取設工事に伴う立会調査

調査地区 古田構内L・M-10、11区

調査面積 約60m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年3月8、12、15、19、23日

調査担当 田畠直彦

調査結果 吉田構内において、ビオトープへの導水、周辺雨水管の改修を目的とした排水管取設工事が決定したのに伴い、立会調査を実施した。調査区は、南東側が道路に沿って丘陵が削平されており、北西側は実験水山を埋め立てた状態であった。工事は北西→南東方向の管路2本と排水井5箇所を新設するものである。

調査の結果、管路では、北西側（道路より西側）で現地表下約150～230cmまで掘削が行われたが、いずれも造成土の範囲内であった。一方、南東側においては地山が削平されている状況が認められた。このうち、A地点（南壁）においては現地表下約110cmまでが造成土、約110～220cmが黄褐色（10YR7/8）粘質土であった。また、B地点においては現地表下約184cmまでが造成土で、約184～220cmが黄褐色（10YR7/8）粘質土であった。その他の地点を含め、調査区内において遺構・遺物は検出されなかった。

A・B地点の状況から、調査区周辺においては東側の丘陵部を削平して、西側に厚く盛土がなされていることが判明した。ただし調査区北西側においては盛土を確認したに過ぎず、地下の状況は不明である。調査区の約20m南側においては、平成19年度に実施した吉田寮前排水管敷設工事で、遺物包含層と考えられる黒褐色粘質土が検出されている。このため、調査区周辺においては、今後の開発工事にあたって埋蔵文化財の保護に留意する必要がある。



図25 調査区位置図



写真73 調査区東部（西から）



写真74 A地点土層断面（北から）

### 【註】

- 1) 田畠直彦(2011)「第1章第2節5 吉田寮前排水管敷設に伴う立会調査」、山口大学蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成19年度－』、山口

## 7. 仮設高圧線引き込み工事に伴う立会調査

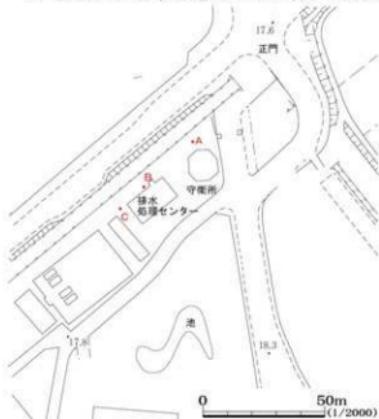


図26 調査区位置図



写真75 B地点土層断面（北西から）



写真76 C地点土層断面（北西から）

調査地区 吉田構内H-12区

調査面積 約7m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年3月23日

調査担当 田畠直彦

調査結果 吉田構内では、新規建物の増加と改修工事の進展等により電力の需要が増加し、既往の設備では対応が困難になったため、応急措置として仮設仮設高圧線の引き込み工事が行われることになった。工事は守衛所・排水処理センター周辺の3箇所(A～C)地点において電柱を設置するものであり、ボーリングによる掘削工事(掘削深度約200cm)が計画されたため、立会調査を実施した。

調査の結果、A地点では現地表下約100cmまでは造成土であったが、以下については手が届かず壁面が汚れていたため、確認することができなかつた。B地点では、現地表下約140cmまでが造成土、約140～170cmが緑灰色(10GY6/1)シルト、約170～230cmが黒褐色(10YR3/1)粘質土であった。C地点では、現地表下約100cmまでが造成土であること、現地表下約200cm付近の上層が黒褐色(10YR3/1)粘質土であることは確認できたが、A地点と同じ事情により、詳細は確認することができなかつた。また、A～C地点から遺物は出土しなかつた。

平成6年度に実施された排水処理センターの増築(実験廃液処理施設新設)に伴う試掘調査では、現地表下約150cm(標高16.6m)で青灰色砂礫・明緑灰色シルト、160cm以下(標高16.5m)で明茶灰色粘土・暗褐色粘土が検出されている。以上はB地点で確認された層序と近似しており、B・C地点で検出した黒褐色粘質土は平成6年度調査の明茶灰色粘土・暗褐色粘土に対応するものと考えられる。両層は縄文時代以前に形成された層と考えられるが、遺物は出土しておらず、詳細は不明であるため、今後の調査による解明が待たれる。

## 【註】

1)豆谷和之(2000)「第4章2 実験廃液処理施設新設に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報 XII』,山口

## 8. ため池整備工事に伴う立会調査

調査地区 古田構内S-8区

調査面積 130m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年12月7日

調査担当 横山成己 藤野好博

調査結果 吉田構内北東部に位置する農学部附属農場敷地には、北東—南西方向に大小2基のため池が存在する(写真77・図27)。この内、北東部に位置するため池の漏水が指摘されたことを受け、堤および取水口の整備工事が計画された。当ため池は、江戸時代中期成立の絵図「地下上申絵図古田村」に「小サコ堤」として描かかれていることから、築造年代の下限の一端を知ることができる。

整備工事は、南側堤の一部を切り通し、取水口を新たに設けるという計画であり、考古学見地からため池の築造年代を解明する機会と考えられたため、平成21年度第5回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年7月29日開催)にて審議され、工事中の立会調査が決定された。

立会調査は堤の切り通し掘削が終了した平成21年12月7日に実施した。堤の断面を精査した結果、盛土は少なくとも2度の改修が行われているもの(写真78)、確認された最古の盛土中にコンクリート片が検出されたため、断面火災等の記録作業は行わなかった。

かつて筆者は農学部附属農場棟周辺域での中世集落の形成に言及したことがあるが、ため池の成立年代も集落形成に大きく関連する問題である。土地活用の状況から周辺地での開発工事等は今後も少なかろうが、引き続き埋蔵文化財保護対応には注意が必要である。

## 【註】

1)山口県文書館所蔵

2)横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成20年度—』、山口



図 27 調査区位置図



写真 77 調査区周辺遠景(南東から)



写真 78 ため池堤断面(北西から)

## 9. 基幹整備(鉄管改修)工事に伴う立会調査



図 28 調査区位置図



写真 79 A 地点土層断面（南から）



写真 80 B 地点土層断面（北西から）

調査地区 吉田構内J-14・15区

調査面積 156m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年11月9・12日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内にて、鉄管(ガス管)の改修工事が計画された。大部分は既設管の改修であったが、新規掘削管路が2ヶ所に存在(図28)したため、平成21年度第5回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年7月29日開催)にて審議され、工事中の立会調査が決定された。

車庫西側に設けられた南北管路では、その大部分は本学吉田地区統合移転の際に削平されたようで、旧地形を留めていなかったが、管路北端部に一部その姿を認めることができた。土層断面精査により確認された層序は、①0.65mの造成土、②0.2mの旧耕土、③0.05m以上の黒褐色粘質土層である(写真79)。

本学本部棟と車庫が立地する場所は、姫山から派生する丘陵が東から西に張り出した部分に当たり、弥生時代以降、本学統合移転まで長期にわたり集落が形成されていたことが既往の調査により指摘されている。掘削地点は丘陵西端部に位置することから、最下部に確認された黒褐色粘質土層は遺物包含層と目される。

共通教育棟北側に設けられた東西管路では、①0.05mの表土(芝)、②0.55m以上の造成土を確認するに止まり(写真80)、埋蔵文化財の確認には至っていない。

今回の調査により、低丘陵上にあたる車庫北側空閑地には、遺物包含層および遺構が遺存する可能性が高まった。当該地での開発工事等地下の掘削を伴う計画には細心の注意を払う必要がある。れる。

## 10. 事務局外灯設置工事に伴う立会調査

調査地区 古田構内J-14区

調査面積 1m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年8月21日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内事務局1号館西側空閑地にて、本学よさこいサークルの練習に活用する目的から外灯の設置工事が計画された(図29)。当該地は姫山から派生する東から西に延びる低丘陵の西側縁辺部であり、予定掘削深度から遺物包含層等に影響が及ぶ可能性が想定されたため、工事中に立会調査を実施することが平成21年度第6回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年8月17日開催メール議論)において決定された。

調査は外灯基礎掘削時に実施した。断面精査により確認された層序は、①0.2mの表土、②0.5mの灰色～赤褐色砂質土(造成土1)、③0.3mの灰白色粘質土(造成土2)、④明黄褐色砂礫土(地山)である(図30・写真81)。

地山検出面において基礎坑底面に精査をかけたが、遺構の検出には至らなかったため、さらなる掘削を許可し、記録作成後調査を終了した。

本学吉田地区統合移転時に実施された事務局本部1号館建設に伴う発掘調査では、弥生時代以降の遺物が多数出土しており、竪穴住居、土墻、溝、ピット等多数の遺構が検出されている。本報告を行っていないため遺構の評価がなされていない状況にあるが、遺跡地内でも遺構が密に分布する地域と言える。小規模な工事といえども、地下の掘削を伴う工事計画には今後とも慎重な対応が必要である。



図 29 調査区位置図



写真 81 調査区西壁断面(南東から)



造成土1

造成土2

地山(明黄褐色砂礫土)

図 30 土層断面模式図 (S=1/20)

## 【注】

- 1) 山口大学吉田遺跡調査隊(1976) 小野忠熙(編)『山口大学構内吉田遺跡発掘調査報告』, 小野忠熙(編), 山口

## 11. 第1事務局庁舎東駐車場カーポート設置工事に伴う立会調査



図 31 調査区位置図



写真 82 工事計画地（南西から）



写真 83 B 地点土層断面（西から）

調査地区 吉田構内1-14区

調査面積 1.2m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年9月4日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内事務局1号館南東側身障者用駐車場において、カーポートの設置工事が計画された(図31)。0.5m四方の基礎工事を4ヶ所に実施するという小規模掘削工事であったが、東側に弥生時代から古墳時代、中世から近世にかけての集落跡が確認された「遺跡保存地区」が隣接することから(写真82)、平成21年度第6回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年8月17日開催メール審議)において工事中に立会調査を実施することが決定された。

掘削4地点の基本順序は、以下の通りである。

A地点: ①0.1mのアスファルト、②0.1mの碎石、③0.2mの造成土、④0.1mの旧床土、⑤明赤黄色粘質土(地山)

B地点: ①0.1mのアスファルト、②0.1mの碎石、③0.1mの造成土、④0.1mの旧耕土、⑤0.1mの旧床土、⑥明赤黄色粘質土(地山)

C地点: ①0.1mのアスファルト、②0.1mの碎石、③0.1mの造成土、④0.05mの旧耕土、⑤0.1mの旧床土、⑥明赤黄色粘質土(地山)

D地点: ①0.1mのアスファルト、②0.1mの碎石、③0.13mの造成土、④0.03mの旧耕土、⑤0.07mの旧床土、⑥黄褐色粘質土(地山)

上記のように、当地点では0.45～0.5mで地表面に到達する。今回の調査では遺構等の確認には至らなかったが、事務局本館1号館建設に伴う発掘調査成果および遺跡保存地区的状況を見る限りでは、工事地周囲に埋蔵文化財が遺存する可能性は限りなく高い。小規模工事に対する埋蔵文化財保護対応に対し、長らく本学内にも様々な意見があるようであるが、教育・研究に邁進する大学として、物言わぬ学術資料に対し最大限の配慮、協力を願う次第である。

## 12. 基幹環境整備(第1体育館周辺排水整備)工事に伴う立会調査

調査地区 古田橋内H-13区

調査面積 300m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年3月25日

調査担当 横山成己

**調査結果** 吉田橋内第1体育館周辺地において、大規模な排水整備工事が計画された。当計画は、地下の掘削を伴う工事計画として、平成20年度末の埋蔵文化財資料館専門委員会に提出されていたが、工事場所等の詳細が不明であったため、埋蔵文化財保護対応未定として保留した経緯があった。平成21年11月、工事計画の詳細が決定されたことを受け、管轄自治体の指導の下、当館館長、副館長、館員の協議により、新規掘削部分にのみ立会調査を実施することが決定された。

排水工事は、大部分が既設の排水溝を付け替える工事であり、新規掘削部分は正門西側の池から排水処理センター脱水施設前の排水溝に管路を繋ぐ部分のみである(図32)。

当該地は池周辺が明確に盛土であるものの、盛土の厚みが不明確な状況にあった。立会調査は、掘削が終了した年度末の3月25日に実施した。

池に近く盛土が厚いと予測された記録地点Aの層序は、①1.3mの暗褐色砂土(造成土1)、②0.75mの黄色粘質土(造成土2)であり、盛土下位の状況を確認できなかった(写真84)。

盛土が低まる記録地点Bの層序は、①0.6mの暗褐色砂土(造成土1)、②0.15mのくびい黄褐色粘土(造成土2)、③0.15m以上の灰黄色シルトであった(写真85)。前日に降った雨が流れ込んでくるため、最下部に確認した灰黄色シルトの断面・下面精査が行えなかつたが、地山である可能性を有する。

当工事は計画期間が長く、翌平成22年度を通して実施される予定となっていた。平成22年度の工事立会成果については、追って報告を行いたい。

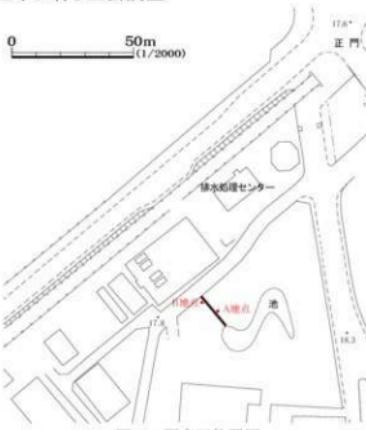


図32 調査区位置図



写真84 A 地点北西壁土層断面（北西から）



写真85 B 地点南西壁土層断面（東から）

## 13. 男子学生寮東側丘陵災害復旧工事に伴う立会調査



図 33 調査区位置図

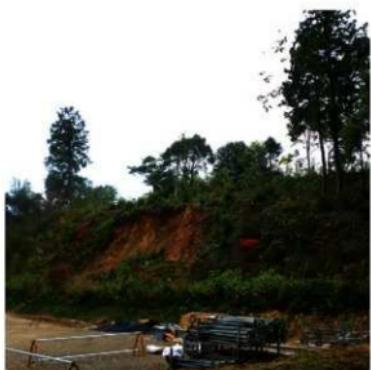


写真 86 被災の模様（南から）



写真 87 復旧工事の模様（南から）

調査地区 吉田構内N-8区、O-8・9区

調査面積 約700m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年2月2H

調査担当 横山成己

調査結果 平成21年7月21日、山口県広域が記録的な大雨洪水被害に襲われた。吉田構内が所在する山口市平川地区も長期間断水が続き、山口大学でも構内に給水所が設けられるとともに、学生に対し運動部部室のシャワー施設が解放されるなど、各種支援が行われた。

山口県内の人的被害に比して極めて小事であり、かつ私事ではあるが、筆者も当時実施していた野球場防球ネット設置工事に伴う予備発掘調査現場の安全確保と、水没した総合図書館機械室に対する排水ポンプの要請等で豪雨の中携帯電話が故障し、帰宅時には自家用車も故障していたことを記憶している。

吉田構内の被害も甚大で、男子学生寮東の丘陵が大きく崩落した（図33・写真86）。被災現場は長らく立ち入り禁止区域となっていたが、年明けに復旧が着手され、崩落した崖面に対し法面設置工事が施された。周知の埋蔵文化財包蔵地内であるため、埋蔵文化財保護対応が必要であったが、工事地内への進入は安全面から避けることとし、崖下から法面断面の観察を行うこととした。

丘陵上部の現況は不自然に平坦であり、過去に大きく削平を受けていることが推測された。断面観察においても、表土層はごくわずかしか観察されず、直下が赤土の地山であることが確認された。

平成21年の豪雨災害の傷跡は、3年以上経過した現在でもその姿を留めている場所が多い。犠牲になられた方々のご冥福を心よりお祈りするとともに、この災害により学んだことを風化させることなく後世に繋ぎたいと思う。

## 14. 人文学部外灯設置工事に伴う立会調査

調査地区 古川橋内N-21区

調査面積 約10m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年6月11日

調査担当 横山成己

**調査結果** 人文学部校舎北東側中庭にて外灯設置工事が計画された(図34)ことを受け、工事中の立会調査を実施することが決定された(平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会※平成21年3月18日開催にて承認)。

工事では、外灯基礎部分の掘削とともに電気線埋設工事も計画されていたが、電気線の埋設に関しては掘削深度が浅く、造成土内に止まることが明確であったため、外灯基礎掘削部分にのみ立会調査を実施した(写真88)。

掘削部の断面精査の結果、掘削地の層序は①0.02mの表土(芝生)、②0.7mの造成土、③0.2mの旧耕土、④0.1m以上の旧床土であることが確認された(写真89)。また、④の旧耕土内から土師器の小片が出土している。

人文学部周辺は造成土が厚く、過去にも旧耕土・旧床土は確認されているものの、下位堆積層は河川堆積土であることが多く、安定的な地山面から遺構が確認されていない状況にある。古川道路内では埋蔵文化財が希薄な地点なのであろうが、当調査で旧耕土から土師器が出土していることから見ても、遺構・遺物の存在を完全否定はできない。今後とも継続的な調査が必要であろう。



図 34 調査区位置図



写真 88 調査地点遠景（南東から）



写真 89 調査区土層断面（東から）

## 15. 人文学部西側アプローチ改修工事に伴う立会調査



図 35 調査区位置図



写真 90 調査区東壁土層断面（西から）



表土

灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土…旧床土

図 36 土層断面模式図 (S=1/20)

調査地区 吉田構内M-20区

調査面積 約750m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年2月16日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内人文学部北側の校舎アプローチ施設に対し、改修工事が計画された。当開発事業は、平成20年度末に開催された第10回埋蔵文化財資料館専門委員会に提出されていたが、工事規模および工事期間が未確定であったため、埋蔵文化財保護対応未定として保留した計画である。平成21年11月に至り、工事規模および工程が確定したことを受け、管轄自治体の指導の下、当館館長、副館長、館員の協議により、掘削深度の深い工事地点(図35)に対し立会調査を実施することが決定された。

工事立会を行ったのは、擁壁工事が行われる幅1.5m、全長5mの南北掘削ルートである。掘削部東壁で断面精査を実施した結果、層序は①0.45mの表土、②0.65mの造成土、③0.23m以上の灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土であることが確認された(図36・写真90)。

③の灰オリーブ粘質土は、土質から旧床土と見られるが、遺物は発見できなかった。

結果として、前記した人文学部外灯設置工事に伴う立会調査とほぼ同等の断面調査成果を得ることとなった。人文学部周辺の旧地形は未だ不明確な面が多く、西に隣接する経済学部敷地との間にある1.5m以上の段差も、本学統合移転時の造成だけでは説明できない部分もある。人文学部校舎および経済学部の一部校舎には未だ改修工事が実施されていないため、改修工事時に掘削が行われる場合には、地下の様相を確認する必要があろう。

造土

## 16. 教育学部研究実験A棟改修電気設備工事に伴う立会調査

調査地区 古川橋内K-18区

調査面積 約40m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年12月28日

調査担当 横山成己

調査結果 平成21年度、教育学部研究実験A棟の改修工事が実施されるに伴い、開発城に対し予備発掘調査と立会調査が実施された(調査成果は本書所収)。その後、工事途中にメディア基盤センター棟と教育学部校舎の間に電気設備工事が追加されることが計画され、平成21年度第9回埋蔵文化財資料館専門委員会の審議により、立会調査の実施が決定された(平成21年9月7日開催メール審議)。

立会調査では、T字型掘削終了後に土層断面精査を行った。以下で確認した3地点の層序を報告する(図37)。

A地点:①0.05mのアスファルト、②0.25mの碎石、③0.2mの砂、④0.2m以上の造成土

B地点:①0.05mのインターロッキング、②0.25mの砂、③0.15mの黒褐色粘質土(旧耕土)、④0.25m以上の灰オリーブ粘質土(旧床土)(写真92)

C地点:①0.25mの真砂、②0.05mの黒褐色粘質土(旧耕土)、③0.15mの暗褐色粘質土(旧床土)、④0.03mの暗黒褐色粘質土(旧耕土)、⑤0.22mの灰オリーブ粘質土(旧床土)、⑥褐色砂疊(河川堆積)、⑦オリーブ色細砂疊(河川堆積)、⑧褐色砂疊(河川堆積)、⑨オリーブ色細砂疊(河川堆積)※⑩～⑯で0.3mの堆積

C地点にて確認された河川堆積は、現メディア基盤センター棟新設工事に伴う発掘調査にて検出された縄文時代河川に繋がるものと考えられるが、出土遺物は検出されていない。

## 【注】

1)河村古行(1988)「古川橋内教養部複合棟新設に伴う発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報VII』、山口



図37 調査区位置図



写真91 C地点南壁土層断面（北から）



写真92 B地点東壁土層断面（南西から）

## 17. 理学部ソーラー外灯設置工事に伴う立会調査



図38 調査区位置図



写真93 A地点土層断面（西から）



写真94 B地点土層断面（南から）

調査地区 吉田構内O-20区

調査面積 約0.3ha

調査期間 平成21年10月21日

調査担当 田畠直彦

調査結果 吉田構内の理学部講義棟南側に位置する駐車場周辺において、照明が少なく夜間の歩行が危険であることから、ソーラー外灯の設置工事が2箇所(A・B地点)で計画された。調査区の北側に隣接する理学部講義棟敷地では昭和58年度に立会調査が行われたが、造構・遺物は確認されていない。しかし、今回の工事による掘削深度は約90cmと深いこと、現地形において理学部講義棟より一段高所に立地し、地下の状況が異なる可能性があることから立会調査を実施することになった。

調査の結果、A地点は現地表下約90cmまで掘削を行ったが、すべて造成土の範囲内であった。B地点は現地表下約64cmまでが造成土、約64~90cmが地山である明黄褐色(10YR6/8)シルトであった。また、両地点から遺物は出土しなかった。

A・B地点の状況から駐車場の大半は大規模な盛土により造成されたと考えられるが、今回の調査面積は狭小であるため、地下の状況は不明である。このため、今後の開発工事においても埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

## 【註】

- 河村古行(1985)「第9水第1節1 理学部大学院校舎および付随工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報III』,山口

## 18. 農学部インターロッキング設置工事に伴う立会調査

調査地区 古田構内P-17区

調査面積 約9m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年3月3日

調査担当 田畠直彦

調査結果 吉川構内の連合歯医学科棟玄関北側敷地においてインターロッキング設置工事及び排水管の敷設工事が行われることになった。連合歯医学科棟敷地については、平成4年度に発掘調査が行われ、縄文時代の河川跡が検出されている。今回調査区の南半部は平成4年度の調査区と重複するが、北半部については調査区外にあたるため、排水管新設ルートについて立会調査をおこなつた。

掘削工事は幅80~90cm、長さ12mの範囲について、現地表下約30~42cmまで行われたが、すべて造成上の範囲内であり、埋蔵文化財に支障はなかった。

連合歯医学科棟敷地で検出された縄文時代河川跡は北から南へ流れていたことが判明しているが、東肩が検出されておらず、その範囲については不明である。このため、調査区周辺においては、今後の開発計画において慎重な対応が求められる。

## 【註】

- 豆谷和之(1994)「第2章 吉川構内農学部連合歯医学科棟新築に伴う発掘調査」、山口大学理系文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XII』、山口



図39 調査区位置図



写真95 調査区全景（北から）



写真96 調査区土層断面（南東から）

## 19. 農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う立会調査



図 40 調査区位置図



写真 97 平成 20 年度調査区谷埋土検出状況(東から)



写真 98 平成 20 年度調査区谷埋土土層断面(南西から)

調査地区 吉田構内S-19・20区

調査面積 154m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年5月28日～12月1日

調査担当 横山成己 藤野好博

## 調査結果

## (1) 調査の経緯と経過(図40、写真97-98)

平成20年度に実施した動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査では、動物医療センター北側に新規建設される建物周域(第1調査区)と、動物医療センター西側に計画された浄化槽設置部(第2調査区)を調査対象範囲とした。第1調査区では室町時代に形成された築落跡を、第2調査区では墨書き器や木製品をはじめ古代の遺物を多量に包含する埋没谷を検出している。

平成21年度は、既設建物の改修工事とともに設置された浄化槽への設備工事が実施される予定であるため、土地の新規掘削部分に対し立会調査を実施することとなった。新規掘削面積は154m<sup>2</sup>と広域であり、工事期間も長期に及んだ。立会調査は平成21年5月28日より着手し、同年12月1日まで計19回実施した。

調査の結果、動物医療センター北側配管ルートにおいて複数のピット等遺構を確認しているが、本稿では重大な成果が得られた浄化槽接続部分配管布設工事における立会調査に限り報告を行うこととする。

## 【計】

1) 横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』山口

## (2) 基本層序(図41、写真99～104)

平成20年度に実施した本発掘調査により、当地の基本層序は、第1層：造成土・碎石等(層厚約0.6m)、第2層：黄褐色(2.5Y5/3)粘質土…遺物包含層1(層厚約0.3m)、第3層：褐灰色(10YR4/1)に褐色(10VR4/4)が混ざる粘質土…遺物包含層2(層厚0.1

古川橋内(古川道路)の断面

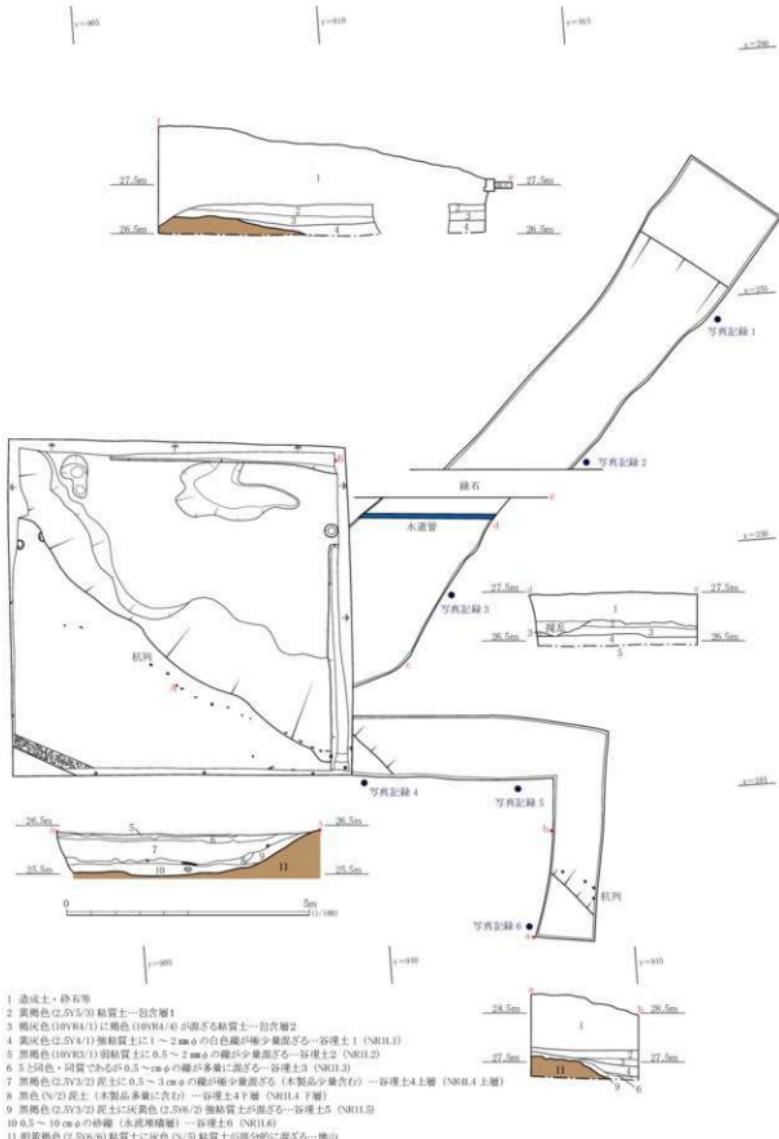


図41 平成20年度調査区と平成21年度立会調査区平面図・断面図

古川橋内(古川道路)の調査



写真 99 写真記録1土層断面（北から）



写真 100 写真記録2土層断面（北西から）



写真 101 写真記録3土層断面（北西から）



写真 102 写真記録4土層断面（北東から）



写真 103 写真記録5土層断面（北西から）



写真 104 写真記録6土層断面（北から）

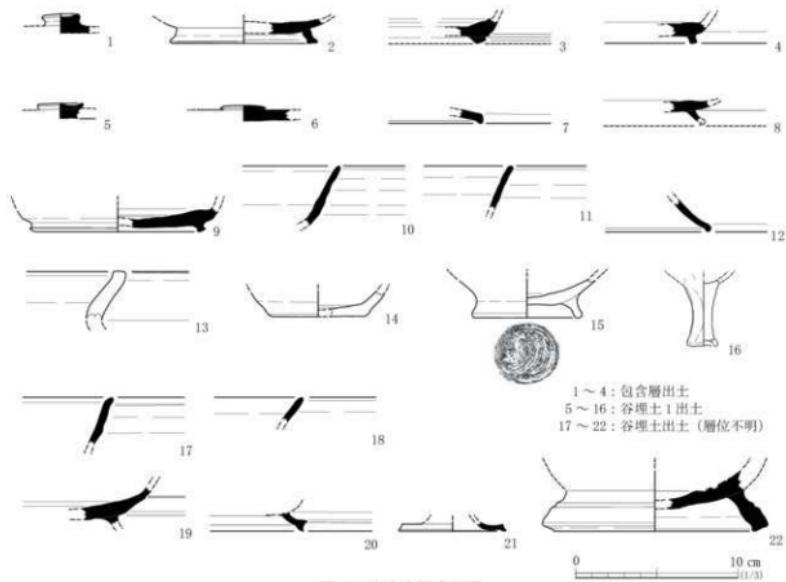


図42 出土土器実測図

～0.25m)、第4層:明黄褐色(2.5Y6/6)粘質土に灰色(N5/5)が部分的に混ざる…地山)、であることが確認されている。また、調査区内において地山が北東方向に約30度の傾斜をもって降下しており、かつて谷筋であったことが判明している。肩部から深さ約1mで谷底を迎える、埋積した土は6層に分層される(NRI L1～6)。この度の立会調査においても、この基本層序は追認されている。

### (3) 遺構(図41、写真99～104)

今回の立会調査における最大の成果は、平成21年度第2調査区にて確認された谷左肩部と対応する右肩部が確認されたことである。

#### 谷(NR1)(図41、写真99～104)

浄化槽接続南西～北東ルートにおいて、谷の右肩部を検出した。掘削は谷埋土第1層(NRIL1)に止まり、南西部において第2層(NRIL2)上面を検出している。右肩部からの落ち込み傾斜は左肩部に比して緩やかであり、そのためか左肩部に見られた土留め施設と見られる杭(矢板)列は確認されていない。今回の調査結果により、当地における谷幅が肩部において12.5mを測ることが確認された。

また、浄化槽接続西～東・北～南L字形ルートにおいて、谷左肩の延長部を検出した。谷肩部は直線的に南東方向に延びており、平成20年度第2調査区同様、肩部に杭列が検出された(写真104)。

### (4) 遺物(図42、写真105・106、表6)

遺物包含層および谷埋土から遺物が出土している。遺物包含層出土資料については、現地において

古川橋内(古川道路)の出土



写真 105 出土土器①

古川橋内(古川道路)の出土



写真 106 出土土器②

表6 出土遺物(土器)の観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①底空洞部②底面		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
				①底空洞部	②底面			
1	包含層	須恵器 壺蓋	つまみ	つまみ径1.2		①灰白色(N7/) ②灰白色(N6/)	密:0.2~1.5mmφの砂粒やや多く混ざる	
2	包含層	須恵器 高台付坪	底部	高台径9.1		①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	密:0.3~1mmφの砂粒極少 量混ざる	高台内端欠失
3	包含層	須恵器 高台付坪	底部			①②灰色(N7/)	密:0.2~1mmφの砂粒やや多く混ざる	高台内端欠失
4	包含層	須恵器 高台付坪	底部			①②灰色(N6/)	密:0.2~1mmφの砂粒やや多く混ざる	
5	谷埋土1	須恵器 壺蓋	つまみ	つまみ径2.8		①灰白色(N7/) ②灰白色(N6/)	密:0.2~1mmφの砂粒極少 量混ざる	
6	谷埋土1	須恵器 壺蓋	つまみ	つまみ径2.8		①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	密:0.3~1mmφの砂粒少量 混ざる	
7	谷埋土1	須恵器 壺蓋	口縁部			①灰色(N5/) ②灰白色(N6/)	密:0.2~1.5mmφの砂粒少量 混ざる	
8	谷埋土1	須恵器 高台付坪	底部			①②灰白色(N8/)	精緻	高台端部欠失
9	谷埋土1	須恵器 高台付坪	底部	高台径10.8		①②灰色(N6/)	密:0.1~0.5mmφの砂粒少量 混ざる	
10	谷埋土1	須恵器 壺	口縁~ 体部			①②灰色(N6/)	密:0.2~1mmφの砂粒少量 混ざる	
11	谷埋土1	須恵器 壺	口縁~ 体部			①②灰色(N5/)	密:0.2~1mmφの砂粒やや多く混ざる	
12	谷埋土1	須恵器 高坪	腹部			①灰色(GV6/1) ②灰白色(N7/)	密:0.2~1mmφの砂粒極少 量混ざる	
13	谷埋土1	土師器 壺	口縁部			①浅黄色(2,5Y7/3) ②にじみ黄(2,5Y6/3)	密:0.3~1mmφの砂粒少量 混ざる	
14	谷埋土1	土師器 壺	底部	②(5.8)		①灰白色(2,5Y8/2) ②灰白色(2,5Y8/1)	密:0.2~2mmφの砂粒少量 混ざる	
15	谷埋土1	土師器 高台付坪	底部			①浅黄色(2,5Y7/3) ②灰黄色(2,5Y6/2)	密:0.2~1mmφの砂粒極少 量混ざる	底部余切
16	谷埋土1	美濃ヶ浜式埴土器	脚部	残高4.1		①明赤褐色(2,5YR5/6) ②にじみ褐(2,5YR6/4)	やや粗:0.2~2.5mmφの砂粒 多く混ざる	
17	谷埋土	須恵器 壺	口縁~ 体部			①②灰白色(N7/)	密:0.2~0.5mmφの砂粒極少 量混ざる	
18	谷埋土	須恵器 壺	口縁部			①灰色(N5/) ②灰白色(N6/)	密:0.2~1mmφの砂粒多く混 ざる	
19	谷埋土	須恵器 高台付坪	底~ 体部			①灰白色(N7/) ②灰白色(N8/)	精緻	
20	谷埋土	須恵器 高台付坪	高台			①②灰白色(N7/)	精緻	ゆがみ大
21	谷埋土	須恵器 高坪	腹部	②(6.6)		①②灰白色(N7/)	精緻	
22	谷埋土	須恵器 壺	底部	高台径13.9		①灰色(N5/) ②灰白色(N7/)	密:0.1~1mmφの砂粒少量 混ざる	風化激しい

遺物の所属層を厳密に分別することは不可能であった。谷埋土出土資料についても、南西一北東ルートでは谷埋土1(NR1L1)出土であることを確定できたが、西一東・北一南ルートでは所属層を確定できていない。

#### 遺物包含層

同化可能資料は須恵器に限られる。1は須恵器壺蓋天井部片。径2.3cmのボタン状つまみを有する。2~4は高台付坪底部片。2は高台端部の大部分を欠失する破片であるため、高台接合部の径で反転復元を行った。底部外縁よりやや内側に高台が張り付く。長く外方に開く高台の両端はつまみ出されるが、内端部は欠失している。下端全面で接地するものと思われる。復元高台外縁径は9.1cmを測る。3は底部外縁に幅太で低い高台が付く。高台内端部で接地するが、当資料は内端部をわずかに欠失する。4は底部外縁やや内側に所面長方形の細い高台が付く。高台は内端部で接地する。

#### 谷埋土

5~16は南西一北東ルートの谷埋土1(NR1L1)出土資料である。5~7は須恵器壺蓋。5は天井部片であり、中央部が突起するボタン状つまみを有する。つまみ径は2.65~2.8cm。6も天井部片。径2.8cm、

高さ0.25cmの扁平なつまみが付く。7は口縁部片。扁平な蓋の口縁部であり、端部をわずかに下垂させる。8~11は須恵器片。8は高台付壺底部片。底部外縁の内側に、外方に長く張り出す高台が付く。高台端部は欠失する。胎土は精緻であり焼成も極めて良好である。吉山遺跡では小型高台、壺G類などに同様な特徴を持つ須恵器が多い。9も高台付壺底部片。底部外縁のやや内側に低い高台が付く。高台内外面を強くナデすることにより、高台両端部が外方に突出する。復元高台外端径は10.8cmを測る。10は口縁一体部片。体部下位より直線的に口縁に開く。口縁端部は丸く收める。全面回転ナデ調整が施されるが、ロクロ水引き痕が明瞭に残る。11も口縁一体部片。10と同様の特徴を有するが、やや器壁が薄い。12は須恵器高台付壺部片か。高台であれば屈曲の少ない壺部であり、古田遺跡では稀な器形である。外面全面に灰が被る。13は土師器壺口縁部片。器壁が厚い個体であり、大型品と見られる。外反する口縁は端部で直立気味に立ち上がる。上端はナデにより面を取り、内端部をわずかに肥厚させる。14は土師器壺底部。半底の底部であり、体部はやや内済して立ち上がる。復元底部径は5.8cmを測る。15は土師器高台付壺底部片。底部外面には明瞭に糸切り痕が残る。高台は長く外方に開き、端部は丸く收めている。内外面とも風化が激しいが、底部内面は渦巻き状に指ナデが施されている。16は美濃ヶ浜式製塙上器脚部片。脚部は細く裾部も大きく開かない、美濃ヶ浜式製塙上器の末期形態のものである。脚部中位径1.15cm、復元裾部径1.9cmを測る。

17~22は西一東・北一南L字形ルートに検出した谷理土から出土した資料である。出土層は確認できていない。17は須恵器壺口縁部片。口縁端部は丸く收める。18も須恵器壺と見られる。口縁一体部片であり、直線的に開く体部から、口縁部をわずかに外反させる。体部外面にはロクロ水引き痕が明瞭に残る。19は須恵器高台付壺底部片。底部外縁のやや内側に高台が付くが、大半を欠失している。丁寧なつくりであり、胎土・焼成に8と同様の特徴を有する。20は須恵器壺高台片。底部との接合部で剥離している。長く外反する高台であるが、余みが大きい。端部は少し尖状に拡張する。胎土・焼成に8・19と同様の特徴を有する。21は須恵器小型高台複数片。強く外反する壺部であり、端部は鳥嘴状にシャープに下垂する。当資料も胎土は精緻であり、焼成も極めて良好である。22は須恵器壺類底部片。丸底の底部外縁に長く直線的に張り出す高台が付く。高台外面には間隠が1条巡らされている。外端および内面のナデにより突出した内端部で接続する。底部内面には、高台接合時のものと見られるヘラ(箒)押し痕が多数見られる。

### (5)まとめ

平成21年度に実施した立会調査においては、前年度に実施した本発掘調査成果を補足する結果を得た。当地点における埋没谷の肩部幅が約12.5mを測ることが明らかとなるとともに、右肩からの落ち込み傾斜が緩やかであることが再確認された。谷理土上層から出土した遺物は多時期に及ぶものであることも再度明らかとなり、この成果から、平成14年度に実施された農学部解剖実習棟プレハブ校舎新設に伴う本発掘調査において検出された河川1右岸が、当地点で検出された右肩部に合致することがほぼ確実となった。河川1右岸の北側には多数の楕円柱建物跡や構列が検出されている。動物医療センター周囲にも同様の状況が予測されるため、周辺地における工事等地下の掘削を伴う事業計画に対しては、慎重な対応が必要となる。

### 【註】

1) 田畠真彦(2002)「平成11年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口

## 20. 農学部附属農場水田暗渠排水工事に伴う立会調査

調査地区 古田構内Q-15・16区、R・S・T・U・V-15区 調査面積 96m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年11月16日～27日 調査担当 横山成己 藤野好博

## 調査結果

## (1) 調査の経緯(図43、写真107)

吉田構内最東部に位置する農学部附属農場水田において、暗渠排水工事が計画された。棚田状に東から西に5枚形成されている水田においては、平成9年に実施した農学部バイオ環境制御施設新設に伴う試掘調査にて、溝状遺構や自然河川を検出し、遺物としては土師器、須恵器、製塩土器、石器などの出土を見ている。<sup>注1</sup>また、平成17年に実施した日本ペトロジー学会水田土壤の断面調査に伴う立会調査でも自然河川を確認しており、東から西に降下する水田域の一部は、過去において河道であったことが判明している。<sup>注2</sup>

この度の工事計画は、水田域北端部と最西端部にコの字状に新規の暗渠を入れるため幅約0.4mで平均0.7～0.8mの掘削を行うというものであった。既往調査の成果から、掘削域で埋蔵文化財が検出される可能性は高いと判断されたため、立会調査を実施することが提案され、承認された(平成21年度第7回埋蔵文化財資料館専門委員会:平成21年8月26日開催メール審議)。

## 【注】

- 1) 田畠直彦(2004)「農学部バイオ環境制御施設新設に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報 XVI・XVII』,山口
- 2) 田畠直彦(2007)「日本ペトロジー学会水田土壤の断面調査に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報一平成17年度一』,山口

## (2) 基本層序(図44・写真107～112)

今回の調査では、棚田状水田を西から東へ「第1区～第5区」と命名し、各区の記録を行った。なお立会調査前にすでに現耕土の大半は除去されていた(写真107)。各区の基本層序は以下の通りである。



図43 調査区位置図

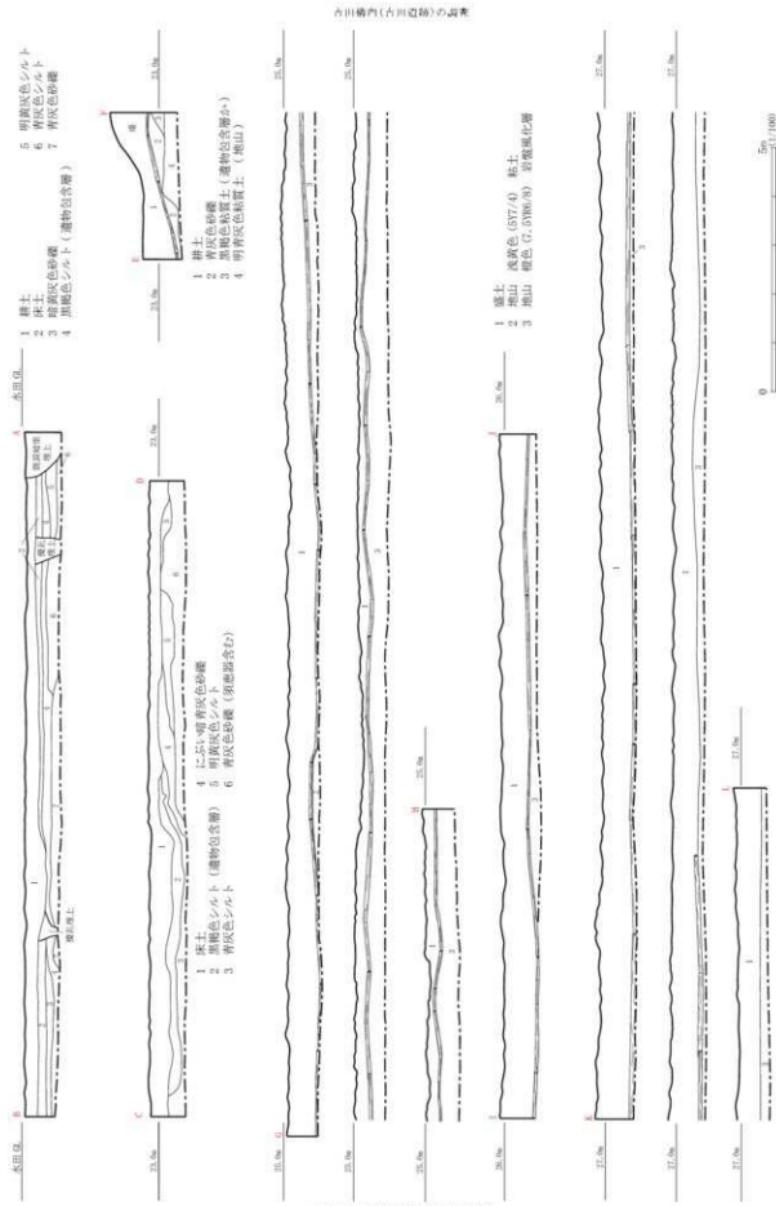


図 44 調査区土層断面図

## 第1区南側東西管路(図44、写真108)

- ①耕土(層厚0.2~0.4m)、②床土(層厚0.1~0.2m)、③暗黄灰色砂礫(層厚0.1m※調査区西部にのみ確認)、④黒褐色シルト(層厚0.1~0.2m)…遺物包含層、⑤明黄灰色シルト(層厚0.1~0.2m※調査区東部にのみ確認)、⑥青灰色シルト(層厚0.1~0.25m以上※調査区東部にのみ確認)、⑦青灰色砂礫(層厚0.2m以上)

## 第1区南北管路(図44、写真109・110)

- ①床土(層厚0.2~0.45m)、②黒褐色シルト(層厚0.1~0.25m※調査区南半部にのみ確認)…遺物包含層、③青灰色シルト(層厚0.1~0.35m※調査区南半部にのみ確認)、④明黄灰色シルト(層厚0.05~0.25m※調査区北半部にのみ確認)、⑥青灰色砂礫(0.6m以上)…須恵器含む

## 第1~2区境界部東西管路(図44、写真111)

- ①盛土・耕土(層厚0.3~0.8m)、②青灰色砂礫(層厚0.1~0.3m)、③黒褐色粘質土(層厚0.35m)…遺物包含層か、④明青灰色粘質土(層厚0.3m以上)…地山

## 第3区東西管路(図44)

- ①盛土(層厚0.1~0.6m)、②浅黄色粘土・橙色岩盤風化層…地山

## 第4区東西管路(図44、写真112)

- ①盛土(層厚0.45~0.7m)、橙色岩盤風化層…地山

## 第5区東西管路(図44)

- ①盛土(層厚0.4~0.7m)、橙色岩盤風化層…地山

上に見るように、第3区以東は盛土直下が岩盤風化層(地山)である。これは、水田造営時に北方に存する東から西に張り出た丘陵の南縁辺部を削平した結果と見られる。また、第1~2区境界東西管路以東においては、盛土下に枝木を用いた簡便な暗渠を検出した。吉田構内各地に見られる暗渠であり、近代以降のものと思われる。

明確な遺物包含層は、第1区にのみ確認された。西に隣接する農学部農業観測実験施設敷地では遺物包含層とともに掘立柱建物跡と見られる土壤列が検出されており、これと関連するものであろう。この包含層から出土する遺物は、7世紀以降の遺物が主体となる。また第1区南北管路所面に見るように遺物包含層は青灰色砂礫層上に形成されているが、この青灰色砂礫層は明確に河川堆積層であり、層中からは須恵器壺体部片が出土している。

## 【註】

1) 河村吉行(1992)「吉田構内農学部農業観測実験施設新井作発掘調査」,山口大学図書文化財資料館(編)『山口大学構内近跡調査研究年報X』,山口

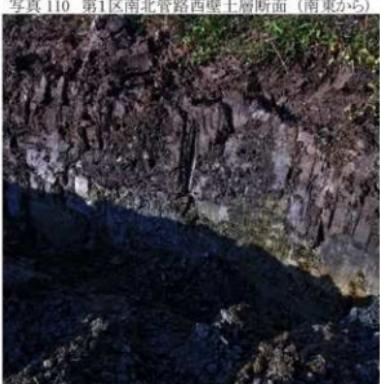
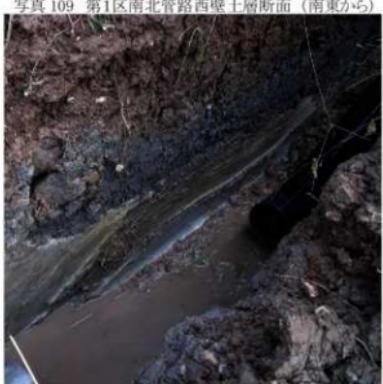
## (3) 遺物(図45、写真113・114・表7)

多数の遺物が出土しているが、全て第1区の遺物包含層、河川堆積層、床土から出土している。表探資料も第1区排土中のものである。

## 遺物包含層

1~3は須恵器高壺。1は壺底～脚部片である。壺底部外面には段が形成されており、脚部接合時に生じたものか内面中央部が突起している。脚部のほぼ中位に沈線が巡らされるが、始点と終点が合致していない。脚部中位から下位にかけて幅5.5mの回転ヘラナダが施されている。脚内面には左上→右下方向に絞り痕が見られる。壺部は欠失するが、焼き歪みが生じている。2も1とほぼ同型であるが、壺底

古川橋内(古川道路)の調査



内面は平坦であり、脚部の回転ヘラナデは幅4.5mmとやや狭く、脚上位にのみ施されている。3は坏底部。脚部は剥離している。2と異なり坏底外面に段を形成せず、ゆるやかに開きながら立ち上がる。坏接合部における脚部径は2.8cmであり、1・2同様の脚部が付ぐものと思われる。4は須恵器底部片。器壁の厚みから坏底部と思われるが、平底の底部から大きく開きながら体部に立ち上がる。復元底部径7.0cmを測る。

5～8は土師器甕。いずれも小片であり、反転復元不能である。5は口縁一体部片である。短く外反する口縁をは端部を丸く收めている。体部は膨らみが少なく、長胴形を呈すものと思われる。口縁内外面には横ナデ、体部外面は風化が激しいが縦ハケが観察される。6は口縁部片。大きく外反する口縁であり、端部は丸く收める。1に比して器壁が分厚い。内面調整は口縁部には横ナデ、頸部には縦ハケが施されている。外面は部分的に縦ハケを施した後横ナデを行っている。7も口縁部片。頸部から強く屈曲させて口縁を形成する。口縁はわずかに内溝させており、端部は尖り気味に丸く收める。内外面に横ナデを施している。8も短く外反する口縁部片。端部を丸く收めている。内外面に横ナデを施しているが、内面にはヘラ記号らしき斜線が見られる。

#### 河川堆積層

9は須恵器甕体部片。甕体部上位の破片と見られ、外面には平行叩き後カキ目が施されている。内面には同心円当て具痕が明瞭に残っている。河川堆積土出土品であるが、器面はあまり摩耗しておらず、破断面もシャープである。

#### 床土

10は須恵器坏口縁部片。短いかえりの付く口縁部片で、器壁が薄く比較的シャープなつくりである。天井部は欠失するが、ドーム状に膨らむものと思われる。内面のみ回転ナデ調整が見られ、外面は直線的に指ナデが施されている。11は須恵器高坏の裾部片。小片のため裾部径は復元できないが、小型高坏である。裾部は強く屈曲し、端部を鋭く鳥嘴状に下垂させる。胎土は精緻であり、焼成も良好である。12は上師器高坏脚部片。坏との接合部で剥離している。裾端部をわずかに欠失しているが、脚部高4.8cm、復元裾部径8.8cm、脚上端部径2.8cmを測る。色調は浅黄色～灰白色を呈しており、胎土も精選されていることから須恵器の焼成不良品である可能性を残す。13は上師器皿口縁一底部片。口縁から反転復元を行った。底部の大半を欠失するが、丸底に近い平底から緩やかに内溝しつつ大きく開き口縁に立ち上がる。口縁端部は丸く收める。内面底部付近に左下→右上方の放射状暗文が施されているが、暗文の長さは約3.5cmと短い。内面は回転ナデ調整が施されている。外面は風化が著しく調整痕が観察できない。復元口径23.0cm、復元底部径6.0cm、残高4.1cmを測る。

#### 表採

14は須恵器高坏脚部片。坏部と裾部を欠失する。全面摩耗しており、ほぼ原面を留めていない。脚部上端径は2.5cmを測り、細長の脚形は吉田遺跡出土須恵器高坏としては異色である。内面には絞り痕が見られる。

#### (4)まとめ

吉田構内南東部に検出される埋没谷の須恵器包含状況を見ると、吉田遺跡の古代初期(7世紀後半から8世紀前半)は、高坏が占める比率が非常に高いように感じられる。本調査において遺物包含層より出土した遺物にもその傾向が見られるが、吉田遺跡では当該時期の遺構が未だ明確でないため明言を避けている状態にある。西隣接する農学部農業観測実験施設敷地の調査成果からも、周辺丘陵上に

古川橋内(古川道路)の調査

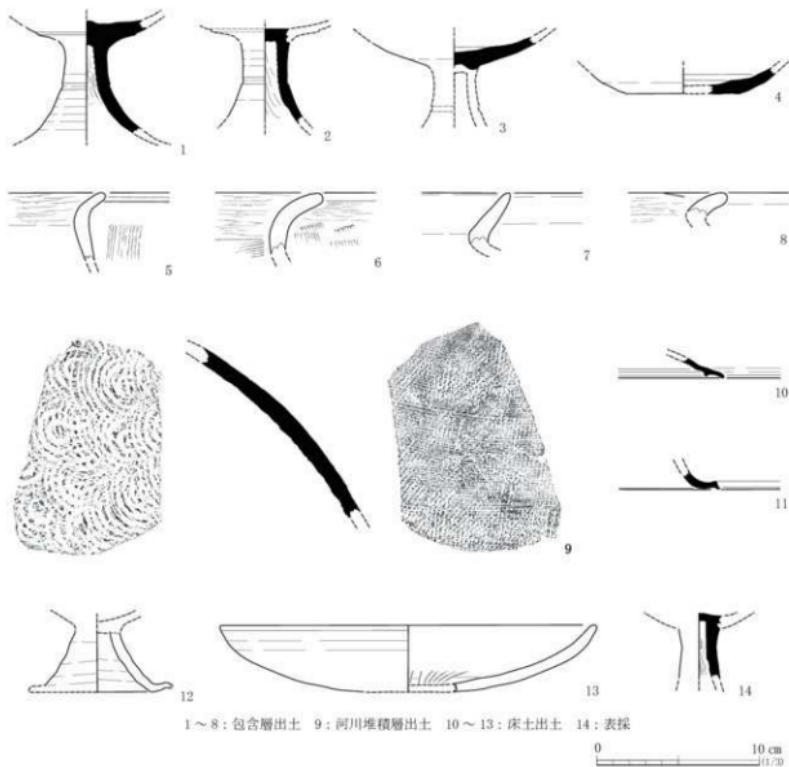


図45 出土土器実測図



写真113 出土土器①

古川橋内(古川道路)の出土



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13a



13b



14

写真 114 出土土器②

表7 出土遺物(土器)の観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①D推定底径②高さ	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	第1区 遺物包含層	須恵器 高环	脚～ 环部	脚沈線部径2.95	①灰色(N5/.) ②灰白色(N7/.)	密:0.2～0.5mmφの砂粒極 小量混ざる	頭部にゆが み
2	第1区 遺物包含層	須恵器 高环	脚部	脚沈線部径2.8	①灰色(N5/.) ②灰色(N4/.)	密:0.2～1mmφの砂粒極少 量混ざる	
3	第1区 遺物包含層	須恵器 高环	环部	环脚接合部径 2.8	①灰白色(2.5Y7/1～8/1) ②浅黄色(2.5Y8/3)	密:0.3～1.5mmφの砂粒少 量多く混ざる	
4	第1区 遺物包含層	須恵器 环	底～ 部部	(27.0)	①②灰白色(N7/.)	密:0.2～1.5mmφの砂粒極 小量混ざる	
5	第1区 遺物包含層	土師器 壺	口縁部		①にぶい赤褐色(SYR5/4) ②黒色(2.5Y2/1)	やや粗:0.2～2mmφの砂粒 多く混ざる	風化激しい
6	第1区 遺物包含層	土師器 壺	口縁部		①②にぶい黄褐色(10YR7/2)	やや粗:0.3～3mmφの砂粒 少量混ざる	
7	第1区 遺物包含層	土師器 壺	口縁部		①にぶい黄褐色(7.5YR7/4) ②にぶい黄褐色(7.5YR7/3)	密:0.3～1.5mmφの砂粒少 量混ざる	
8	第1区 遺物包含層	土師器 壺	口縁部		①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②灰黄色(10YR6/2)	密:0.2～2mmφの砂粒多く 混ざる	口縁内面 ヘラ記号
9	第1区 青灰色砂礫	須恵器 壺	体部		①灰白色(6Y7/1) ②灰白色(N7/.)	密:0.2～0.5mmφの砂粒極 小量混ざる	
10	第1区 床土	須恵器 坏蓋	口縁部		①灰白色(N7/.) ②灰色(N5/.)	密:0.2～1mmφの砂粒極少 量混ざる	
11	第1区 床土	須恵器 高环	裾部		①灰白色(N8/.) ②灰色(N6/.)	精緻	外面灰被る
12	第1区 床土	土師器 高环	脚部	裾部径8.8	①灰白色(2.5Y8/2) ②浅黄色(2.5Y8/3)	密:0.3～1.5mmφの砂粒少 量混ざる	胎土は須恵 器質
13	第1区 床土	土師器 盆	ほぼ 完形	(①23.0) (②6.0) ③4.1	①灰白色(7.5YR8/2) ②にぶい褐色(7.5YR7/4)	密:0.3～5mmφの砂粒少量 混ざる	内面に放射 線状暗文
14	第1区 表採	須恵器 高环	底部		①②灰白色(N7/.)	密:0.3～1mmφの砂粒少量 混ざる	風化激しい

古代の集落跡が埋存する可能性は極めて高いと言える。調査地周辺は農学部附属農場敷地であり、古田構内では土地の掘削を伴う開発工事から述べてきた地帯であるが、構内低地部も空閑地が減少しつつある。当調査のように、小規模工事時においても地下の情報を収集すべく立会調査を実施する必要があろう。

## 【註】

- 1)a: 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属病院改修工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報－平成18年度－』,山口  
b: 横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口  
大学埋蔵文化財資料館調査研究年報－平成20年度－』,山口

## 21. 農学部植物工場新設工事に伴う立会調査



図 46 調査区位置図

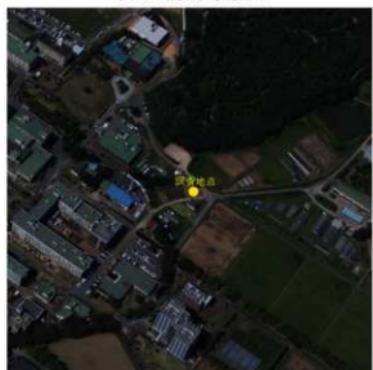


写真 115 調査地点遠景(南東から)



写真 116 調査区北西壁土層断面(東から)

調査地区 吉田構内P-15区

調査面積 98m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年2月8日～2月10日

調査担当 横山成己 藤野好博

## 調査結果

## (1) 調査の経緯(図46、写真115)

吉田構内東部域に立地する農学部農業観測実験施設の北西隣接地において、農学部により植物工場の新設が計画された。農学部農業観測実験施設新設に伴う発掘調査では、古代の掘立柱建物跡柱穴と見られる土壙列が検出されている。<sup>11</sup>新規計画建物が恒久的施設であれば予備発掘調査を実施し、地下の様相を確認すべき地点であるが、植物工場がプレハブ施設として計画されていること、10年をめどに撤去される予定であること、計画域に盛土を行うことなどから総合的に判断し、埋蔵文化財資料館専門委員会の審議により、建物周囲に予定されている設備工事(配管埋設)部分において工事中の立会調査を行うことが決定された(平成21年度第5回埋蔵文化財資料館専門委員会:平成21年7月29日開催)。

## 【注】

1) 河村吉行(1992)「吉田構内農学部農業観測実験施設新設に伴う発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、山口

## (2) 基本層序(図47・写真116)

設備工事は建物建設終了後に行われたため、敷地の表土は除去されており、代わりに盛土が施されている。現地にて確認された基本層序は以下の通りである。

- ① 盛土(層厚0.1～0.2m)
- ② 造成土(層厚0.15～0.6m以上)
- ③ 黄褐色粘質土(層厚0.1～0.25m)…旧床土
- ④ 暗褐色粘質土(層厚0.15m以上)

…遺物包含層  
確認された最下層の暗褐色粘質土(遺物包含

古川橋内(古川道路)の断面

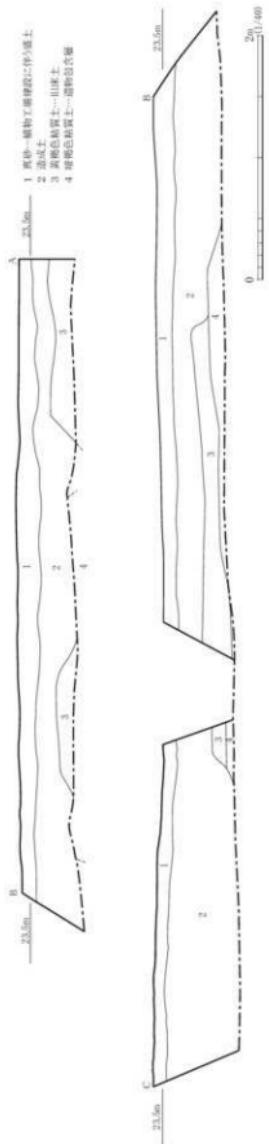
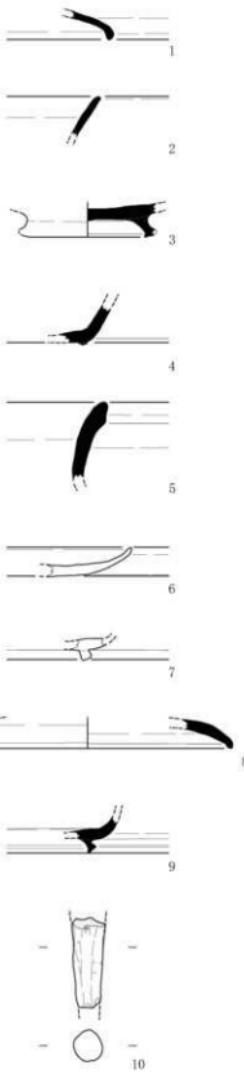


図 47 調査区断面図



1 ~ 7 : 包含層出土 8・9 : 造成土出土 10 : 旧床土出土

0 10 cm  
(1/3)

図 48 出土土器実測図

層)は、深く擾乱を受けている北東—南西管路の南西端部と南東—北西管路の北西端部以外はほぼ全域に及んでいる。農学部農業試験施設新宮に伴う発掘調査においても遺構面(地山)上に遺物包含層が確認されていることから、植物工場敷地においても遺物包含層下に遺構が遺存している可能性は極めて高いと考えられる。

### (3) 遺物(図48・写真117・表8)

遺物包含層、造成土、旧床土に遺物を確認した。

#### 遺物包含層

1~5は須恵器。1は壺蓋口縁部片。口縁端部をやや肥厚させ下垂させる。内面には回転ナデが、外側は回転ナデ後直線的な指ナデが施されている。2は壺口縁一体部片。わずかに外反するが直線的に大きく開き、口縁に至る。口縁端部は丸く收める。内外面とも回転ナデが施される。3は高台付壺底部片。底部外端より内側に高台が付く。高台は長く外方に張り出し、端部は外端を欠失するが、内端は外方に鋭く突起している。高台内端で接地し、復元内端部径は7.0cmを測る。壺底は器壁が厚く、遺存部に明確な体部への立ち上がりは見られない。壺底内面には不定方向の直線的な指ナデが施されている。残高2.1cm。4も器壁が厚く壺類底部の可能性があるが、ここでは壺底部片として報告しておく。平底の底部からくの字状に屈曲して体部に立ち上がる。体部下端に回転ヘラ削りが見られる他は回転ナデが施されている。体部外端付近に日状の小さな粘土塊が付いているが、意図的なものか不明である。5は壺口縁部片。ほぼ直立する口縁として図示しているが、小片であるため傾きに検討を要する。口縁外側を断面低三角形状に肥厚させており、上端は丸く收める。外面には横ナデ調整が明瞭に残るが、内面調整は灰を被っているため観察できない。

6・7は土師器。6は皿の口縁—底部片。平底の底部から、内湾しつつ口縁に立ち上がるが、扁平な器形であり、器高は1.7cmを測る。底部に比して口縁部の器壁が薄く、口縁端部は尖り気味に丸く收める。焼成不良品であり、かつ風化が著しく器面調整は不明である。7は高台付壺底部片。底部外端や内側に、断面方形の小さな高台が付く。高台は内端部で接地する。

#### 造成土

8は須恵器壺蓋口縁一天井部片。小片であるが歪みが少なければ口径は17.8cm内外となる。器壁は肉厚であり、天井部から緩やかに内湾して口縁に下降する。端部を短く下垂させ、下端は丸く收める。口縁部内外面にのみ回転ナデが施されているようである。9は須恵器高台付壺底一体部片。底部外端の内側に細くやや長めの高台が付く。鋭くつまみ出されている高台内端で接地する。底部から体部へは屈曲気味に立ち上がっており、口縁はあまり開かないものと思われる。小片のため高台径不明。残高2.3cmを測る。

#### 旧床土

10は瓦質土器足継の脚部片。両端を欠失している。器面を縱方向に丁寧に指ナデしており、横断面はほぼ円形を呈する。

以上が当調査で出土した図化可能遺物の全てである。本書に所収しているが、農学部附属農場水山暗渠排水工事に伴う立会調査において出土した土器に比すると、時期的にやや遅い資料が日に付く。向調査地は距離にして20mと極めて近接するが、遺物包含層の由来地が異なる可能性を有しており、注意が必要である。

古川橋内(古川道路)の出土



写真 117 出土土器

表8 出土遺物(土器)の観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁2底端高さ	色調 ①外面 ②内面		胎土	備考
					①灰白色(N7/)	②灰白色(N8/)		
1	遺物包含層	須恵器 壺蓋	口縁部		①灰白色(N7/)	②灰白色(N8/)	密:0.3~1mmφの砂粒極少 量混ざる	
2	遺物包含層	須恵器 壺	口縁~ 体部		①効灰色(N6/)		密:0.2~1mmφの砂粒少量 混ざる	
3	遺物包含層	須恵器 高台付壺	底部	高台内径(7.0)	①灰白色(N7/)	②灰白色(5Y7/1)	密:0.2~1mmφの砂粒極少 量多く混ざる	
4	遺物包含層	須恵器 壺	底部		①灰白色(N7/)	②灰白色(N8/)	密:0.2~0.5mmφの砂粒極 少量混ざる	底部に粘土 塊付着
5	遺物包含層	須恵器 壺	口縁部		①灰白色(N7/)	②灰色(7.5Y6/1)	密:1~1.5mmφの砂粒少量 混ざる	内面灰被る
6	遺物包含層	土師器 盆	底~ 口縁部		①②灰白色(5Y8/1)		密:0.2~0.5mmφの砂粒極 少量混ざる	風化激しい
7	遺物包含層	土師器 高台付壺	底部		①灰黄色(2.5Y6/2)	②黄色(2.5Y6/1)	密:0.2~1mmφの砂粒多く 混ざる	焼成不良
8	造成土	須恵器 壺蓋	口縁~ 天井部	①(7.8)	①②灰白色(N7/)		密:0.3~1mmφの砂粒やや 多く混ざる	
9	造成土	須恵器 高台付壺	底~ 体部		①②灰白色(N7/)		密:0.1~0.5mmφの砂粒極 少量混ざる	
10	旧床土	瓦質土器 足鍋	脚部		①灰色(5Y6/1)		密:0.2~0.5mmφの砂粒極 少量混ざる	

## (4)まとめ

既往の調査により、吉田構内の中東方向を取り巻く低丘陵上には、古代の遺構・遺物が密に分布することが指摘されている。また検出される掘立柱建物の配置や規模、そして出土する墨書き器や円筒鏡、製塗土器(美濃ヶ浜式・六連式)、綠釉陶器、帶金具未完成品、輪羽口などから、古代において官衙が存在した可能性が高いと推定されている。

当調査を含め、平成21年度に実施した立会調査においても、低丘陵地の地下に密に古代の遺物が含まれていることが明らかとなった。

筆者は、既往調査の出土遺物から古代官衙関連施設は吉田構内南東部から北西方向に、施設名で換言すると農学部附属動物医療センター敷地周辺から第2学生食堂敷地、大学会館敷地周辺へと移動するのではないかと推測していた。しかし、当調査と農学部附属農場水田暗渠排水工事に伴う立会調査成果から考えると、同一時期における施設・集落の分布はさらに複雑であった可能性が高い。

低丘陵地に展開する農学部附属農場敷地においては、小規模の開発工事が断続的に実施されている状況にあるため、遺構の面的な確認ができない。しかし、当調査のように狭小な範囲においても遺物包含層を確認し、堆積層に包含される遺物を綿密に精査することによって、一定程度の古環境の復元は可能と考える。今後とも埋蔵文化財の保護を第一義とした調査に努めたい。

## 【註】

- 1)a:横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属畜産院改修工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報一平成18年度』,山口
- b:横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修直前期に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報一平成20年度』,山口
- 2)田畠直彦(2002)「平成10年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
- 3)河村吉行(1985)「吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報III』,山口

## 22. 男子学生寮新設工事に伴う立会調査

調査地区 古田構内M-10・11区

調査面積 1350m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年9月14日～平成22年1月27日

調査担当 横山成己

## 調査結果

古田構内北部に立地する男子学生寮(古田寮)の北東空閑地に、新学生寮(第2吉山寮)新設が計画された。

予定地は、姫山から南西に派生する丘陵の先端部に位置するが、現況地形から見て丘陵端部が大きく切断されていることは明瞭であり(写真118)、昭和56年度に実施された古田構内学生部馬場整備工事に伴う立会調査においても、予定地の表土下は三群變成岩からなる岩盤となっていることが報告されている。このことから、新学生寮建設予定地に関しては慎重工事扱いとし、新営に伴い則辺域に広く実施される設備工事に対し、工事中の立会調査を実施することが提案され、承認された(平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会:平成21年3月18日開催)。今回の開発工事の総掘削面積は1350m<sup>2</sup>と広大であり、調査も長期間に及んだが、本稿では学生寮の南西域にて実施した管路埋設工事(写真119)に伴う立会調査に拘り報告を行う。

掘削工事は北から南方向に実施された。調査はA～Fの6地点にて実施した(図49)。A地点の層序は①碎石(層厚0.2m)、②砂:造成土(層厚0.55m)、③赤土:造成土(層厚1.35m以上)であり(写真120)、当地点が厚く造成を受けていることが確認された。B地点においても①碎石1(層厚0.5m)、②碎石2(層厚0.4m)、黄褐色土:造成土(層厚0.8m以上)の層序が確認されるに止まり(写真121)、自然堆積層や地山は検出されなかった。管路において初めて地山が検出されたのはC地点であり、①アスファルト(厚0.05m)、②碎石(層厚0.2m)、③バラス(層厚0.7m)、④真砂(層厚0.5m)、暗灰黄色粘土:地山(0.35m以上)の層序が確認された(写真122)。このC地点から南に向かい地山検出面は高度を上



図49 調査区位置図



写真118 調査区周辺遠景(北から)



写真119 調査区近景(南から)

げていき、D地点においてはアスファルト(厚0.05m)と碎石(層厚0.2m)直下が地山(明黄色に赤褐色が混ざる岩盤風下層)となる(写真123)。D地点以降、碎石の厚みは地点により異なるものの、その直下に地山が検出されている(図50)。D地点は、大学会館の北後背に南北方向に延びて来る丘陵の東斜面から西に派生する低丘陵部分に当たり、丘陵上部を削平して道路舗装を行ったものと想像される。

遺構はE地点において初めて検出された。E地点では、明黄色砂質土の地山上面に幅約0.8mで東から西に走る溝状遺構を検出した(写真124)。埋土は暗灰色粘質土であり、部分的に遺構掘削を行ったが、遺構深度は0.05cm程度であった。遺物は出土していない。

E地点以南は新教育研究棟新営および正門改修工事に伴い道路が付け替えられた部分である。道路は北—南方向に急傾斜で下っている。正門改修等工事は「慎重工事」対応であったため、その一連工事で実施された道路付け替え工事時に立会調査を行っていなかった。今回の再掘削では立会調査にて対応することとなったが、道路の北半部E地点にて明黄色砂質土の地山上面にピットおよび土壤状遺構を検出した(写真125)。ピットは径0.3m程度、土壤状遺構は長軸0.6~0.8mを測る。埋土はいずれも暗灰色粘質土であった。工事の工程上遺構掘削を実施する時間がとれず、やむなく写真撮影と概略図を記録するに留めた。道路の南半部はすでに削平されているようで、アスファルト、碎石下に地山面が検出されるのみであった。

吉山構内男子学生寮周辺は、土地の掘削を伴う工事計画が少なく、発掘調査歴もわずかである。当該地は丘陵と小規模な階級谷が複雑に入り組んでおり、今回の立会調査においてもA~C地点は谷の埋め立て地、D~F地点は丘陵削平地と考えられる。調査の結果通り、削平を受けつつも丘陵地には遺構が埋存する可能性が高く、谷地形においても旧堆積層が遺存していれば良好な遺物包含層が形成されている可能性が残る。

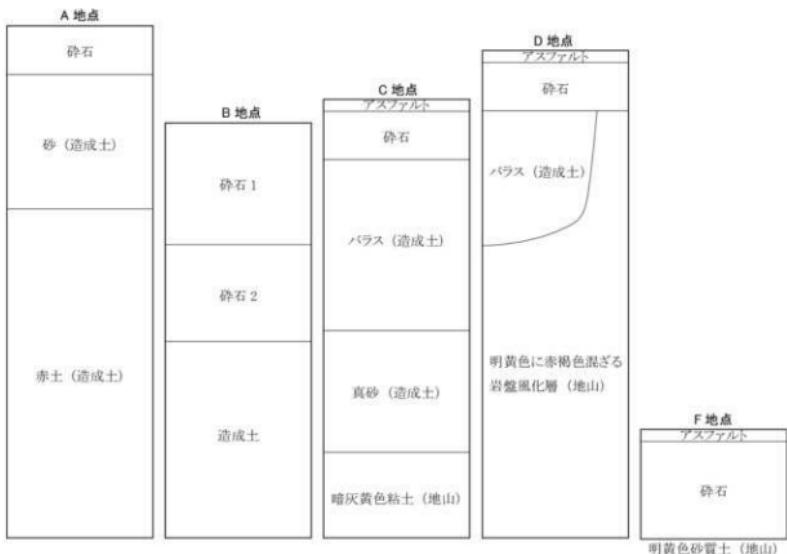


図 50 調査区土層柱状図 (S=1/20)



写真 120 A 地点土層断面（南から）



写真 121 B 地点土層断面（西から）



写真 122 C 地点土層断面（西から）



写真 123 D 地点土層断面（北西から）



写真 124 E 地点遺構検出状況（北東から）



写真 125 F 地点遺構検出状況（北東から）

男子学生寮南西に広がる低地は、かつては農学部附属農場実験水田として存在し、現在は国際・社会連携ゾーンとして空閑地のまま残されている(図107)。発掘調査歴としては、わずかに吉田地区統合移転時に実施された山口大学吉田遺跡調査団による発掘調査記録が残されるのみである。学部校舎等が密集する構内中央部には、現在空閑地と呼べる場所が存在しない状況にあり、将来的な新規建物建設には当該地が予定地として当てられることが予想される。そのような場合に備え、周辺地における掘削工事においては常に地下の状況を確認しておく必要がある。

## 【注】

- 1) 河村吉行(1982)「昭和56年度山口大学構内吉田遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報 I』,山口
- 2) a: 田嶋直彦(2012)「新教育研究棟設備関連工事に伴う土壠掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』,山口  
b: 横山成己(2012)「正門改修等工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』,山口
- 3) a: 山口大学古田遺跡調査団(1976)『山口大学構内古田遺跡発掘調査報告』,小野忠典(編),山口  
b: 豆谷和之(2000)「吉田遺跡第 I 地区D区の調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報 XIII』,山口

## 23. ラグビー場排水整備工事に伴う立会調査

調査地区 古田橋内E-20区、F-21区

調査面積 58.6m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年2月12・13日

調査担当 横山成己

## 調査結果

古田橋内南西部に位置するラグビー場南西端部において、排水整備工事が計画された。本事工に関しては、平成20年度末に開催された第10回埋蔵文化財資料館専門委員会にて新規事業計画書が提出されていたが、掘削場所や着工時期が未定であったため、埋蔵文化財保護対応は保留されていた。平成21年度後半に至り、工事の詳細と着工時期が確定したことを受け、館長、副館長、館員の協議により、工事中の立会調査を実施することが決定された。

排水整備工事は、幅約0.7m、深さ約0.6~0.65mで総延長82mを掘削し、U字溝を埋設するものである。掘削は2日間をかけて行われるため、2地点において断面確認調査を実施した(図51)。

A地点では、現表土下0.5mに黒褐色粘質土を確認した(写真126)。層厚は0.1m以上であり、旧耕土もしくは遺物包含層と見られる。

B地点も現表土下0.51mに黒褐色粘質土を検出した(写真127)。この黒褐色粘質土は、所々造成土により隠されながらも掘削路全域に広がっている。立会中に遺物は確認されなかったが、調査地周辺は盛土が薄く、黒褐色粘質土下に造構面が残されている可能性が高い。運動場であるため地下の掘削を伴う工事計画は設備工事以外に考えがたいが、今後とも慎重な埋蔵文化財保護対応が必要である。



図51 調査区位置図



写真126 A地点土層断面（北から）



写真127 B地点土層断面（北東から）

## 24. アーチェリー場整備工事に伴う立会調査



図 52 調査区位置図

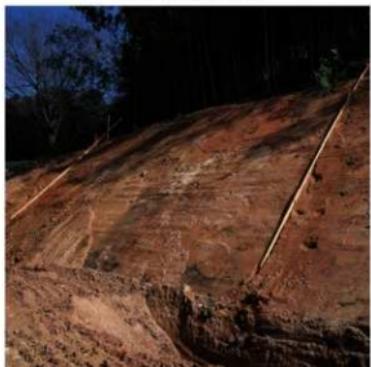


写真 128 丘陵断面(西から)



写真 129 日吉神社横穴墓(南から)

調査地区 吉田構内N-7・8区、O-7・8区

調査面積 750m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年2月23日・3月19日

調査担当 横山成己

## 調査結果

男子学生寮(吉田寮)北東空閑地に新男子学生寮が建設されることとなり、当該地に設置されていたアーチェリー部の練習場が使用停止となった。学生支援部により、新男子学生寮の北東丘陵斜面を削平し、アーチェリー場を新設する工事計画(図128)が提出されたことを受け、工事中の立会調査の実施が決定された(平成21年度第5回埋蔵文化財資料館専門委員会:平成21年7月29日開催)。

削平が予定されている丘陵の北西部には、谷を挟み別丘陵が南東方向に伸びている。この丘陵の南東斜面中腹に、古く6基の横穴墓が発見されており、大正7年(1918)の発掘により、7世紀代の須恵器、土師器、金環、鉄刀、人骨等豊富な遺物が発見されている(写真129)。遺跡は現在「日吉神社横穴墓群」と呼ばれ、現在でも見学可能である。出土品は一括して山口県立山口博物館に収蔵されている。

日吉神社横穴墓群の対岸地における丘陵削平計画を受け、工事前の1月に複数回踏査を実施したが、横穴墓らしき落ち込みや崖みは確認されなかった。慎重を期し、削平後の2月23日に丘陵断面の確認調査を行った(写真128)。

結果、横穴墓の残骸らしき跡みも確認されず、当該地には墳墓が造営されていないことが再確認された。

吉田構内では、大学会館北後背に聳える丘陵東斜面に横穴墓1基が現存している(本書44~46頁参照)が、丘陵地の踏査は不十分であり、未発見の横穴墓が存在する可能性も残されている。時期を見て踏査を進みたい。

## 【註】

1) 石川卓美(1990)『増補 平川文化散歩』山口

## 25. テニスコート改修工事に伴う立会調査

調査地区 古川橋内C-17区、D-16・17区、E-15・16区

調査面積 18.3m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年3月26日

調査担当 横山成己

調査結果

吉田橋内西端部に位置するテニスコートにおいて改修工事が計画された。本工事に際しては、平成20年度末に開催された第10回埋蔵文化財資料館専門委員会にて新規事業計画書が提出されていたが、改修内容や掘削場所、着工時期が未定であったため、埋蔵文化財保護対応は保留されていた。平成21年度末に至り、工事の詳細と着工時期が確定したことを受け、館長、副館長、館員の協議により、工事中の立会調査を実施することが決定された。

工事では、審査台を設置するため、テニスコート中央8ヶ所(A~H調査区)に基盤設置のための掘削が行われた(図53)。掘削の平面規模はA調査区が1.8m×1.8m、B・C・E・G調査区が2.0×1.7m、D・F調査区が2.4×1.7m、H調査区が3.0×1.7mである。掘削深度はいずれも0.8mであった。

全調査区において、砕石下に1~2層の造成土を確認し、その下位に明黄色粘土層を確認した(写真131)。一見地山状の上であるが、所々にブロック状に灰色粘土が混ざる状況から、これも大手造成時の客土と判断した。

既往の調査に日を向けると、平成7年度に実施されたテニスコートと陸上競技場の境界部において実施された公共下水道接続工事に伴う試掘・事前調査において、柱穴や土坑、溝、河川跡など遺構が多数検出され、弥生土器、土師器、石器などの遺物の出土を見ている。テニスコート敷地においても掘削深度がさらに深まれば、遺構が検出される可能性が高い。今後も慎重な対応が求められる。

## 【註】

1)報告書未刊。



図 53 調査区位置図



写真 130 調査地全景（北東から）



写真 131 D 調査区北西壁土層断面（南東から）

## 26. 共通教育講義棟改修工事に伴う立会調査



図 54 調査区位置図



写真 132 丘陵断面(西から)



調査地区 吉田構内L-17区

調査面積 11.6m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年3月15日

調査担当 横山成己

## 調査結果

吉田構内中央部に位置する共通教育講義棟の改修工事が計画された。当工事も平成20年度末に開催された第10回埋蔵文化財資料館専門委員会にて新規事業計画書が提出されていたが、地下の掘削を伴う工事範囲や着工時期が未確定であったため、埋蔵文化財保護対応は保留されていた。平成21年度末に至り、工事の詳細と着工時期が確定したことを受け、館長、副館長、館員の協議により工事中の立会調査を実施することが決定された。

講義棟改修工事では、関連設備工事として建物北東部に新規配管設置工事が計画された(図54)。建物改修工事が最終盤を迎えた3月より配管工事が着手され、3月15日に立会調査を実施する運びとなった。当日は降雨に見舞われ、管路の大半が水没していたため、比較的上層断面の精査が容易であった管路上手において断面観察を行った。

確認した屢序は、①アスファルト(厚0.05m)、②砕石(層厚0.1m)、③灰黄色砂礫(層厚0.3m)、④灰色砂礫(層厚0.2m)、⑤黄色シルト(層厚0.1m以上)である(図55、写真132)。

最下層の黄色シルトは地山で上位2層の砂礫は河川堆積と思われたが、掘削範囲内でその広がりを確認できなかったため断言できない。周辺地で地下の様相を観察できる機会を待ち、再度報告を行いたい。

## 27. 石影実習場整備その他工事に伴う立会調査

調査地区 古田構内N・O・P-8、Q-9区

調査面積 約33m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年9月8・15・17日

調査担当 田畠直彦

調査結果 吉山構内において、教育学部美術教育専修(美術教育教室)で使用する石影実習場の整備工事が決定し、掘削工事がA地点(プレハブ設置)、B～F地点(電柱)、G地点(進入路法面拡幅)の合計7箇所で行われることになった。工事箇所周辺においてはこれまでほとんど調査が行われておらず、地下の状況が不明であることから、立会調査を実施することになった。

調査の結果、A地点では現地表下10cmまで掘削が行われたが、表土の範囲内であった。B地点では現地表下約160cmまでが造成土・耕土で、約160～217cmがオリーブ黒色(5Y3/1)シルトであった。同層から遺物は出土しなかったが、遺物包含層の可能性がある。C地点では現地表下約20cmまでが表土、約20～110cmが地山であるにぶい黄褐色(10YR5/1)粘質土、約110～160cmが橙色(2.5YR6/6)粘土であった。D地点では、現地表下約32cmまでが表土で、約32～36cmが地山であるにぶい橙色(2.5Y6/4)粘質土、約36～180cmが橙色(5YR6/6)・灰白色(5YR8/2)の岩盤風化土であった。E地点では現地表下約150cmまでが造成土、約150～170cmが旧耕土と考えられる緑灰色(5G5/1)シルト、暗緑灰色(5G3/1)シルトのブロック土であった。F地点では現地表下約150cmまで掘削を行ったが、すべて造成土の範囲内であった。G地点では現地表下30cmまでが表土で、以下96cm(道路面)まで橙色(7.5YR6/6)粘質土の地山であった。

今回の掘削工事により、埋蔵文化財は一切認められなかつたが、調査区一帯の地下の状況については不明な点が多いため、今後とも埋蔵文化財の保護に注意が必要である。



図56 調査区位置図



写真133 B地点土層断面（南東から）



写真134 G地点掘削状況（南東から）

### 第3節 白石構内(白石遺跡)の調査

#### 1. 教育学部附属山口小学校共用棟・教室棟B間渡り廊下屋根取設工事に伴う立会調査



調査地区 白石構内山口小学校敷地中央空閑地

調査面積 2.5m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年8月4日

調査担当 橋山成己

調査結果 白石構内小学校敷地において、共用棟と教室棟B間に渡り廊下を取設する工事が計画された。開発予定地は小規模であったが、予定掘削深度が地山に達することが予測されたため、工事中の立会調査を実施することが平成21年度第3回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年5月19日開催メール審議)において決定された。掘削工事は小学校が夏期休暇となる8月4日に実施された。

工事掘削地点は校舎中庭に設けられた植物園の南西角部分に当たり(図57)、盛土により周囲の地盤に比して約0.6m高まっている。掘削後、上層断面に精査を加えた結果、層序は①0.5mの真砂土(表土・盛土)、②0.6mのガラ・川原石混じりの黒色土(造成土)、③0.1m以上の明黄褐色シルトであることが判明した(図58・写真135)。この明黄褐色シルトが地山となる。

掘削域の地山上面に遺構を探したが、確認には至らなかった。直上に水平に造成土が置かれていることから、旧地形は大幅に削平を受けているものと推測される。

今回の立会調査では埋蔵文化財の遺存を確認できなかったものの、既往の調査成果等により、小学校敷地内には散発的に遺構・遺物が遺存していることが明らかとなっている。掘削規模の大小にかかわらず、継続的な埋蔵文化財保護対応が必要である。

## 2. 教育学部附属附属幼稚園園内中庭池改修整備工事に伴う立会調査

調査地区 白石構内幼稚園敷地北棟側中庭

調査面積 50m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年8月17日

調査担当 横山成己

**調査結果** 白石構内幼稚園敷地北東隅部に設置されている池が老朽化したことを受け、改修工事が計画された。工事予定地北西に接する地点では、既往の調査で古墳時代の山河川が確認されていることから、工事中に立会調査を実施することが平成21年度第3回埋蔵文化財資料館専門委員会（平成21年5月19日開催メール審議）において決定された。掘削工事は幼稚園が夏期休暇となる8月17日に実施された。

工事は50m<sup>2</sup>と相応の範囲をもって実施されたが、その大部分は既設の池施設の取り壊しであり、新規に地下を掘削した範囲は、池南側に計画された樹木植栽箇所のみであった（図59）。

計画地における上層断面精査により確認された層序は、①0.3mの表土、②0.05mの造成土、③0.2mの黄色粘土、④0.1m以上の灰黄色砂砾である。また、③黄色粘土を切り込むかたちで、灰白色シルト層が検出された（図60・写真136）。土質から直ちにこれを遺構とは断定できないため、ここでは不明落ち込みとして報告しておく。

前述したように、山口小学校敷地同様、幼稚園敷地においても既往の調査により散発的に埋蔵文化財が確認されている。いずれも小規模な開発工事に伴う調査であるため、現在でも遺跡の性格を把握することが困難な状態にあるが、今後も継続的に掘削予定地の断面調査を実施することによって、埋蔵文化財の分布状況が明らかとなってくるものと思われる。

## 【註】

- 1) 河村古行・古賀真木子(1991)「亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水配水管布設に伴う発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報

IX』、山口



図 59 調査区位置図



写真 136 土層断面（南から）

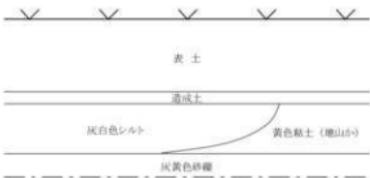


図 60 土層断面模式図 (S=1/20)

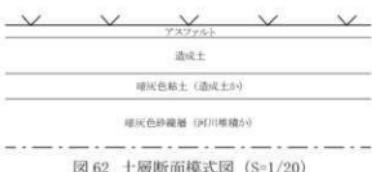
## 3. 教育学部附属山口中学校中庭底取付工事に伴う立会調査



図61 調査区位置図



写真 137 土層断面(東から)



調査地区 白石構内山口中学校中庭南東隅

調査面積 1.5m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年12月28日

調査担当 横山成己

調査結果 白石構内山口中学校中庭南東隅部において底取設工事が計画された(図61)。工事計画地の南北側は、平成2年に実施された教育学部附属山口中学校汚水排水管布設工事に伴う事前・立会調査で調査済みになっている区域であったが(図74)、予定地北東側は未調査部分に当たるため、工事中に立会調査を実施することが平成21年度第1回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年4月22日開催)において決定された。掘削工事は中学校が冬期休暇となる12月28日に実施された。

底部基礎埋設部分にて土層断面精査を行ったところ、基本層序は①0.02mのアスファルト、②0.18mの造成土、③0.1mの暗灰色粘土(造成土の可能性あり)、④0.2m以上の暗灰色砂疊であることが確認された(図62・写真137)。

最下層の暗灰色砂疊層は河川堆積土である可能性が高いが、掘削範囲が狭小であるため断定できない。

既往の調査により、山口中学校敷地内には複数の旧河川とともに溝状遺構の分布が確認されており、その埋土や遺物包含層から主として縄文時代から古墳時代の遺物が出土している。幼稚園・山口小学校敷地同様、いずれも小規模工事に伴う調査であることから、こちらも遺跡の性格が不明瞭な状況にあるため、継続的に地下の情報収集に努めなければならない。

## 【註】

- 1) 古賀真木子(1992)「龜山構内教育学部附属山口中学校汚水配水管布設に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館  
(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報』,山口

## 第4節 小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

### 1. 小串宿舎B棟埋設ガス管改修工事に伴う立会調査

調査地区 小串構内宿舎B棟南西側空閑地

調査面積 58m<sup>2</sup>

調査期間 平成22年1月14日

調査担当 横山成己

調査結果 小串構内北部の教職員宿舎敷地において、ガス管改修工事が計画された。当工事計画は、平成20年度末に開催された第10回埋蔵文化財資料館専門委員会に事業計画書が提出されていたが、工事内容の詳細が不明であったため、埋蔵文化財保護対応を本定として保留した計画であった。平成21年9月に至り、工事内容の詳細が確定したことを受け、管轄自治体の指導の下、館長・副館長・資料館員の協議の上、新規掘削予定地に限り工事中の立会調査が必要と判断し、文化財保護法93条書類の提出を行った。立会調査は、午を越えた1月14日に実施した。

新規掘削予定地は、宿舎B棟の南西部分に当たる(図63)。当地点に関しては、その半部は平成16年に実施した医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査により調査を実施した区域と重複していた(図75)ため、地の様相は詳細に把握されていた。0.9mに止まるこの度の掘削では、遺物は包含されるものの近世以降の遺物が主体である旧耕土内に収まることは明確であった。調査の結果、予測通り約0.2mの旧耕土を確認した(図64・写真138)が、遺物は出土しなかった。

小串構内では、学部校舎や病棟が集中する南部域は既設建物が密集するため、新規建物等は北部域に計画されることが予想される。北部域は埋蔵文化財の分布が密であり、今後も慎重に対応したい。

#### 【注】

- 横山成己(2006)「医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成16年度－』、山口



図63 調査区位置図



写真138 北西壁土層断面(南東から)

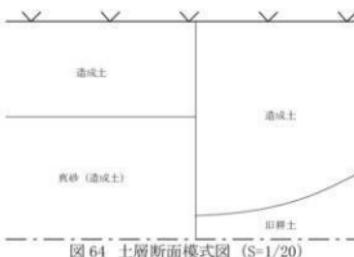


図64 土層断面模式図 (S=1/20)

## 第5節 常盤構内(山口大学工学部構内遺跡)の調査

### 1. 工学部ガス管改修工事に伴う確認調査



図 65 調査区位置図



写真 139 調査区全景(南西から)



写真 140 土層断面(北西から)

**調査地区** 常盤構内南西端部空閑地

**調査面積** 12.5m<sup>2</sup>

**調査期間** 平成21年10月13日

**調査担当** 横山成己

**調査結果** 常盤構内南西部、工学部図書館南側の西門東部域において、ガス管改修工事とともに地下の掘削工事が計画された(図65)。平成21年度時において、山口大学工学部校内遺跡は構内北東部のみが「周知の埋蔵文化財包蔵地」として範囲指定されていたが、工事計画地周辺での調査歴が存在しなかつたため、埋蔵文化財の新規発見の可能性も生じたため、掘削時に確認立会調査を実施する運びとなった。調査は平成21年10月13日の1日限りで実施した。

掘削工事は幅約1m、全長45mの規模で北東—南西方向に行われた。掘削深度は北東端部で0.95m、南西端部で0.9mを測ったが、全域造成工事に止まつており、自然堆積層および地山の確認には至らなかった(写真139・140)。

常盤構内は、大学造成時に大規模に削平を受けていることが既往の調査により判明しており、明確な埋蔵文化財は構内北西部以外に遺存していない状況が想像される。ただし、旧地形を考えると構内南—西縁辺部においては埋蔵文化財が遺存する可能性を完全否定することはできない。

今後とも、掘削深度の深い工事計画が持ち上がった場合には、時間が許す限りで確認調査を実施する所存である。

## 第6節 光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査

1. 教育学部附属光中学校改修工事に伴う本発掘調査・立会調査

**調査地区** 光構内附属中学校玄関北東側

**調査面積** 約108m<sup>2</sup>(本発掘調査:A調査区約30.0m<sup>2</sup>、B調査区約30.4m<sup>2</sup>、C調査区35.8m<sup>2</sup>、立会調査:D調査区11.8m<sup>2</sup>)

**調査期間** 本発掘調査 平成21年5月18日～

6月4日

立会調査 平成21年12月11日

**調査担当** 山畑 直彦

**調査結果**

(1) 調査の経緯(図66、写真141)

平成20年度補正予算措置で教育学部附属光中学校校舎の改修工事が決定したことに伴い、中学校校舎玄関周囲において、身障者用エレベーター、屋外階段、排水設備の改修、スロープ設置工事が計画された。

T.事予定地の南東に位置する中学校体育館敷地周辺では、縄文土器～中世(室町時代)の遺物を含む遺物包含層が検出されている。また、附属小学校校舎周辺・運動場においても、古墳時代・近世後半～近代のピット群、土壙等の構造が検出されていることから、今回の工事予定地においても、埋蔵文化財が遺存する可能性が十分に考えられた。以上の状況を踏まえ、平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会(3月18日開催)において、当該工事における埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、身障者用エレベーター・屋外階段予定地(A・B調査区)、スロープ予定地(C調査区)については本発掘調査、排水設備部分(D調査区)については、立会調査を実施することになった。

(2) A・B調査区

エレベーター・屋外階段新設予定地である。光構内では砂層・砂質土上に遺構が存在する関係上、調査時に壁面が崩落する恐れがあることから、図67の南西部:A調査区、北東部:B調査区に分割して調査を行った。なお、本報告にあたり、遺構は通し番号を付け直している。



図66 調査区位置図



写真141 調査前全景(南西から)



写真142 A・B調査区設定状況(南西から)

## a.基本層序(図67、写真143・144・146・147)

A・B調査区の基本層序は下記の通りである。

第1層 表土:(層厚約10cm)

第2層 造成土(層厚約30~40cm)

第3層 灰黄色(2.5Y7/2)粗砂(層厚約5~20cm)

第4層 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂・暗オリーブ色(5Y4/3)粗砂(層厚約5~20cm)

第5層 オリーブ黄色(5Y6/4)粗砂(層厚約2~10cm)

第6層 黒褐色(10YR3/2)粗砂(層厚約5~10cm)

第7層 造構面検出層(層厚約25~55cm以上)

7-1・4層 黄褐色(10YR5/6)粗砂

7-2層 灰オリーブ色(5Y5/3)粗砂

7-3層 黄褐色(10Y5/6)粗砂・灰オリーブ色(5Y5/3)粗砂・黒褐色(7.5YR3/2)・暗黄褐色

(2.5Y7/6)、暗オリーブ色(5Y4/3)粗砂、細砂の互層

第8層 黒褐色(2.5Y3/2)段

調査区北東部・南東部は既設校舎の建設に伴う擾乱を受けているため、基本層序が確認できたのは北西壁面のみで、校舎縁辺では第2層直下で第7層を検出した。また、北西壁面においても、道路舗装に伴い現地表下約20cmまでは造成土・コンクリート基礎となっていた。以下では北西壁の状況を中心に報告する。

第3層、第4層は調査区全域で確認された。いずれもB調査区北東部において若干緩やかに下降するものの、ほぼ水平に堆積する。遺物は出土していないが、近～現代の整地層・造構面である可能性が高い。第5層・第6層はB調査区のみで検出され、北部において下降している。遺物は出土していない。第7層は造構面検出層である。また、摩滅した土器片が少量出土したが、時期が確定できるものはなかった。調査区北東部・南西部では第7-1・4層：黄褐色(10YR5/6)粗砂が検出され、上面から多数の遺構を検出した。断面では確認できなかったが、両層は同一層である可能性がある。また、第7-4層はB調査区北部から下降している。造構との前後関係は不明であるが、浸食作用により削平されたものと考えられる。第7-1・4層間では第7-2・3層が堆積しており、第7-2層上面ではSK2、第7-3層上面ではPit33、35が検出された。第8層はA調査区北東部で確認した。第7-2・4層の直下に堆積する。ややしまりのある疊層で遺物は出土していない。

## b.造構(図67・68・写真148・149・151~156・表9)



写真143 A調査区北西壁土層断面（南から）



写真144 B調査区北西壁土層断面（南から）

第7層上面からはピット42基、上塙3基が検出された。以下では平面形が円・楕円形で一边が100cm以上のものをピット、100cm以下のものを土壙として報告する。

ピットは規模・配置ともにばらつきが大きく、掘立柱建物を復元するには至っていない。また、Pit25のように深さが60cmを越えるものもみられるが、深さが20cmを越えるピットは11基しかないとから、半数以上のピットについては柱穴の機能を有していたかどうかを含め、不明な点が多い。また、一部のピットからは土師器片が出土したが、小片で摩滅したものが多く、時期の特定はできない。

土壙のうち、SK1は両端に柱穴状の落ち込みがみられる。土壙断面では確認できなかつたが、2基のピットが切り合つたものである可能性がある。SK2は平面形が不整形、SK3は平面形が楕円形を呈し、断面形はすり鉢状を呈する。SK1・3からは土師器片、SK2からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵

表9 遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考
ピット	Pit1	楕円形	29×46	10.0	土師器片		
	Pit2	楕円形	30×53	27.3			
	Pit3	楕円形	22×25	15.3			
	Pit4	円形	径8	10.7			
	Pit5	楕円形	20×26	10.7			
	Pit6	楕円形	40×59	18.1			2段Pit
	Pit7	楕円形	44×48	10.2			
	Pit8	楕円形	33×36	23.8			
	Pit9	楕円形	19×27	16.7			
	Pit10	楕円形	20×28	15.7			2段Pit
	Pit11	楕円形	12×15	12.9			
	Pit12	楕円形	14×19	34.8			
	Pit13	楕円形	15×20	27.5			
	Pit14	楕円形	32×71	12.3			
	Pit15	楕円形	21×26	10.8			
	Pit16	円形	径12	6.1			
	Pit17	楕円形	35×58	26.9			
	Pit18	円形	径14	12.0			
	Pit19	円形	径18	7.7			
	Pit20	楕円形	31×45	14.3			
	Pit21	楕円形	13×22	10.7			
	Pit22	楕円形	19×25	32.2			
	Pit23	円形	径20	15.4			
	Pit24	楕円形	42×53	19.3	土師器片		
	Pit25	楕円形	24×41	68.2	土師器片		
	Pit26	楕円形	13×19	15.6			
	Pit27	円形	径11	12.4			
	Pit28	円形	径10	20.0			
	Pit29	楕円形	10×12	15.1			
	Pit30	楕円形	14×17	22.0			
	Pit31	楕円形	30×33	6.0			
	Pit32	楕円形	12×17	17.1			
	Pit33	楕円形	55×64	8.8			2段Pit
	Pit34	楕円形	34×44	13.0	土師器片		
	Pit35	楕円形	21×29	32.7	土師器片		
	Pit36	楕円形	41×43	9.4			
	Pit37	楕円形	20×25	14.6	土師器片		
	Pit38	楕円形	29×30	7.8			
	Pit39	不整形	33×56	9.7	土師器片		
	Pit40	楕円形	47×55	17.0	土師器片		SK2に切れる
	Pit41	楕円形か	37×不明	47.8	土師器片		
	Pit42	楕円形	46×79	45.1			
土壙	SK1	不整形	54×110	42.0	土師器片		2基のPitが切り合つたもの
	SK2	不整形	112×不明	30.5	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器片		SK1に切られる
	SK3	楕円形か	105×不明	13.7	土師器片		

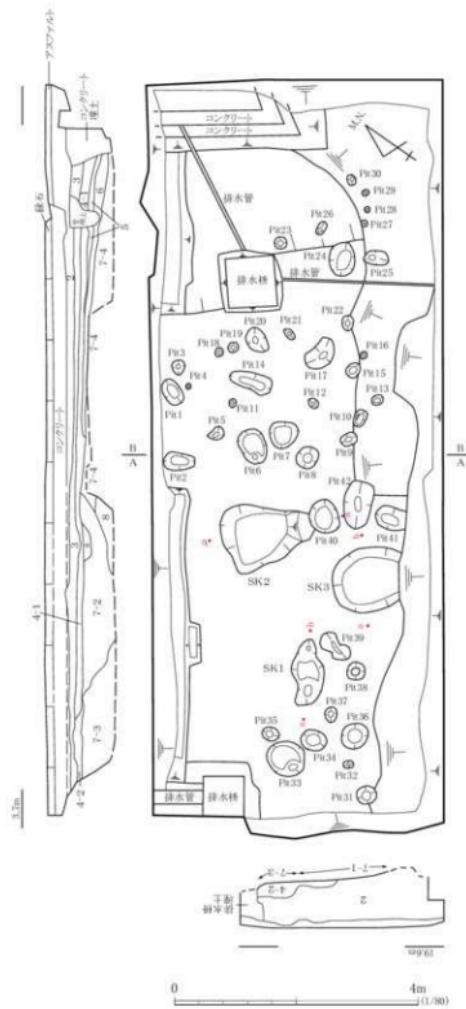
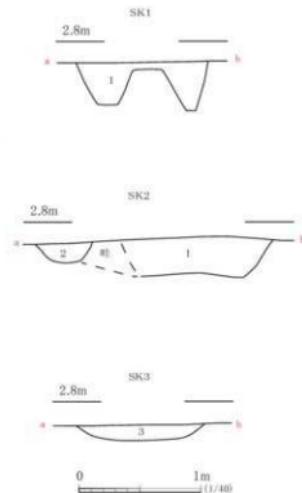


図67 A・B調査区平面図・断面図

- 1 表土
- 2 造成土 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粗砂 互層を含む
- 3 地黄褐色 (2,5Y7/2) 粗砂
- 4-1 墓灰黄色 (5Y4/3) 粗砂 0.5~3cm大の縦を含む
- 4-2 墓オリーブ色 (5Y4/4) 粗砂 0.5~2cm大の縦を含む
- 5 オリーブ黄色 (5Y6/4) 粗砂
- 6 黒褐色 (2,5Y3/2) 粗砂
- 7-1 黄褐色 (10Y6/6) 粗砂
- 7-2 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粗砂・細砂の互層
- 7-3 黑褐色 (2,5Y3/2) 分明 黄褐色 (2,5Y7/6)
- 7-4 黄褐色 (10Y6/6) 粗砂 7-1と同一層か
- 8 黑褐色 (2,5Y3/2) 縦 1~3cm大の縦主体
- 9 造構埋土か 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粗砂 1~3cm大縦を多く含む



- 1 黒褐色 (2,5Y3/1) 粗砂。堆灰黄色 (2,5Y4/2) 粗砂のブロック砂 0.5~3cm大の縦を含む
- 2 墓灰黄色 (2,5Y4/2) 粗砂
- 3 墓灰色 (10Y6/1) 縦 1~3cm大の縦主体

図68 S K 1 ~ 3 土層断面図

器片が出土したが、いずれも小片であり、時期を特定することは困難である。

#### c. 遺物(図69、写真145)

遺構から、繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器片が出土している。このほか、造構検出時に繩文土

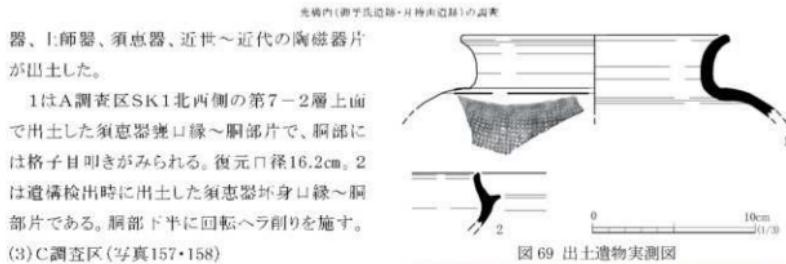


図 69 出土遺物実測図



写真 145 出土遺物

(3) C調査区(写真157・158)  
C調査区はスロープ設置箇所である。全体を現地表下約60cm、さらに北東壁沿いでは約140cmまで掘削を行ったが、造成土・近代以降の堆積層を確認するにとどまった。

(4) D調査区(写真159)  
D調査区は排水管新設箇所である。現地表下53cmの褐色(10YR4/4)粗砂上面から掘り込まれたピット2基を断面で確認したが、遺物は出土しなかった。

#### (5) 小結

今回の調査の結果、A・B・D調査区で遺構面を確認した。注目されるのは構内中心部で最も海岸寄りで遺構が検出されたことである。このうち、A・B調査区で検出された遺構の時期については出土遺物が僅少であるため定かではないが、確実に古代以降に位置づけられる土器が出土していない点や遺構検出時に須恵器が出土していることから、附属小学校校舎周辺・運動場で確認された古墳時代後期の遺構面に対応する可能性が高い。遺構の性格等については不明な点が多いが、附属中学校体育館周辺で検出されている遺物包含層との関連も注目されよう。また、B調査区北部以北は遺構面が侵食作用によって削平されていたとみられる。B調査区の約20m北側に位置するC調査区北部では、現地表下約140cmまで掘削を行ったにも関わらず、遺構面及び遺物包含層を検出することができなかった。以上、今回の調査により、御手洗遺跡の状況を知る上で重要なデータを得ることができた。

#### 【註】

- 1) 横木幸夫(1966)「Ⅱ 光市における先原史時代の遺跡」、横木幸夫(編)『先原史時代の光市』、光(山口)
- 横山成己(2005)「付録 光市文化センター所蔵の御手洗跡出土遺物」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度－』、山口
- 2) 横山成己(2005)「第1水第6席 教育学部附属光小学校コレベーター昇降路新設に伴う試掘・立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度－』、山口
- 3) 河村吉行(1992)「第3章 光市内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、山口

表10 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物 番号	遺構 層位	器種	部位	法量(cm)		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
				①口径	②底径			
1	第7-2層 上面 須恵器 検出時	須恵器 壺	口縁～ 肩部	①(16.2)		①②灰白色(7.5Y4/1)	精良	
2		須恵器 环身	口縁～ 脛部			①②にぶい黄色(2.5Y6/2)	精良	



光鏡内(測量点道路・井戸周辺)の調査



写真152 A調査区SK 2・Pit 40土層断面（北東から）



写真153 A調査区SK 3土層断面（南東から）



写真154 B調査区遺構状況（南東から）



写真155 B調査区完掘状況（南東から）



写真156 B調査区Pit 25半截状況（北東から）



写真157 C調査区全景（北東から）



写真158 C調査区北東壁土層断面（南西から）



写真159 D調査区土層断面（南西から）

## 2. 教育学部附属光中学校校舎改修工事(プレハブ建設)に伴う立会調査



図70 調査区位置図



写真160 調査区全景（南東から）



写真161 A 地点断面（北東から）

3) 楠本幸夫(1966)「日光市における先原史時代の遺跡」、楠本幸夫(編)『先原史時代の日光市』、光(山口)

横山成己(2005)「付篇 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報一平成15年度一』

調査地区 光構内

調査面積 約245m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年6月18日

調査担当 田畠直彦

調査結果 前項で報告した教委学部附属光中学校改修工事に伴い、附属中学校テニスコートにおいて仮設校舎の建設工事が決定した。調査区南西側においては、平成5年度に実施された附属光中学校武道場新築その他工事に伴う立会調査において、現地表下約30cmから遺物包含層と考えられる黒褐色砂が検出され、近世陶磁器の小片が出土している。このため、当該工事計画を担当する施設環境部と事前調整を行い、掘削深度が最大でも現地表下約20cmにおさまる工法で施工し、立会調査を実施することとなった。

工事では約10m×47mの範囲内の建物基礎部について、現地表下約10~20cmまで掘削が行われたが、表土(マサ土)<sup>①</sup>の範囲であり、底面で旧表土<sup>②</sup>と考えられる黄褐色(2.5Y5/6)粗砂及び明黄褐色(2.5Y6/6)粗砂を検出するにとどまった。

テニスコートにおける地下の状況は不明であるが、武道場敷地では中世の柱穴等の遺構、附属中学校体育館敷地周辺では遺物包含層が検出されている状況から、遺構・遺物包含層が分布する可能性が極めて高く、今後とも埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

## 【註】

1) 古谷和之(1995)「第3章第3節 附属光中学校武道場新築その他の工事に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XIII』、山口

2) 古谷和之・田崎美佐(1994)「第3章 光構内教育学部附属中学校武道場新築工事に伴う発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XIII』、山口

## 第7節 その他構内の調査

### 1. 秋穂団地(ヨット艇庫)浄化槽改修工事に伴う確認調査

調査地区 山口市秋穂東706-2

調査面積 4.5m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年12月3日

調査担当 横山成己

調査結果 山口市秋穂に所在する本学ヨット部のヨット艇庫敷地において、浄化槽の改修工事が計画された。団地は草山崎と赤石鼻に挟まれた内湾中央部に位置し、ヨット庫は自然形成された浜堤上に立地しているように見受けられる(写真162)。団地周辺には、密とは言えないながらも周知の埋蔵文化財包蔵地が散在しており、特に北東背後に聳える丘陵には中道古墳群が存在している(図71)。団地に対しては、昭和59年(1983)に1度確認調査が実施されているが、埋蔵文化財は確認されなかった。今回の工事計画では、面積は4.5m<sup>2</sup>と狭小であるものの、掘削深度は2.5mに達するものであったため、再度確認立会調査を実施することとした。

調査時にはすでに掘削は完了していたが、安全確保のため掘削坑内に留まる時間を最短とするため、坑北壁のみに断面精査を実施した。調査の結果、現地表下1.5mと1.9mに黒色砂層を確認したが、断面に遺物は確認されなかった(写真163)。

秋穂地区海岸部においては、古墳時代以降製塩産業が断続的に行われていたことが指摘されている。秋穂団地に関しては、掘削を伴う工事計画が立案された場合には出来うる限りの確認調査を実施する必要があるだろう。

#### 【註】

- 1) 沢村吉行(1985)「ヨット部艇庫合宿研修所整備に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報IV』、山口



図 71 調査区位置図



## 付節1 平成21年度 山口大学構内遺跡調査要項

## 山口大学大学情報機構規則

改正 平成18年3月1日規則第27号

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人山口大学学則(平成16年規則第1号)第9条第2項の規定に基づき、国立大学法人山口大学(以下「本法人」という。)の大学情報及び情報基盤を総合的に整備する山口大学大学情報機構(以下「機構」という。)に關し必要な事項を定める。

(組織)

第2条 機構は、次の組織をもって組織する。

(1)図書館

(2)メディア基盤センター

(3)唯蔵文化財資料部

2 前項の組織に關し必要な事項は、別に定める。

(業務)

第3条 機構は、次の業務を行う。

(1)大学情報及び情報基盤の戦略的整備計画の策定に關すること。

(2)大学情報及び情報基盤の整備の施策及び実施に關すること。

(3)情報セキュリティの施策及び実施に關すること。

(4)その他機構が必要と認めた事項に關すること。

2 前項の業務を行うため、機構は、各学部、各研究科、全学教育研究施設及び事務組織と相互に連携を図るものとする。

(運営委員会)

第4条 機構に、機構の管理及び運営に關する事項を審議するため、山口大学大学情報機構運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(情報セキュリティ委員会)

第5条 機構に、情報セキュリティに關する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報セキュリティ委員会(以下「情報セキュリティ委員会」という。)を置く。

2 情報セキュリティ委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(情報基盤整備委員会)

第6条 機構に、情報基盤の整備に關する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報基盤整備委員会(以下「情報基盤整備委員会」という。)を置く。

2 情報基盤整備委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(機構長)

第7条 機構に機構長を置き、定期情報担当副学長を行つて充てる。

2 機構長は、機構の業務を統括する。

(副機構長)

第8条 機構に副機構長2名を置き、本法人の専任教員のうちから機構長が指名した者をもつて充てる。

2 副機構長は、機構長を補佐する。

3 副機構長の担当は、機構長が定める。

4 副機構長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、機構長である前学長の任期の終期を超えることはできない。

5 副機構長に次員が生じた場合の後任の副機構長の任期は、前任者の残任期間とする

(専任教員)

第9条 機構に、専任教員を置く。

2 専任教員の参考は、運営委員会の議に基づき、学長が行う。

3 専任教員の選考の参考に關し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第10条 機構に關する事務は、情報環境部学術情報課において処理する。

(規則)

第11条 この規則に定めるもののが、機構に關し必要な事項は、別に定める。

(附則)

この規則は、平成18年1月1日から施行する。

平成16年4月1日規則第148号  
**山口大学埋蔵文化財資料館規則**

平成16年4月1日規則第148号

改正 平成17年3月21日規則第52号

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学大学情報機関規則(平成16年規則第139号)第2条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」という。)の組織及び運営に關する事項を定める。

(目的)

第2条 資料館は、文化財保護法(昭和25年法律第214号)に基づき、国立大学法人山口大学(以下「本法人」という。)に所在する埋蔵文化財の発掘調査及び研究を行い、出土品を収集・公開することを目的とする。

(業務)

第3条 資料館は、次の業務を行う。

- (1)本法人内等から出した埋蔵文化財の収集・展示及び調査研究
- (2)本法人内等における埋蔵文化財の発掘調査及び報告書の刊行
- (3)その他埋蔵文化財に関する必要な業務

(職員)

第4条 資料館に、次の職員を置く。

(1)館長

(2)副館長

(3)資料館所属の専任大学教育職員

(4)その他必要な職員

2 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

3 特別調査員は、専門委員会の議に基づき、館長が委嘱する。

(部長)

第5条 部長は、大学情報機関長をもって充てる。

2 部長は、資料館の業務を掌理する。

(副館長)

第6条 副館長の選考は、国立大学法人山口大学の専任教師のうちから山口大学大学情報機関運営委員会の議に基づき、学長が行う。

2 副館長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、副館長に欠員が生じた場合の後任の副館長の任期は、前任者の残任期間とする。

3 副館長は、館長を補佐し、日常的な業務の執行及びこれに必要な意思決定に関し、館長を助けるものとする。

(事務)

第7条 資料館に関する事務は、情報環境部学術情報課において処理する。

(隸属)

第8条 この規則に定めるもののほか、資料館に關する事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

2 第5条第1項の規定にかかわらず、当分の間、館長は、大学情報機関運営委員会のうちから大学情報機関長が指名した者をもって充てる。

附 則

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

**山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会内規**

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学大学情報機関運営委員会(平成16年規則第140号)第8条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会(以下「専門委員会」という。)の組織及び運営に關する事項を定める。

(審議事項)

第2条 専門委員会は、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」という。)に關し、次の事項について審議する。

(1)管理及び運営に関する事項

(2)整備充実に關する事項

(3)予算に関する事項

(4)その他の資料館に關する事項

(組織)

第3条 専門委員会は、次の委員をもって組織する。

(1)構構長

(2)副構構長

(3)幹長

(4)副幹長

(5)資料館所属の専任大学教育職員

(6)考古学担当の同立大学法人山口大学専任の大学教育職員

(7)メディア基盤センター所属の専任大学教育職員のうち幹長が指名し

た者1名

(8)施設運営部長

(9)情報環境部長

(10)情報環境部学術情報課長	委員会に出席することができる。
(11)発展研究室に隣接のある部局の事務部の長	(部会等)
(任期)	第7条 専門委員会は、必要に応じて部会等を置くことができる。 2 部会等に置し必要な事項は、専門委員会が別に定める。
第4条 前条第7号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員が欠員が 生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。	(事務)
(委員長)	第8条 専門委員会の事務は、情報環境部学術情報課に託して処理する。
第5条 専門委員会に委員長を置き、館長をもって充てる。	(規則)
2 委員長は、専門委員会を指揮し、その議長となる。	第9条 この内規に定めるもののはか、専門委員会の運営に置し必要な事項は、専門委員会が定める
3 委員長に事務あるときは、副館長がその業務を代行する。	附 則
(委員以外の者の出席)	この規則は、平成18年1月1日から施行する。
第6条 専門委員会が必要と認めたときは、専門委員以外の者を専門	

## 平成21年度 山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会

委員	阿部 慶孝（大学情報機構長・理学部教授）
	小河原 加久治（大学情報機構副機構長・工学部教授）
委員長	糸長 雅弘（埋蔵文化財資料館長・大学情報機構副機構長・教育学部教授）
委員	中村 友博（副館長 人文学部教授） 村田 裕一（人文学部准教授）
	小柏香穂理（メディア基盤センター助教） 宮浦 術一（施設環境部長）
	牧村 正史（情報環境部長） 板谷 茂（情報環境部学術情報課長）
	田畠 直彦（埋蔵文化財資料館助教） 横山 成己（埋蔵文化財資料館助教）

## 付録2 山口大学構内の主な調査

表11 山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第I地区A・B区		L~N-15	1	30?	土壇・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当 小野忠郎 年報X I
	第II地区家畜病院新営		R-20~21 S-T-19~20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	#	#
	第II地区			3			弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	試掘	#
	第IV地区牛舎新営		S-T-10~11	4	300	弥生溝・土壇、古墳窓穴住居、中世柱跡、溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	#
	第IV地区			5				試掘	#
	第III地区杭松区 および陸上競技場	D-19~20 E-17~19~21 F-17~18	6	1,600	杭列、弥生窓穴住居	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	事前	#	
	第III地区南区	G-21~23 H-22	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	#	#	
	第III地区北区	H-20 I-19~21 J-20~21	8	1,400	窓穴住居、溝、土壇、柱穴		#	#	
	第III地区東南区	G-23 H-23~24 I-J-24 K-23~24 L-23	9		弥生窓穴住居	弥生土器	#	#	
	第III地区野球場			10	中世柱穴	瓦質土器	試掘	#	
昭和42年	第V地区学生食堂	J-20 N-14 P-18	11		弥生溝、古墳土壤	弥生土器、土師器	事前	#	
	第V地区			12	河川跡、柱穴、土壤	弥生土器、土師器	試掘	#	調査担当 山口大学吉田 遺跡調査会
	第I地区C区大学本部新営	K-L-14	13	600	窓穴住居、溝、土壤	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	#	
	第V地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	#	
	第I地区DIK第1地点	L-13	14		近世大廈	弥生土器、木灰層	#	#	
昭和46年	第I地区DIK第2地点	L-13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器、石鍋	#	#	
	第I地区DIK第3地点	M-13~14	16		土壤、柱穴	弥生土器、瓦質土器	#	#	
	第I地区DIK第4地点	M-N-14	17		土壤、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	#	#	
	第I地区DIK第5地点	L-12~13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	#	#	
	第I地区DIK第6地点	M-13	19		柱穴	弥生土器、土師器、石器	#	#	
	第I地区DIK第7地点	M-N-13	20			須恵器	#	#	
	第I地区E区第2学生食堂新営	M-N-14~15 O-15	21	900	古墳窓穴住居、土壤溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鐵製品	事前	#	年報X II
昭和50年	第II地区					弥生土器	試掘	#	
	第III地区				窓穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	#	#	
昭和51年	人文学部校舎新営	M-N-21	22	160			#	調査担当 近藤義一	年報X
	教育学部附属養護学校新営	A-20~21 B-19~20 C-19	23	410	溝、土壤	縄文土器、弥生土器	試掘	#	山口大学埋蔵 文化財資料館 山口市教育委員会
昭和54年	理学部校舎新営	N-O-19~20	24	250			#		年報X
	農学部動物学新営	P-19	25	380			#		
昭和55年	本部管理棟新営	L-14	26	740	溝、土壤、柱穴、中世井戸、土壤墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		年報X III
	経済学部校舎新営	K-21	27	66			試掘		
	農学部農業機械実験施設新営	P-Q-15	28	50	溝、土壤		事前		年報X
	本部環境整備	E-14~16 F-15~16	29				立会		

## 平成21年度(1)大学構内遺跡調査実績

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和55年	農学部環境整備	N-11 O-10・11 P-9・10	30				#		年報X
	教育学部校舎新設	H-19	31		弥生堅穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		
	教育学部音楽棟新設	H-16	32		溝		#		
	教育学部美術棟新設・技術科実験実習棟新設	J-K-19・20	33		旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	#		
	正門橋脚新設	I-11	34					立会	
	時計塔設置	I-14	35				#		
	本館構内擁壁取設	K-I-13・14	36				#		
	教育学部構内擁壁取設	I-15・17 J-17	37				#	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J-~M-15 M-N-16	38				#		
	農学部中庭整備	N-O-17	39				#		
昭和56年	暖房施設改修	O-16	40				#	工法等変更	年報Y
	学生部文化会車庫新設	M-8・9	41				#	工法等変更	
	学生部馬場整備	M-N-8・9	42				#		
	附属図書館増築	L-M-16	43	600	弥生～古墳、土壤、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		
	大学会館新設	M-N-14・15	44	130	弥生堅穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属養護学校プール新設	A-B-21	45	890				立会	
	放射性同位元素総合実験室	O-18	46	2			#		
	講水園同位元素総合実験室	講水園新宮	47	10			#		
	教養部自転車置場	L-17	48	150			#		
	教養部中庭環境整備	J-K-16					#		
昭和57年	大学会館新設	M-N-12・13	49	2,000	古墳井戸、土壤、柱穴、中世井戸、屋立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、縄文陶器、木簡、石器	事前		年報Z
	ラグビー場防球ネット新設	G-18・19 H-19・20	50	114	弥生層、弥生～古墳堅穴住居、土壤	弥生土器、土師器、石製品	#	堅穴住居は工法変更により現地保存	
	理学部大学院校舎新設	M-N-20	51	409				立会	
	正門・南門・二輪車置場	I-J-12・13 H-23	52	183			#		
	学生部アーチ型リモの台・電柱設置	N-8・9	53	33			#		
	学生部飯舎整備	M-7・8	54	1,6			#		
	学生部野球場散水栓取設	I-21 K-22	55	1				立会	
	教養部庭園整備	I-15・16 J-15 K-17・18 L-18	56	81			#		
	学生部テニスコート改修	C-18 D-17 E-15・16 F-16	57	12			#		
	大学会館ケーブル配設	N-12	58	160	弥生土器、柱穴	弥生土器	事前		
昭和58年	大学会館排水管布設	J-L-13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壤、古代～中世土壤、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	#		年報W
	学生部テニスコートフェンス改修	B-17 C-16・17 D-16 E-15	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K-19・21	61	8				立会	
	大学会館周辺整備	L-14・15 M-N-15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生堅穴住居、古代～近世土壤、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、土製品、石斧、原石、鐵器、雷擊	試掘		
昭和59年	経済学部環境整備(樹木移植)	K-L-20	63	5				立会	年報X'
	農学部附属農場肥料園	R-17～19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、輪口、石器、铁斧	#		
	排水溝復柵整備	V-15～17	65	325			#		
	農学部附属農場農具改修	I-J-19	66	430			#		
	教育学部前庭環境整備(樹木移植)	O-P-16	67	2,5		須恵器	#		
	中央ボイラー棟車止設置								

## 平成21年度(1)大学構内遺跡調査要旨

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和60年	大学会館環境整備(樹木移植)	M-15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、桃石、鉄滓	#		年報V
	交通標識設置	J-20 N-14 P-18	69	3			#		
	農学部解剖実習棟周辺環境整備 (実験動物運動場設置)	Q-18	70	16			#		
	理学部環境整備(緑帯設置)	N-21	71	4			#		
昭和61年	農学部附属畜病院舎装	S-T-19	72	270			#		年報VI
	国際交流会館新館	M-22・23 N-22	73	76	弥生～古墳河川跡 中世～近世墓	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鐵瓶玉、加工痕のある剝片	試掘		
	山口銀行現金自動支払機設置 (電線路埋設)	J-19	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S-20 T-U-19	75	165	中世墓、柱穴	土師器、瓦質土器	# 工法変更		
	農学部附属農場農道規制 (施設ボール設置)	M-10 P-15 Q-15～17	76	12			#		
	正門横(木田町)境界杭設置	J-10	77	0.25	包含層か		#		
	経済学部環境整備 (樹木移植・記念碑建立)	L-20	78	3			#		
	吉田構内交通標識設置	G-23 K-9 O-22 S-20 V-17	79	3		須恵器	立会		
昭和61年	市道神郷1号線および 開田神郷線の送水管設設	B-17・18 C-18・19 D-19・20 E-20・21 F-21・22 G-22・23 H-23・24 I-J-K-24 L-23・24 M-N-23 O-22・23 P-Q-22 R-21・22 S-21 T-20・21 U-19・20 V-18・19 W-X-18	80	2,100	古墳・弥生講、 古代河川跡、 弥生包含層	弥生土器、土師器、 須恵器 (墨書きのもの含む) 瓦質土器、製塙土器、 石斧、板石	立会	山口市教育 委員会 山口大学埋蔵 文化財資料館	年報VI
	教養部自動洗車機設置 (屋根設置および複数台移動)	K-L-18	81	3.5			#		
	教養部身体障害者用 スロープ設置	L-15・16	81	3			#		
	経済学部散水鏡設置	L-20	83	4			#		
	吉田構内木氷プール 改修等	E-15 F-15・16 H-15	84	26.5	包含層		#		
	農学部附属農場 木道管理設	S-12	85	3			#		
	吉田構内汚水排水管等 整修改	M-18 O-15	86	15.5		土師質土器	#		
	本部身体障害者用スロープ 設置	L-14	87	12			#		
	経済学部身体障害者用 スロープ設置	K-18～20 L-18	88	78			# 工法等変更		
	閉風園書館荷物運搬用 スロープ設置	L-16	89	8		弥生土器	#		
昭和62年	教養部IT番教室改修	K-16	90	1			#		年報VII
	教育学部附属教育実践 研究指導センター新設	J-K-18・19	91	240		ブランク、削器、 植物遺体	事前		
	教養部複合棟新館	J-K-17	92	35	埋甕上墻、礎、柱穴	土師器、須恵器、 土師質土器、石斧	試掘		
	教養部複合棟新館	I-J-16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		

## 平成21年度(山形)大学構内遺跡調査実績

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和62年	教養部複合棟新営	J・K-17・18	94	900	郭六穴、河川跡、 堅柱状基壇、土壙、溝、 井戸、堆積土礫、 孤立柱脚物跡、 瓦状造構、柱穴	織文土器、土師器、 須恵器、土師質土器、 須恵質土器、 陶磁器、石器、石斧、 木製品	事前		年報Ⅲ
	九田川局部改修	B-16・17 C-16	95	20			立会		
	国際交流会館新営	M-N-22・23	96	195			#		
	教育学部附属養護学校 自転車置場設置	B-20	97	1			#		
	農学部附属農場G7園場 排水管渠設置及び E6園場進入路幅	L-N-12	98	55	中世土壤層か	弥生土器、土師器、 須恵器、輸入白磁、 国産磁器、磁石	#		
	農学部植栽	N-17	99	3			#		
昭和63年	経済学部集水樹設置	J-20	100	0.5			#		年報Ⅳ
	教養部複合棟新営に伴う 自転車置場設置	I-16	101	1	包含層か		立会		
	国際交流会館新営に伴う 排水管渠設置	N-O-22	102	35	河川跡(溝か)、 包含層	弥生土器、須恵器	#		
	教養部複合棟新営に伴う ケーブル埋設	J-18	103	1			#		
	サッカーラグビー場改修	F-19・21 G-18	104	25	性格不明	弥生土器	#		
	消防用水設置	K-M-22	105	7.5			#		
平成元年	木銀灯新営	J-L-15	106	4	古墳状造構柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器、六連式製塗土器	事前		年報Ⅴ
	樺野寮ボイラー設備改修	O-20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新営	H-22 I-21・22 J-K-21	108	7	包含層	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器	#		
	防火水槽配管布設	K-21・22	109	15	柱穴		#		
	吉田寮ボイラー設備改修	M-8	110	4			#		
	体育施設系給水管改修	G-H-16	111	50		陶器	# 工法等変更		
平成2年	大学会館前記念植樹	M-13	112	6			#		年報Ⅵ
	吉田寮ボイラー棟 地下貯油槽設備改修	M-8	113	45	包含層	土師器、須恵器、 土師質土器、陶器、 剝片、 二次加工のある剥片	#		
	第2武道場排水溝新営	G-15	114	2	溝		#		
	案内標識設置	I-14 I-18	115	0.5			#		
	本部庫給水管改修	L-13	116	6.5		弥生土器	#		
	大学会館前庭環境整備	N-14・15	117	35	中世溝		#		
平成2年	大学会館前庭環境整備	M-15	118	2			#		年報Ⅶ
	第1学生食生活設備改修	I-J-19	119	7			#		
平成3年	教育学部附属養護学校案内板設置	E-20	120	1			#		年報Ⅷ
	農学部連合宿医学科棟新営	O-P-17	121	76	織文河川	織文土器、石器	試掘		
	農学部仮設プレハブ倉庫設置	P-17	122	6		須恵器	立会		
	農学部微生物実験室 その他機械設備改修	P-17	123	8			#		
	大学会館前記念植樹	L-M-15	124	2			#		
	サークル棟新営	F-14	125	1			#		
平成4年	農学部連合宿医学科棟新営	O-P-17	126	980	織文河川	織文土器、石器	事前		年報Ⅸ
	交通規制標識及びバリアー設置	H-22 M-10 O-22 R-19 S-20	127				立会		
	吉田寮内道路 (南門ロータリー)改設	H-23	128	40			#		
	ボイラー蓄給水管漏水補修	O-16	129	4			#		
	農学部附属農場ガラス室新営	S-14	130	3.5			#		
	大学会館前記念植樹	L-M-15	131	3			#		
平成5年	東町平川駅緊急地方道路整備工事 及び山口大学吉田団地 環境整備(正面周辺)	E-11・12	132				#		年報Ⅹ
	東町平川駅緊急地方道路整備 (信号機設置)	I-11	133	7			#		
平成5年	本部裏給水管設置	K-M-13	134	70	溝、柱穴	弥生土器、土師器、 滑石製模造品	事前		年報Ⅺ
	人文学部・理学部講義棟新営	M-20	135	4			試掘		

## 平成21年度(1)大学構内遺跡調査要旨

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成5年	第2号内運動場新宮	G・H-16	136	144	漢	弥生土器、須恵器、 砾石	#		年報XIII
	農学部給水管理設	N～P-18	137	9			#		
	基礎整備 (屋外施設水管改修)	L-15 M-17・18	138	16			立会		
	農学部連合歯医学科棟新宮	O-16	139	4			#		
	大学会館前庭アーチー設置	N-14	140	1			#		
	大学会館前庭記念植樹	L-15	141	1.6			#		
	九田川河川局部改良	C-16 D-15・16	142	40			#		
	農学部電柱立替	V-17	143	0.2			#		
	農学部ガラス室設置	S-14	144	10			#		
	教育学部給水管理設	H-19	145	15			#		
	環境整備(大学会館前庭)	L-14 M-13～15 N-14・15	146	140.9			#		
	H-20	I-19～21 J-20・21	147	361			#		
	環境整備(遺跡保存地区)	G-13 H-12	148	350			#		
	グランド屋外照明施設新設	E-20 F-21 G-18・22 H-19・20 I-21	149	600	調文河川、弥生住居、 漢、土坑、弥生～ 古墳河川、近世漢	縄文土器、弥生土器、 土師器、ガラス小玉、 砾石、磨石、鐵石	事前 工法等変更		
	第2号内運動場新宮	G-I-15・16	150	726	弥生～古代漢、 貯蔵穴、土坑、 近世漢、土坑	弥生土器、土師器、 須恵器、砾石、磨石、 鐵石、片岩、須恵器、 瓦質土器、 土師質土器、陶器、 磁器、瓦、下駄	#		
平成6年	グランド屋外照明施設配線埋設	F-21 G-20・21 H-19・20	151	200	調文河川、弥生住居、 漢、土坑、弥生～ 古墳河川、近世漢	縄文土器、弥生土器、 土師器、ガラス小玉、 砾石、磨石、鐵石	# 工法等変更		年報XIV
	経済学部商品資料館新宮	K-1・21	152	87.5	河川	陶器、磁器	試掘		
	実験施設処理施設新宮	H-12・13	153	2	河川		#		
	体育器具庫及び便所新設	G・H-17	154	60	河川		# 工法等変更		
	経済学部商品資料館 仮設電柱設置	L-22 M-22・23	155	5			立会		
	人文学部前駐車場整備	K-23 L-22・23	156	6			#		
	教育学部附属養護学校 生活指導施設新設	F-19	157	2			#		
	テニスコート改修	B-17 C-16・18 D-15～17 E-15・16	158	15			#		
	教育学部附属養護学校 生活訓練施設新設	B-20～22 C-20	159	16			#		
	壁上競技場整備(透水管埋設)	C-18 D-18・19	160	200			#		
	ハンドボール場改修(プレハブ設置)	K-22	161	30			#		
	野球場フェンス改修	H-22 I-21・22	162	3			立会		
	基礎環境整備 (ボイラー室配電盤設置)	O-16	163	4	河川か		#		
	九田川河川局部改良	D-15 E-14・15	164	100			#		
	第2号内運動場電柱設置	G-14・15	165	0.5			#		
	教養部水道管破裂修理	I-16	166	2			#		
	グランド屋外照明施設配線埋設	E-20 F-20～21 G-18・19・22 H-19・20 I-20・21	167	150			#		
平成7年	公共下水道接続 (教育学部附属養護学校 プール排水設置)	A-21	168	4			#		年報XIV
	サークル棧橋給水管設置	F-14	169	1			#		
	プール新設給水管理設	E-15 F-15・16	170	10			#		
	公共下水道接続 (汚水管雨水排水設置)	C-18	171	6	河川	土師器	#		
	教育学部ロープ設置(音楽棟)	H-17	172	10			#		

## 平成21年度(令) 大学構内遺跡調査実施報告

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成 7年	農学部附属農場研究施設新宮	Q・R-17	173	75	近世溝	磁器	試掘		
	農学部附属農場研究施設新宮	Q・R-17	174	520	中世井戸、近世溝	石斧、須恵器、磁器、瓦器	事前		
	公共下水道接続	C-18 E-16 G-14	175	70	溝、土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、土師器	試掘		
	公共下水道接続	C・D-18 D・E-17 E・F-16	176	240	土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、石器、骨角器	事前		
	農学部附属農場牛舎新宮	T-10	177	22			試掘		
	施設宿舎改修	N・O-22	178	25.5	河川		試掘		
	第2学生食堂増築	N・O-15	179	48	柱穴、包含層	石器	試掘		
	第2階内連絡廊外周照明施設新設	G-15・16	180				立会		
	機器分析センター新設工事用電柱仮設	O-19～21 P-22	181				〃		
	農学部附属家畜病院ハリカー新設	S-20	182				〃		
	吉田寮可燃ゴミ置場新設	N-10	183				〃		
	農学部附属農場研究施設電気・情報ケーブル及びガス・給排水管布設	Q・R-17	184				〃		
	情報処理センター新設	O-19	185				〃		
	基幹環境整備(ATMネットワークケーブル布設)	F-19・20 F-18・19 G-18	186				〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-15・16 J-20 K-19 M-10・11 N-12 O-16～18・20 P-18・19 Q-17・18	187				〃		
	基幹環境整備(施設宿舎・国際交流会館排水管布設)	M-23 O-22	188	22.5	河川		試掘		年報 XVI
	基幹環境整備(外灯新設)	H-I-21・22	189	306	河川	織文土器、弥生土器、土師器、石器	試掘		
	農学部附属農場排水管布設	S-10・11	190	93	包含層、ビット	土師器、須恵器	試掘		
	地上・壁面鉄構造取扱	G-18	191	5.5	包含層		立会		
	農学部附属農場排水渠改良	R-11	192	2.2			〃		
平成 8年	種野寮ハリカー新設	O-20・21	193	7			〃		
	サッカーフィールド水管取替	H-19・20 I-19	194	12	包含層		〃		年報 XVI
	基幹環境整備(共通教育センター新設)	J-K-17	195	14.3	河川	織文土器、須恵器	〃		
	九田川河川局部改良	E-14	196	18			〃		
	農学部附属農場道路舗装	K-12・13 L-12 M-11	197	27.6	近世用水路、溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器	〃		
	本部裏排水管取替	K-14	198	2			〃		
	農学部附属農場家畜病院整備会議開設	S-T-19	199	1			〃		
	農学部附属農場堆肥合倉新設	S-10	200	41.5			試掘		
	農学部ハイ才環境制御施設新宮	Q-15・16	201	140	河川、溝	土師器、須恵器、製塙土器、石器	試掘		
	カープミラー新設	M-11 N-21	202	0.8			立会		
平成 9年	基幹環境整備(外灯新設)	J-K-21 K-L-22 L-23	203	23.5	包含層		〃		年報 XVII
	共通教育棟エレベーター新設	K-16	204	42			〃		
	九田川河川局部改良	E-14	205	48			〃		
	本部2号館西側ハリカー新設	L-13	206	0.5			〃		
	教育学部附属農場学校時代挖削設置	D-21	207	1.4	包含層	土師器	〃		
	基幹環境整備(教育学部附属農場学校排水管取替)	C-D-21	208	17	河川		〃		
	基幹環境整備(施設屋表土すきり)	O-16	209	40			〃		
平成 10年	第2学生食堂増築及び改修	N-O-15	210	730	雁立柱建物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器、鉄製品	事前		
	教育部附属養護学校給食室改修	C-21	211	9	織文河川、土坑、柱穴	織文土器、弥生土器	試掘		
	九田川河川局部改良	E-F-14 F-13	212				立会		

## 平成21年度(川口)大学構内遺跡調査実施報告

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成10年	基幹環境整備(アリカー新設)	H-15 I-J-20 O-16-18	213				#		
	農学部動物用棧却鉢改修	Q-18	214				#		
	基幹環境整備(外灯新設)	L-17-19 M-N-18	215				#		
	理学部スクープ新設	M-18	216				#		
平成11年	ステンレス回転モニメント新設	M-13	217				#		
	第2学生食堂増築その他に伴う 屋外電力配路施設整備	O-14-16	218	包含解、柱穴、河川	土師器、須恵器	#			
	九田川河川局部改良	F-G-13 G-H-12	219				#		
	第2学生食堂北西擁壁新設	N-14	220				#		
	アリカーバシネット防球ネット新設	G-H-22	221				#		
	第1体育館・共通教育本館 スロープ新設	H-15 K-16	222				#		
	I-12 K-L-18	223					#		
	基幹環境整備(外灯新設)	L-15 M-N-17					#		
	総合研究棟新設	Q-18 R-17-19	224	250	河川	土師器、須恵器	試掘		
	総合研究棟新設	Q-R-18-19	225	830	河川、土坑	織文土器、土師器、 須恵器、製塙土器、 瓦質土器、石器	事前		
平成12年	販売及び周辺施設改修	M-8	226				立会		
	O-15 P-15-16 Q-14-15*	227			包含解		#		
	架空電線取り外し埋設	18-19 R-13-14 R-5-9 S-14							
	九田川河川局部改良	H-I-12 I-10-11 J-9-10 K-L-9	228				#		
	山口合同ガスガバナー室新設 及びガス配管布設	O-P-22	229				#		
	基幹環境整備 (アリカー新設)	N-22 M-10 V-17	230				#		
	あずまや新設	L-18	231				#		
	共通教育センター空調設備 新設	J-16	232				#		
	基幹環境整備(外灯新設)	J-K-21 M-10	233				#		
平成13年	経済学部校舎改修 (プレハブ校舎新設)	K-21	234	40	河川	織文土器	試掘		
	九田川河川局部改良 (平成12年度工事追加分)	L-8-9	235		河川		立会		
	総合研究棟新設屋外配管布設	Q-18	236				#		
	M-18-19 M-N-20 N-19	237					#		
	九田川河川局部改良	L-8-9	238				#		
	J-14-15 J-15 K-L-M-15 N-16 Q-T-V-17	239			河川		#		
	理学部校舎改修2期工事ポンプ室 配管布設	M-19	240				#		
	理学部校舎改修2期工事 自転車置場新設	N-20	241				#		
	第1学生食堂イレ改修	I-J-19	242				#		
	経済学部校舎改修(プレハブ 校舎新設配管布設)	L-21	243				#		
平成14年	農学部校舎改修(解剖実習棟 プレハブ校舎新設)	R-S-19	244	520	孤立柱建物、柱穴、 土坑、包含層、河川	土師器、須恵器 (墨書き土器)、 製塙土器、縄袖陶器、 瓦、輪印、銅鏡、石器	事前		
	農学部附属農場実験圃整地	O-14	245				立会		
	農学部校舎改修	N-Q-17-18	246			織文土器	#		
	理学部改修3期工事(薬品庫揭示板) 自転車置場新設	N-O-19 M-19-20	247				#		

## 平成21年度(1)大学構内遺跡調査報告書

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成14年	東アジア研究科 グレハブ校舎新設	N-21	248				"		
	農学部校舎改修(解剖実習棟 グレハブ校舎新設)	R-S-19	249		河川、包含層		"		
	教育学部トイレ改修	I-18	250				"		
平成15年	農学部附属農場ガス管漏洩修理	O-P-16 Q-15	251	12	河川		立会		
	教育学部附属農場排水管給食調理員専用トイレスペース新設	C-21	252	1.7			"		
	農学部鹿廻原湖実験棟南側温室	P-Q-15	253	52			"		
平成15年	理学部中庭通路植樹新設	N-19	254	5.8			"		
	理学部中庭アプローチ新設	N-20	255	6.8			"		
	基幹環境整備(外灯)	F-16, H-14 G-13~15+18 I-16~19 J-19, L-12 Q-15	256	11.5	河川		"		
平成17年	教育総合研究センター改修Ⅰ期	J-K-16	257	130	ビット、河川	弥生土器、土師器	予備		
	教育総合研究センター改修Ⅰ期	I-J-K-16 H-12, E-20	258	580	ビット、河川	弥生土器、土師器 須恵器	立会		
	日本・カナダ学会 水土里地の断面調査	R-16	259	3.1	河川		"		
平成17年	基幹環境整備(外灯)取設	H-17~22, 23	260	7.7			"		
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K-L-16, K-17 J-16~17	261	92	ビット、溝、河川	弥生土器、土師器 石器	予備		
	農学部附属畜産病院改修Ⅰ期	S-20	262	36	包含層、谷	土師器、須恵器 製塙土器	予備		
平成18年	農学部附属畜産病院改修Ⅰ期	S-20	263	225	雁立柱建物跡、溝、土壤	土師器、須恵器 縄袖陶器、木製品(柱根)	本		
	農学部附属畜産病院改修Ⅰ期	S-20	264	19	包含層		立会		
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K-L-16	265	84	ビット、河川、杭列	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器	本		
平成18年	教育総合研究センター改修Ⅱ期	J-K-L-16 I-J-K-L-17	266	480	ビット、河川、溝	弥生土器、土師器 打製石斧、柱根	立会		
	資料館(東亞經濟研究所)新営	L-20~21	267	100	土壤、落ち込み、河川		予備		
	プレハブ倉庫移設	J-16	268	29			立会		
平成19年	第一学生食堂改修	J-20	269	75			"		
	国泰館前広場環境整備	L-17~18	270	55			"		
	プレハブ校舎新設	F-14~15, G-15	271	400			"		
平成19年	人文学部外用電源敷設	M-20	272	6			"		
	テニスコートフェンス改修	B-C-17, C-18	273	10	河川、包含層		"		
	農学部附属動物医療センター改修Ⅱ期	T-20	274	48	土壤、ビット	土師器、須恵器 瓦質土器	本		
平成19年	駐車場整備工事	J-21	275	10			立会		
	資料館(東亞經濟研究所)新営	L-20~21	276	550			"		
	第一事務局改修	L-15	277	5			"		
平成20年	吉田寮前配水管敷設	M-11	278	11			"		
	農学部附属農場内電源敷設	Q-S-15, S-18	279	0.5	ビット	須恵器	"		
	経済学部研究棟改修工事	L-M-19	280	260	河川、落ち込み		予備		
平成20年	新教育研究棟新設	M-N-11~12	281	473	谷、ビット、溝	弥生土器、土師器 須恵器、瓦質土器 青磁	"		
	新教育研究棟設備開通工事	L-12~14 M-12~13	282	313	ビット、溝、土壤	土師器、須恵器 縄袖陶器、白磁、青磁 因縄陶器、砥石	本		
	新教育研究棟新設	M-N-11~12	283	1,333	雁立柱建物、ビット 溝、土壤、井戸、谷	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器、青磁 縄袖陶器、瓦質土器 木製品	"		
平成21年	農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期	T-19 S-20	284	250	雁立柱建物、ビット 溝、谷	弥生土器、土師器 須恵器、製塙土器 青磁、瓦質土器 木製品	"		
	国際交流会館田舎改修工事	N-O-22 N-23	285	457	河川		立会		
	サッカーグラウンド防球ネット取設	H-21~22 F-21	286	8.5	河川、ビット		"		
平成21年	正門改修等工事	L-13 M-12~13	287	174	ビット、溝、落ち込み	土師器、須恵器 瓦質土器、陶器、磁器	"		
	教育実践センター耐震化取設	K-19	288	2	土壤	縄文土器	"		
平成21年	東アジア研究棟・経済学研究科新営	K-21	289	117	溝、河川	弥生土器、土師器 須恵器、木製品	予備		年報7

## 平成21年度(平成21) 大学構内道路調査要領

調査 年度	調査名	構内地図別	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	構構	造物	調査 区分	備考	文献
	野球場防球ネット取設置	H-23 F-24 K-24	290	40	ビット、漆、包含層	弥生土器、鐵石	A		
	教育学部A棟改修	H-17 J-18 E-20	291	35.3	剝離層	縞文土器	A		
	望山整備工事	Q-10 O-P-Q-11	292	36			A		
	教育研究棟新宮	L-13-14 W-11-12 N-13	293	73	ビット、漆、包含層	弥生土器、石器上貝、牛頭、猪形石	A		
	ビオレーブ周辺雨水配水管取設	L-M-10-11	294	60			B		
	御設高圧引込工事	H-12	295	11			C		
	ため池整備工事	S-8	296	1.00			A		
	東新整備(鉄管改修)	J-14-15	297	1.56	包含層		A		
	事務局外竹音源	J-14	298	1			A		
	第1事務局外食事処(車両カーポート設置)	L-14	299	1.2	ビット		A		
	基幹・環境整備 (第1体育館周辺排水整備)	H-13	300	300			A		
平成 21年	男子学生寮新側丘陵害復旧	N-8 O-8-9	301	700			A		
	人文学部外行設置	N-21	302	10			A		
	人文学部西側アプローチ改修	M-20	303	750			A		
	教育学部研究実験棟A棟改修空気設備	K-18	304	40	包含層、岡川		B		
	理学部ソーラー熱灯設置	O-20	305	0.3			B		
	農学部インターネット接続	P-17	306	8.3			C		
	農学部附属動物医療センター改修屋面	S-19-20	307	154	包含層、暗渠	土師器、須恵器	A		
		Q-15-16 R-15 S-15 T-15 U-15 V-15	308	96	包含層、岡川	土師器、須恵器	A		
	農学部植物工場新築	P-15	309	98	包含層	土師器、須恵器	B		
	男子学生寮新宮	M-10-11	310	1350			C		
	ラグビー場排水整備	E-20 F-21	311	58.6			A		
	アーチソーラー整備工事	N-7-8 O-7-8	312	750			B		
	デニストロード改修	C-17 D-16- 17	313	18.3			A		
	共通教育講義棟改修	L-17	314	11.6			A		
	石庭実習場整備その他	N-O-P-8 Q-9	315	29			A		

年報  
7

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備		1	60	古墳堅穴住居、溝状造構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報Ⅳ
昭和60年	教育学部附属山口小学校 排水管改修		2	1			立会		年報V
昭和60年	教育学部附属山口中学校 球技場一帯整備		3	2			#		
昭和60年	教育学部附属幼稚園 運動整備(樹木植樹)		4	1			#		
昭和61年	教育学部附属山口小学校	幼稚園・ 小学校部分	5	57	中世土壤か	繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器。	試掘		年報VI
	污水排水管布設	中学校部分		20	河川跡か杭列	陶磁器、不明鉄製品、石器、剝片、植物遺体			
昭和61年	教育学部附属山口小学校 電柱移設		6				立会		年報VI
昭和62年	教育学部附属幼稚園 遊戯室整備		7	40			#		年報VII
昭和63年	教育学部附属山口中学校 屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剝片	#		年報VIII
平成元年	教育学部附属幼稚園・ 山口小学校污水排水管布設		9	260	弥生～古墳堅穴住居、 土塁、講、柱穴、 河川跡	繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質陶器、黑色土器、器、二次加工のある剝片、使用痕のある剝片、剝片、石核、砾石	事前		年報IX
	教育学部附属幼稚園 パーコート支柱設置		10	0.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・ 山口小学校污水管布設		11	170	弥生溝状造構	弥生土器、土師器、打製石斧、削器、剝片、石核	#		
平成2年	教育学部附属山口中学校 污水排水管布設		12	70	溝状造構	繩文土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、不明鉄製品、石器、砾石、扁平打製石斧、砾石、剝片	事前		年報X
			13	130		弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、国产陶磁器、扁平打製石斧、砾石	立会		
平成6年	教育学部附属山口小学校 ゴール新設給水管設置		14	3			#		年報XIV
	教育学部附属山口中学校 ゴール新設給水管設置		15	7			#		
平成7年	教育学部附属山口中学校 自転車置場新設		16				#		
平成10年	教育学部附属山口小学校 給食室改修		17				試掘		
平成12年	教育学部附属山口中学校 防寒室新設		18				立会		
平成14年	教育学部附属山口中学校 給食設備改修		19				#		
	教育学部附属幼稚園運動場整備		20		河川、柱穴	土師器	#		
平成15年	教育学部附属山口幼稚園庭新設 山口小学校スロープ新設		21	27.7			立会		年報I
	白石地区市道歩道改修		22	1	河川		立会		
平成16年	教育学部附属山口小学校事務室新築		23	101	河川、土壤または灌		#		年報2
	教育学部附属山口小学校改修		24	11			#		
平成17年	教育学部附属山口小学校幼稚園・小学校 給水管改修		25	10			立会		年報3
平成19年	教育学部附属山口中学校校舎等改修		26	121	河川、落ち込み、ビット	繩文土器、弥生土器	予備		年報5
	教育学部附属山口中学校校舎等改修		27	38	河川、包含層		立会		
平成21年	教育学部附属山口小学校公用棟、 教室B棟間渡り廊下屋根取設		28	2.5			#		年報7

## 平成21年度(平成21) 大学構内遺跡調査要旨

調査 年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
平成 21年	教育学部附属幼稚園園内中庭池 改修整備		29	50	落ち込み		立会		年報 7
	教育学部附属山口中学校中庭敷地付		30	1.5			その他		

## 小串構内

調査年度	調査名	構内地図割	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部書齋増築		2	4			立会		
	医学部体育館新営		3	1			"		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	44	近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報Ⅳ
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	"		
	医学部基幹整備 (特高受電設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
昭和60年	医学部臨床講義棟 病理解剖棟新営		7	38			"		年報V
	医学部附属病院 外来診療棟新営		8	390		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	"		
	医学部基礎研究棟新営		9	10		近世陶器	"		
昭和61年	医学部看護宿舎改修		10	25.5		近世陶磁器	立会		年報VI
	医学部看護宿舎改修		11	20			"		
	医学部附属病院 櫻木整備(桜木移植)		12	40			"		
昭和61年	医学部附属病院 外来診療棟新営		13	5			"		年報VI
	医学部附属病院 外来診療棟周辺 整理整備等(桜木埋設)		14	18			"		
	医学部附属病院東駅車場改修		15	6			"		
昭和62年	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、鐵石刃核	試掘		年報VII
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある削片、使用痕のある削片、 削片、礫石、磯、原石、土師器、土師質土器、 瓦質土器、陶磁器	立会		年報VIII
	医学部附属病院運動場整備		18	220			"		
平成元年	医学部附属病院MRB棟新営		19	45		削器、細石刃、 二次加工のある削片、 削片、石核	試掘		年報IX
平成3年	医学部臨床実験施設新営電気工事		21	0.5			立会		年報X
平成4年	施却棟地盤調査		22				"		年報XI
平成5年	医学部臨床実験施設新営その他 (焼却棟新営)		23	9			"		年報XII
平成6年	医学部附属病院CT装置新営		24	6			"		年報XIII
平成7年	医学部附属病院 看護宿舎新営		25	300			"		年報XIV
平成8年	医学部附属病院 看護宿舎新営		26	40			試掘		
平成8年	医療技術短期大学部 屋外排水管布設		27	6			立会		年報XV
平成9年	医学部歴史講・納骨堂新営		28	15.2			試掘		年報XVI
平成9年	基礎環境整備 (看護宿舎含む)改修 (看護宿舎含む)		29	4			立会		
平成10年	医学部別棟移設		30	10			"		
平成10年	宇都市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		31	134	包含層、近世～ 近代用水路	削片、弥生土器、 土師器、陶器、磁器	事前	宇都市教育委員会と 共同調査	
平成10年	宇都市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線・医学部 敷地西側特殊道路)		32	379	包含層、近世～近代溝	削片、圓文土器、 弥生土器、土師器、 陶器、磁器	"	宇都市教育委員会と 共同調査	
平成11年	宇都市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		33	792	近世～近代用水路、 土坑	陶器、磁器、鐵製品	"	宇都市教育委員会と 共同調査	
平成13年	医学部附属病院立体駐車場新営		34	229	包含層	圓文土器、弥生土器、 土師器、 陶器、磁器	試掘		
平成14年	医学部附属病院高ニネルギー 棟新営		35	13.25			"		
平成15年	総合研究棟新営		36	382	包含層	圓文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器	"		
平成15年	基幹環境整備(連突)新営		37	76			試掘		年報I

## 平成21年度(1)大学構内遺跡調査要旨

調査 年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
平成 16年	医学部基幹環境整備 (地下オイルタンク他)		38	144		陶文土器、土師器、 陶器、磁器、石器	試掘		年報 2
	医学部職員宿舎他公共下水接続		39	400		弥生土器、土師器、 瓦質土器、陶器、磁器	#		
	医学部総合研究棟北側 連絡用渡り廊下取設		40	40.6			立会		
平成 17年	医学部附属病院基幹環境整備 (冷熱源設備他改修)		41	37			#		年報 3
	医学部南側通用門解取設		42	30			#		
平成 18年	モニタメント設置		43	6.2			#		年報 4
平成 19年	医学部総合研究棟改修Ⅰ期		44	6.75			予備		年報 5
平成 20年	医学部総合研究棟改修Ⅱ期		45	9			#		年報 6
平成 21年	小串宿舎B棟埋設ガス管改修		46	58			立会		年報 7

## 常盤構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舍新宮		1	70		須恵器 試掘			年報Ⅲ
昭和59年	工学部図書館増築		2	70			#		
昭和60年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報Ⅳ
昭和61年	工学部尾山宿舎排水管取設等			65			#		年報Ⅴ
昭和61年	工学部受水槽改修		3	1.5			#		
昭和61年	工学部尾山宿舎排水管改修			6			#		
昭和61年	工学部身体障害者用スロープ取設 精養処理センター(常磐センター) 空調設備取設		4	29			#		年報VI
昭和62年	工学部後却炉上屋新宮		5	30			#		
平成元年	工学部夜間照明装置 及び防球ネット設置		6	225			#		年報VII
平成元年	工学部記念植樹		7	2			#		年報IX
平成2年	工学部ガス管改修		8	2.5			#		
平成3年	大学祭展示物設置		9	45			#		年報X
平成4年	工学部プレハブ研究・実験棟新宮		10	7			#		年報X I
平成4年	工学部・工業短期大学部の 改組再編・博士課程設置に伴う 建物移転等の新宮		11	6			試掘		
平成4年	工学部および工業短期大学部 職員宿舎取扱		12	40			#		年報X II
平成5年	大学祭展示物設置		13	9			立会		
平成5年	工学部プレハブ研究・実験棟新宮		14	7			#		
平成5年	工学部地域共同研究開発 センター新宮		15	12			試掘		年報X III
平成7年	工学部国際交流会館新宮		16	16			#		
平成8年	工学部国際交流会館新宮		17	8		石礫	#		
平成8年	工学部国際交流会館新宮		18	352	段状遺構	ナイフ形石器、剝片	事前		年報X VI
平成12年	工学部福利厚生棟新宮		19	38.5			試掘		
平成13年	工学部インキュベーション センター新宮		20	60			#		
平成14年	総合研究棟新宮		21	13.5			#		
平成15年	工学部本館改修		22	428			立会		年報I
平成16年	工学部定歪速度応力観測割れ 実験室新宮		23	20			試掘		年報2
平成17年	工学部光半導体素子実験室新宮		24	52.5			#		
平成18年	工学部雨水幹線工事		25	9			立会		年報3
平成19年	工学部職員宿舎揚水施設改修		26	65			#		年報4
平成19年	工学部会議室身障者スロープ/取設置		27	38			#		年報5
平成20年	総合研究棟改修工事 (Ⅱ期・本館北)		28	280			確認		年報6
平成21年	工学部総合研究棟改修(留萌・本館)		29	147			#		年報7
平成20年	工学部女子学生宿舍新宮その他		30	24			予備		
平成21年	工学部ガス管改修		31	12.5			確認		

## 光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校 自転車置場設置		1	6	近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報Ⅳ
昭和59年	教育学部附属光小・中学校 焼却炉新設		2				立会		年報Ⅴ
昭和60年	教育学部附属光中学校 外灯改修		3	1		土師器	〃		年報Ⅵ
昭和61年	教育学部附属光小学校創立 記念事業(フロンズ像建立)		4	2.5		土師器、須恵器	〃		年報Ⅶ
昭和62年	教育学部附属光中学校 グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、 瓦質土器、土師質土器、瓦	〃	御手洗清採集	年報Ⅷ
昭和63年	教育学部附属光小学校 遊具移設		6	10		土師器、土師質土器、 陶磁器	〃		年報Ⅸ
	教育学部附属光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、 須恵器、瓦器、 瓦質土器、陶磁器、 土鍋	〃	御手洗清採集	
平成2年	教育学部附属光小学校 運動場改修		8	15		縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 旅館陶器、磁器、 土鍋、剥片、範溝	試掘	御手洗清採集 遺物含む	年報X
	教育学部附属光小学校 運動場改修		9	23	土壤	土師器、須恵器、 須恵器模倣土師器	事前		
平成3年	教育学部附属光中学校 武道館新設		10	38	土壤、溝状遺構	土師器、磁器、陶器	試掘		年報X 1
	教育学部附属光小学校 屋外施設設置		11	18		土師器、石鍋	立会		
平成4年	教育学部附属光中学校 バックネット新設		12	0.5		土師器	〃		年報X 1
	教育学部附属光中学校 武道館新設		13	500	土壤、柱穴	縄文土器、須恵器、 土師器、瓦器	事前		
平成5年	教育学部附属光中学校 武道館新設その他		14				立会		年報X III
	教育医学部附属光小・中学校 トイレ新設給排水設備設置		15	6			〃		
平成6年	教育学部附属光小・中学校 トイレ新設給排水設備設置		16	19			〃		年報X IV
	教育学部附属光小・中学校 廻廊(外周フェンス・防球ネット)設置		17	7		陶磁器	〃		
平成10年	教育学部附属光小・中学校 給食室改修		18	6			〃		年報X VI
	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		19	132	古墳包含層、柱穴、 近世～近代土壤	土師器、須恵器、 韓式系土器、陶器、磁器	試掘 立会		
平成12年	教育学部附属光小・中学校 護岸石積改修		20		石垣	陶磁器	立会		年報X VII
	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		21				〃		
平成15年	教育学部附属光小学校エレベーター 昇降路等新設		22	169	ピット、土壤、溝	縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器、石器	試掘 立会		年報1
	教育学部附属光小学校 体育器具庫新設		23	53		土師器、須恵器	予備		
平成17年	教育学部附属光小・中学校護岸改修		24	40	石垣	陶磁器	立会		年報3
	教育学部附属光中学校校舎改修工事 に伴うプレハブ建設		25	107	ピット、土壤	須恵器	本		
平成21年	教育学部附属光中学校校舎改修工事 に伴うプレハブ建設		26	225			立会		年報7

## その他構内

調査年次	調査名	構内地区別	面積(m <sup>2</sup> )	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ボート競争合宿研修所整備	宇品市大字小野宇土井	0.5			立会		年報IV
	学生部ヨット競争合宿研修所整備	吉敷郡秋穂町東字中道				#		
昭和60年	熊野花街給排水機器取扱	山口市熊野町3-21	7			#		年報V
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉6丁目8-29	35	杭		#		
	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市町通り2丁目3-32 山口市水の上町6-9	1 7		土師質土器瓦	# #	6号宿舎 2号宿舎	年報VI
昭和63年	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市白石二丁目8-7	1		須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	#	7号宿舎採集	年報VII
平成元年	本部職員宿舎公共下水道切替	山口市水の上町6-1	1			#	1号宿舎	年報IX
平成2年	人文・理学部職員宿舎公共下水道切替	山口市石巻音町1-25	1.2		陶磁器	#	7号宿舎	年報X
	経済学部職員宿舎公共下水道切替	山口市香山町3-1	0.5			#	3号宿舎	
平成3年	湯田宿舎A棟給配水その他改修	山口市湯田温泉6丁目	30			#		
	経済学部6号職員宿舎遮蔽設置	山口市姐通り2丁目3-32	0.5			#		年報XI
	人文・理学部職員宿舎公共下水道切替	山口市天花932-2	1			#		
平成4年	上小路共同下水管布設	山口市上堅小路宇久保7-4	7			#		年報XII
平成6年	西田宿舎公共下水道接続及び排水施設改修	山口市湯田温泉6丁目8-29	44			#		年報XIV
平成15年	ホート部合宿所給排水整備	宇品市大字小野宇土井	80			確認		年報1
平成16年	湯田宿舎B棟自転車置場新設	山口市湯田温泉6丁目8-29	11			確認		年報2
平成17年	経済学部職員宿舎2号フーンス取替	山口市水の上町6-9	1			確認		年報3
	工学部職員宿舎(尾山)排水施設改修	宇品市上野半町1-33-34	15			確認		
平成21年	秋穂団地(ヨット艇庫)浄化槽改修	山口市秋穂東706-2	4.5			#		年報7

※文献① 山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)

※昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の関与した調査については、調査名をすべて把握しているわけではなく注意が必要である。

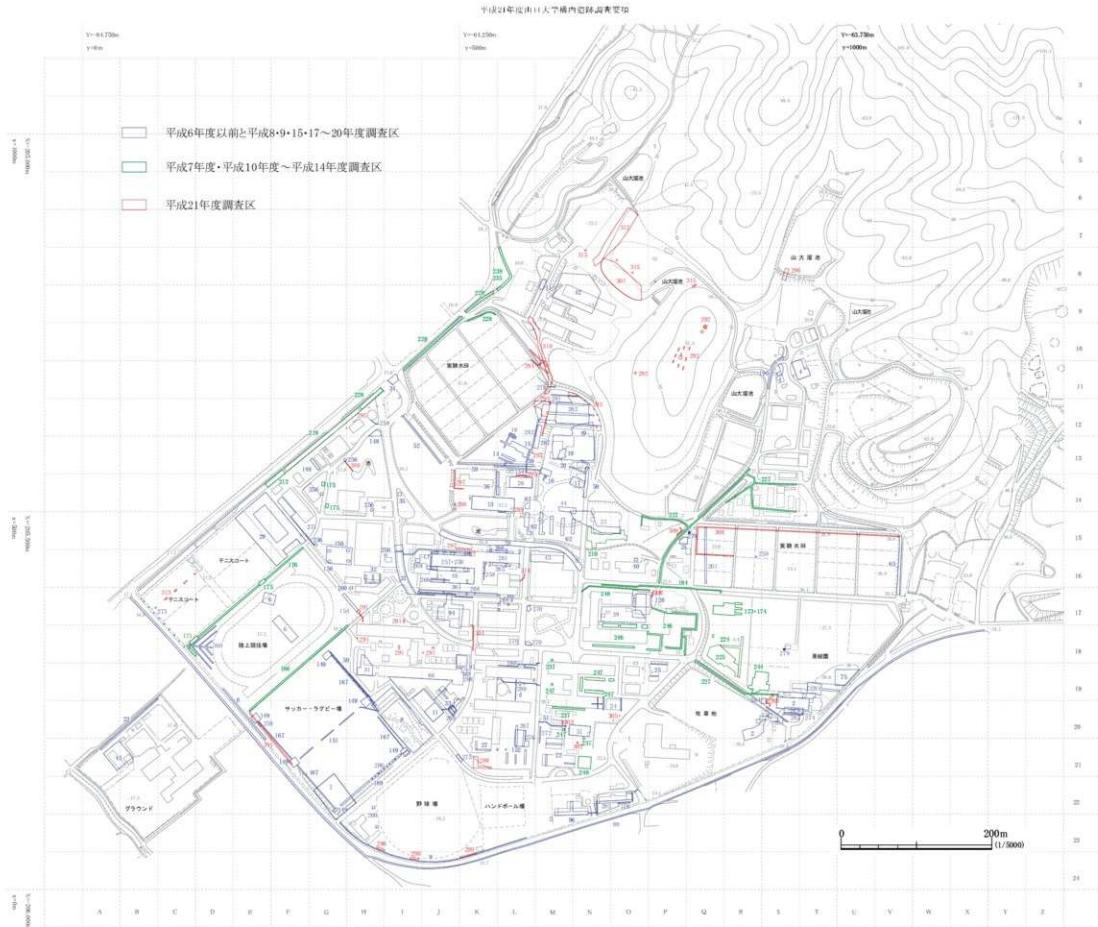


图72 山口大学吉田構内地区割および主な調査区位置図

平成21年度(山口)大学構内道路調査区位置図

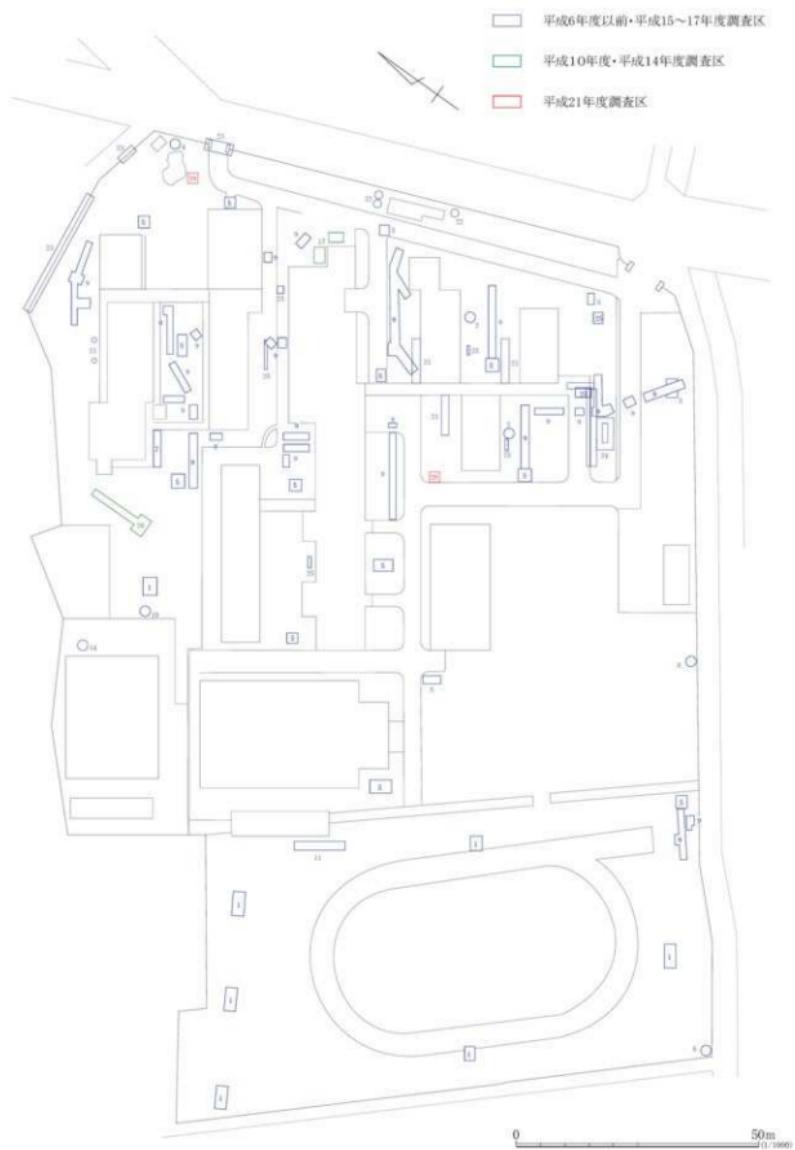


図 73 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

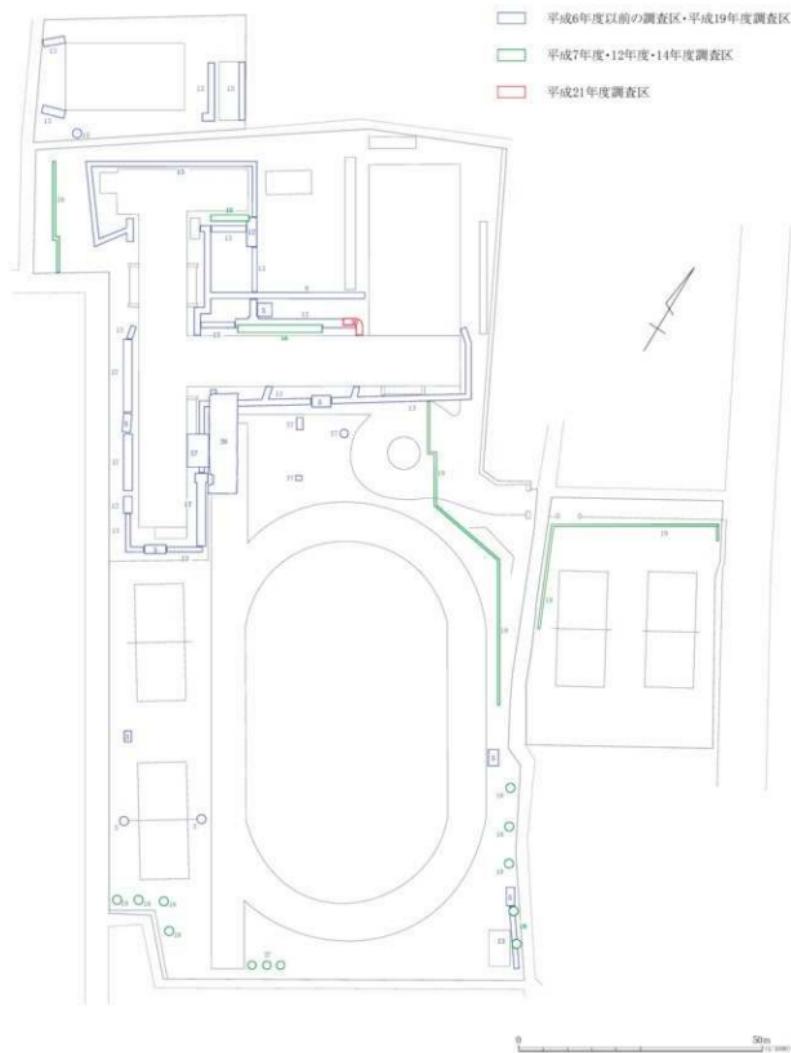


図74 山口大学白石構内（中学校）調査区位置図

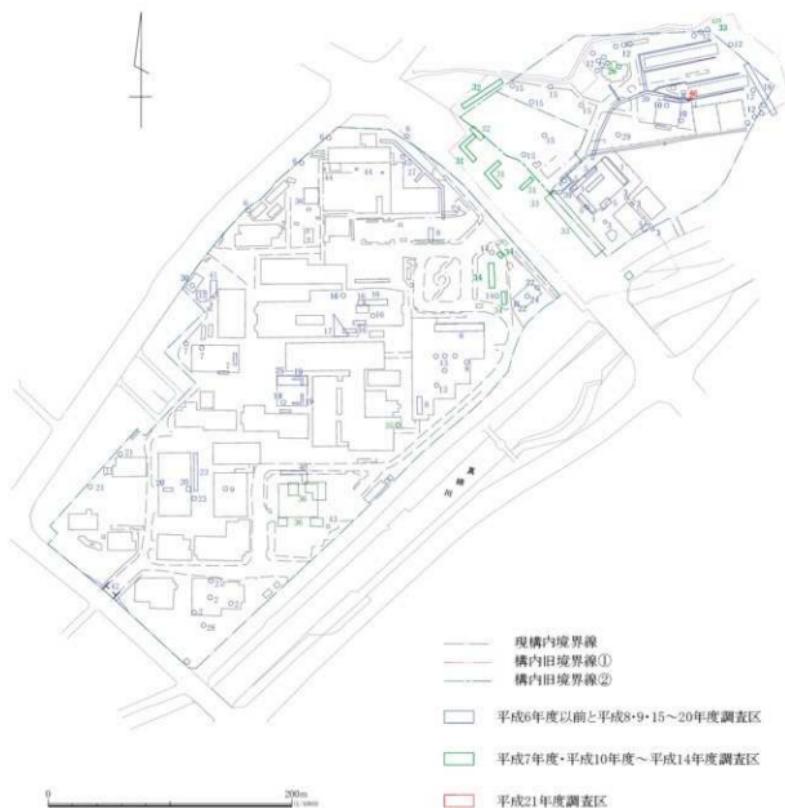


図75 山口大学小串構内調査区位置図

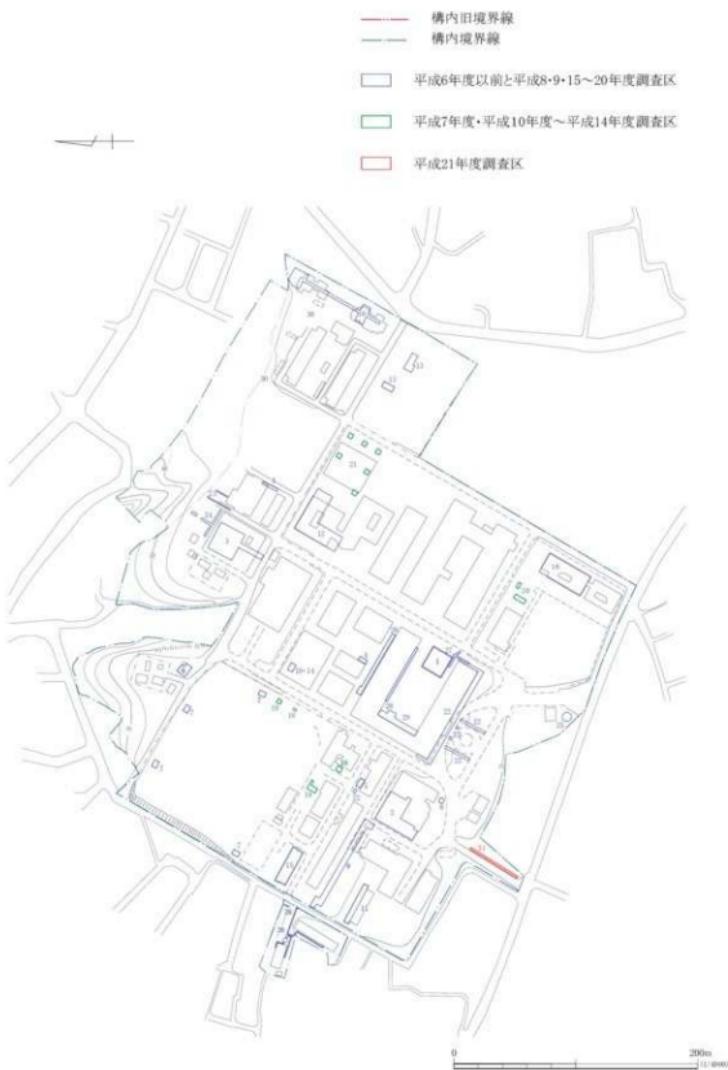


图76 山口大学常盤構内調査区位置図

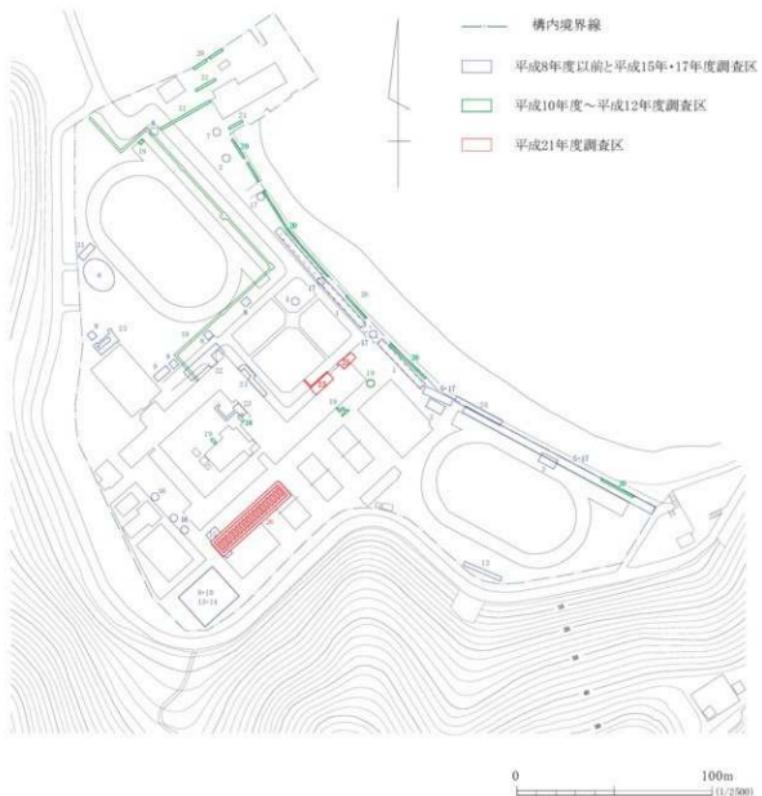


図 77 山口大学光構内調査区位置図

## 第2章 平成21年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する山口県内の各遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかる教育活動を行ってきた。より具体的に述べると、展示・公開活動としては当館展示室において年に3回程度の企画展示を行うこと、教育活動としては年に1回の市民対象の公開授業を開催すること、そして学内の希望者に対して考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。

平成21年度は、展示・公開活動として、企画展を2度開催した。また平成20年度より開始した、学内の他の学術分野との連携企画展として本学理学部地球図システム科学科との共催で鉱物・岩石標本展を開催した。資料館展示室以外での展示・イベント活動としては、総合図書館1階ロビーにて資料展示を、本学の祭祭である七夕祭・占田キャンパスと常盤キャンパスの大学祭において出張展示とワークショップを開催した。

社会教育活動に関しては、農学部附属農場との共催により第9回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう4－』を開催した。また、山口大学教育学部附属山口中学校の総合教育の一環として、中学生2名に対し職場体験学習の受け入れを行った。

当年度は、本学中期計画の最終年ということもあってか、地下の掘削を伴う開発工事計画が多発し、埋蔵文化財保護対応に追われた1年であった。その結果準備が十分に行えない状況での自転車操業の事業展開が繰り返されたが、その一方で当館展示室においては多くの観覧者を迎えることができ、総入館者数は展示活動開始以来初めて1,300人を超えることとなった(表12)。以下、平成21年度に実施した展示公開活動・社会教育の概要を報告する。

表12 埋蔵文化財資料館利用者の推移

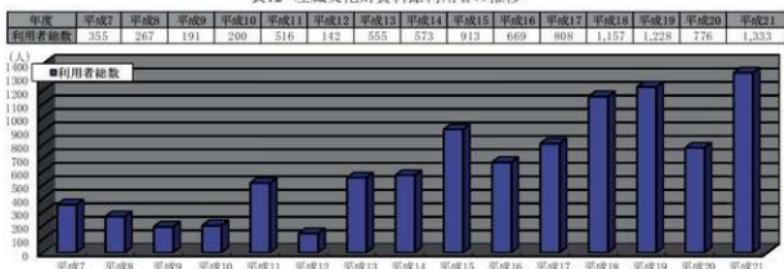
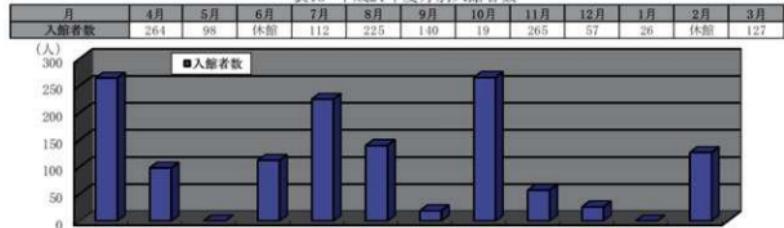


表13 平成21年度月別入館者数



## 第1節 資料館における展示公開活動

### 1. 第28回企画展『土の中からコンニチワ～山口大学発掘調査速報展2009～』を開催

当館では、数年に一度埋蔵文化財調査成果の速報展を企画展示として開催している。平成20年度に実施した構内遺跡発掘調査においては古代、中世の良好な考古資料が多数出土しており、また平成21年度前期に実施した調査においても、主として弥生時代に関する遺跡情報を多く獲得するに至ったことを受け、後期に開催する企画展示(開催期間:平成21年11月9日～平成22年1月29日)にて発掘調査速報展を開催することとなった。

展示では、①中世集落が発見された吉田構内新教育研究棟新営に伴う予備・本発掘調査成果(平成20年度実施)、②中世集落とともに古代の埋没谷が確認された吉田構内動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査成果(平成20年度実施)、③弥生時代の自然河川と古墳時代末期の自然流路が検出された吉田構内経済学部東アジア研究科・経済学研究科棟新営工事に伴う予備発掘調査成果(平成21年度実施)、吉田構内野球場防球ネット設置工事に伴う予備発掘調査成果(平成21年度実施)をそれぞれブースを設けて展示了。

調査成果の定まっていない時点での速報展示では、展示解説がその後の調査研究成果と齟齬を来る場合が多い。そのため文字による解説はできるだけ回避し、資料(遺物や写真、実測図)を数多く提示すると同時に未接合の土器群を展示することにより、観覧者が「速報性」を感じられるよう工夫を行った。

会期中348人の方々に入館いただいた。アンケート調査では「生々しさが素晴らしい」「ここごんな土器、実感がありました」「木製品が水没してしまっており驚いた」など、展示意図に対する様々な声が寄せられた。今後も埋蔵文化財調査組織ならではの展示を心がけたい。

#### 【注】

1) 平成5年度開催『発掘調査速報展』、平成11年度開催『山口大学構内遺跡発掘調査概報1999～古代の吉田のすがた・鷹文土器が語る小中～』、平成12年度開催『山口大学構内遺跡発掘調査概報2000～吉田遺跡・御手洗遺跡～』、平成14年度開催『山口大学発掘調査速報展2002』、平成18年度開催『吉田遺跡発掘調査速報展2006』

2) 田畑直彦・横山成己(2012)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』、山口大学埋蔵文化財資料館(編)、山口

3) 本書参照

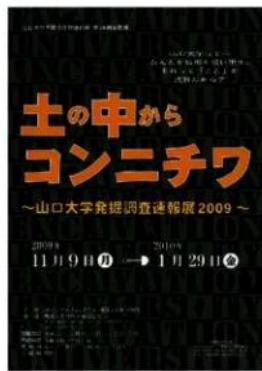


写真 164 第28回企画展ポスター



写真 165 展示の模様

## 2. 第29回企画展『大学発遺跡行き～やまぐち時空列車の旅～』を開催

埋蔵文化財資料館には、当館が実施した構内遺跡での発掘調査出土品の他、本学統合移転時の山口大学吉田遺跡調査団により調査された吉田遺跡出土品、そして主として本学名誉教授小野忠熙氏が発掘調査を担当した県内主要遺跡の出土品が収蔵されている。

第29回企画展は、山口商工会議所主催「やまぐちお宝展」への参加企画となることから、当館に収蔵される県内稀少考古資料を公開することとした（開催期間：平成22年3月3日～6月4日）。

公開を行ったのは、瀬待貝塚（下関市）、東之庄神田遺跡（光市）、吉田遺跡（山口市）、天王遺跡（周南市）、御屋敷山古墳（下松市）、美濃ヶ浜遺跡（山口市）、見島ジーコンボ古墳群（萩市）、多々良廃寺（防府市）、小周防相ヶ泊経塚（光市）の9遺跡出土資料である。

展示では各遺跡の概要とともに出土品の特徴などを解説したが、そのタイトル通り、展示観覧後に遺跡地へと足を運んでいただけるよう、詳細地図を掲示するなどの工夫を行った。

当企画展の総入館者数は593名を数え、3ヶ月単位での展示では過去最高の入館者数となった。また、アンケート回収率が高かったことも特徴であり、157名（26.5%）の方々に協力いただいた。アンケート内容を紹介すると、「訪れたことがある遺跡」の問い合わせ（無回答17）に対し、「吉野ヶ里遺跡」という回答が55名（50%）であり、「土井ヶ浜遺跡」が14名（12.7%）、「朝田墳墓群」が5名（4.5%）、「大内氏館跡」「綾羅木郷遺跡」「荒神谷遺跡」が3名（2.7%）と続いた。当館は吉田遺跡上に立地しており、遺跡博物館としての機能も備えるが、「吉田遺跡」と回答いただいたのは1名に過ぎなかった。これは「当館への入館歴」に対する問い合わせ（無回答2）の回答が「初めて」116名（74.8%）であることとも関連する問題であり、リピーターが増加する活動展開が必要と感じられた。一方で「1年間に博物館施設を訪れる回数」の問い合わせ（無回答3）に対し、「0回」「1回」の回答が80名（51.9%）に上っており、「博物館離れ」が進行していることも問題視すべきであろう。

最後に、「山口大学にある“これはスゴイ！と思う物”という問い合わせ（無回答15）に対し、「埋蔵文化財資料館」「遺跡の上に大学があること」「遺跡保存公園」などと回答いただいた方は41名（28.9%）であった。質問者に対する心温まる配慮に感謝するとともに、「スゴイ！」を感じる気持ちを研究に誇る大学施設となるべく、展示公開活動を继续・发展させる所存である。



写真 166 第29回企画展ポスター

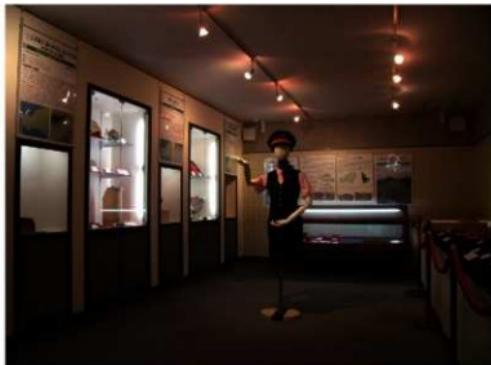


写真 167 展示の模様

### 3. 学内連携企画展『鉱物・岩石 七変化 -Beauty and Wonder in Mineral World-』を開催

当館は設立以降一貫して埋蔵文化財・考古資料を用いた展示を実施してきたが、山口大学において「誰でも」「いつでも」「気軽に」利用できる「学内唯一の展示施設」としての機能を有していることを鑑み、平成20年度より学内連携企画展を開催することとした。平成20年度は本学教育学部美術教育教室の学生有志と連携し、美術展示『INSTALL -インストール- A・I・A アート・イン・アルケオロジー』を開催した。2回目となる平成21年度は、木学理学部地球環境システム科学科との連携により、標本展示『鉱物・岩石 七変化 -Beauty and Wonder in Mineral World-』を開催することとなった(開催期間: 平成21年7月6日～10月2日)。

展示資料の主体となったのは、本学理学部の加納隆教授が長年にわたり採集し研究を行ってきた鉱物・岩石標本である。<sup>15</sup>会期が夏期休暇期間と重複することもあり、地域の子どもが楽しく学習できるようにとの配慮から、展示は①『石ってなあに？－鉱物と岩石はどうちがうの？－』(鉱物と岩石の概要解説)、②『地中の虹－鉱物の色と形－』(赤やピンクの鉱物:ルビー・菱マンガン鉱・バラ輝石など)(黄色やオレンジの鉱物:硫黄・黄鉄鋼・黄銅鉱など)(青や緑、紫の鉱物:コランダム・ヒスイ・スパー石など)、③『地中の虹－岩石の色と形－』(様々な色の岩石:紅簾石片岩・チャート・アベンチュリンなど)(様々な形の岩石:球状岩・眼珠片麻岩・菊花石など)(オブジェのような岩石 南極の岩石:單斜輝石岩・コランダムスピニル岩・ザクロ片岩・麻岩など)の3部構成とした。

展示期間中の総入館者512名を数えた。特筆すべきは8月の入館者数が過去最高となり、200名を大きく越えたことである。これは例年無く中小学生的な団体見学が多かったことによるが、近年の状況を見ると、総合博物館において全国的に学校夏期休暇期間に自然史系・科学系の特別展を開催する館が増加しているように思われる。国民のニーズに対する博物館側からの回答であろうが、図らずもその実態を目の当たりにすると、歴史系博物館施設としては一抹の寂しさもあった。

歴史系資料展示では、常に「資料の小難しさ」が問題視してきた。考古資料は、歴史系資料の中でも比較的認証性に優れるため、その問題を軽視してきた傾向があるかに思う。大学施設としての存在意義を忘れてはならないが、キャンパス内が閑散とする夏期休暇期間中は子ども向けに「わかりやすい」「面白い」「きれい」「大きい」などをキーワードに展示を企画しても良いのではないかと感じた。



写真 168 学内連携企画展ポスター



写真 169 展示の模様

#### 4.『山口大学所蔵学術資料展』にて資料展・ワークショップを開催

大学情報機構主催、山口大学所蔵学術資料産業継承検討委員会共催により、大学情報機構3施設と人文学部、理学部が共同し、学生祭である姫山祭(7月4日)当日、吉田キャンパス総合図書館にて『山口大学所蔵学術資料展』を開催することとなった。各々の企画は以下の通りである。

図書館『山口大学の軌跡』

映画『学園』を放映。『学園』は、昭和32年(1957)から33年(1958)にかけ、山口大学映画製作委員会により自主作製された映画であり、当時の山口大学生の日常を描いたものである。

メディア基盤センター『異次元空間への誘いー脳がだまされる?トリックアートや3D映像ー』

パネルと電光掲示板を用い、様々な錯視画像を紹介。3D映像はビデオカメラなど身近な道具を用いて自作製作。メディア基盤センターの技術力も含め、観覧者に驚かれていた。

人文学部『栗屋家文書～よみがえる徳山藩のすがた～』

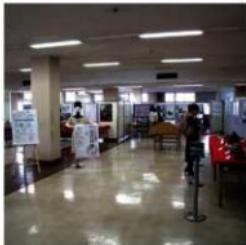
『栗屋家文書』とは、毛利就隆から毛利広庭にいたる歴代の徳山藩主が、江戸時代初期の慶長17年(1612)から後期の寛政9年(1797)までに代々家老をつとめた栗屋家に下した全75通の書状を集めたものである。現在4巻の巻子本として本学に所蔵されており、このうちの2巻を公開した。

理学部『南極の岩石～山口大学における南極地質調査～』

理学部地質科学教室の教員2名が南極観測隊に参加して収集した岩石を公開。岩石調査によってかつて存在したゴンドワナ大陸が証明されることが解説された。

埋蔵文化財資料館『つくろう!古代の装身具～勾玉身に着けクールビューティー』

大学移転前に古田の地で採取された碧玉製勾玉(山口市歴史民俗資料館所蔵)とともに、古田遺跡から発見された古墳時代資料を展示。先着30名に限り、滑石を素材とした勾玉づくりのワークショップを開催した。幼稚園児から本学生、老年者まで楽しく体験していた。



展示会場



埋蔵文化財資料館資料展示コーナー



勾玉づくりコーナー



勾玉完成!



メディア基盤センター展示コーナー



人文学部展示コーナー

写真 170 山口大学所蔵学術資料展の模様

## 5.『大学情報機構2009 in 常盤Fes.』にて資料展示・ワークショップを開催

11月14日(土)、常盤祭(山口大学工学部大学祭)にて大学情報機構主催イベントを開催した。当館は平成19年度より当イベントに参加しているが、平成21年度も機構3施設がそれぞれの特色を生かし、下記の企画を行った。

### 図書館企画展 山口大学の軌跡

山口大学創立前夜から現在までの大学史のパネル展。本学の歴史を「草創期」「拡充期」「大学紛争」「発展期」「拡張期」に分割し、写真入りで各期を解説すると同時に、図書館の沿革紹介も行っていた。また、歴代学長紹介のコーナーでは、3名の学長をピックアップし、大学運営の特徴を解説していた。メディア基盤センター『情報セキュリティビデオで学ぶネット社会を生き抜く力』

現在、インターネットを用いた様々な技術が開発されており、その利便性から多方面に活用されている一方で、ネットを用いた様々な犯罪も多発している状況にある。メディア基盤センターにより上映されたビデオでは、犯罪の種類やネット被害から逃れる方法が分かりやすく解説されていた。

### 埋蔵文化財資料館『謎のカタチ 勾玉づくりに挑戦!』

ワークショップでは、同年度七夕祭で好評であった勾玉づくりに再度取り組むこととし、同時に日本列島における「装飾品としての工の歴史」をパネル解説した。尖物展示では、勾玉づくりとは直接関係しないが、常盤キャンパスに近接する小串キャンパス(山口大学医学部構内遺跡)出土品を中心に土器資料の展示を行った。

ワークショップは先着30名までに限定した。開場と同時に次々に参加者が来場し、終了予定時刻前には30個の勾玉が完成した。参加者の多くは高校生と大学生であったが、少数ながら家族連れにも参加いただけた。軟質な滑石を用いた勾玉づくりと言えども、完成には30分～1時間費やす。集注しながら作業に取り組む多数の姿を見て、「手作業」の素晴らしさを実感した。

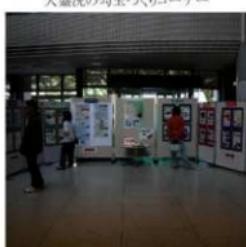


写真 171 大学情報機構 2009 in 常盤 Fes. の模様

## 6.『山口大学所蔵学術資料展』にて資料展・ワークショップを開催

七夕祭に続き、吉田キャンパス大学祭である祇山祭にて大学情報機構主催、山口大学学術資産継承検討委員会共催の特別展示『山口大学所蔵学術資料展 TREASURE 2009 in Himeyama Fes.』を図書館2階閲覧室にて開催した。各施設の企画は以下の通りである。

図書館『山口大学の軌跡へ創立60周年を迎えた山口大学の歩みを振り返る～』

山口大学の自作映像『学園』『若人の調べ』を上映するとともに、撮影風景や当時の新聞記事のパネル展示を行った。その他、昭和30年代の山口大学に関連する実物資料展示も実施した。

メディア基盤センター『物が立体に見える理由～3D映像の実現～』

立体映像をテーマとし、モノが立体に見える理由をパネル解説するとともに、メディア基盤センターの専門性を生かし、様々なハイテク機器を用いて画像・映像展示を行っていた。

埋蔵文化財資料館・人文学部考古学研究室

資料展示『弥生の王国へ山口県の「百餘國」を探る～』 ワークショップ『金印をつくってみよう』

人文学部考古学研究室との共催で、弥生時代をテーマとする展示を行った。展示品は、吉田キャンパスが所在する「吉山遺跡」との弥生時代資料と、人文学部考古学研究室が過去に発掘調査を行った下関市所在「伊倉遺跡」<sup>注1</sup>出土資料である。ワークショップでは、金印「漢委名国王」のレプリカを観察し、方形の滑石に文字を刻む体験学習を行った。

平成17年度より開始した大学情報機構主催の大学祭・祭典イベントは、現在のところ平成21年度をもって途絶えている。機構内に再開の動きはないが、館内ではワークショップの実施を検討している。

### 【註】

- 1)近藤島一ほか(1984)「下関市伊倉遺跡の発掘調査」、山口大学人文学部考古学研究室(編)『西部瀬戸内における弥生文化の研究』山口大学人文学部考古学研究室研究報告第3集、山口



埋蔵文化財資料館資料展示コーナー



季節から「謹賀新年」



いつの間にか看板に作品が



図書館展示コーナー



メディア基盤センター展示コーナー

写真 172 山口大学所蔵学術資料展の模様

## 7. 第10回～第11回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催

当館のサテライト展示として、平成17年度より吉田キャンパス総合図書館内にて平面展示ケース1台を借り出し、大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催している。平成21年度は、図書館1階第2閲覧室にて2回の特別展を開催した。

### 第10回大学情報機構埋蔵文化財特別展『ホンモノはどっち？』

当館では、資料館展示室にて「実物」を用いた埋蔵文化財資料展示を行っているが、諸々の事情により実物を用いることが不適当と考えられた場合には、複製品を作製し展示を行っている。今回の埋蔵文化財特別展では、実物と、その資料を基に複製したレプリカとを並べて配置し、「どちらがホンモノかを見分ける」というワークショップ的な取り組みを行った。同時に「ニセモノをつくる理由」をパネルにて解説した。展示は平成21年11月13日から平成22年2月29日までの期間で開催した。会場が図書館閲覧室であるため、見学者の反応は知るよしもないが、このような展示に触ることで楽しみながらじっくりと資料を観察する方々が増えれば望外の幸せである。

### 第11回大学情報機構埋蔵文化財特別展『コレはナニ？』

平成21年3月8日より、第11回大学情報機構埋蔵文化財特別展『コレはナニ？』を開催した。「コレ」とは美濃ヶ浜式製塙土器脚部片であるが、何の説明をするでもなく、ただ配置するだけの展示を行ってみた（写真174）。ただし、展示ポスターに「知りたい人は埋蔵文化財資料館に急げ！」という文言を入れ、当館展示室に入館すれば回答を得ることができるよう工夫した。

この特別展は同時期に開催した埋蔵文化財資料館第28回企画展『大学発遺跡行き～やまぐち時空列車の旅～』のスピンオフ展示と位置付け、図書館から埋蔵文化財資料館へ人の流れをつくる目的で開催したものである。期間途中、展示会場が図書館2階閲覧室へと移動となった際、さらに広報力を高めるため、メディア基盤センターの杉井学准教授の協力により、展示ケース内にライブカメラを設置し、当館ホームページから24時間展示の模様が観覧できるようにした。結果としてこの展示が埋蔵文化財資料館への入館にいかほど影響を及ぼしたか定かではないが、今後とも実験的な展示を行っていきたい。



写真 173 第10回大学情報機構埋蔵文化財特別展

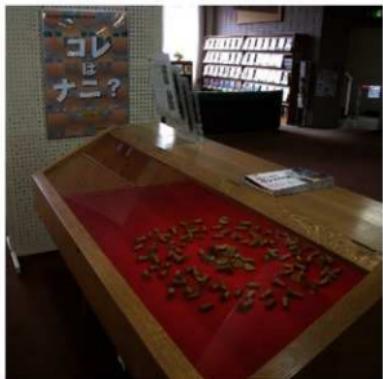


写真 174 第11回大学情報機構埋蔵文化財特別展

## 第2節 資料館における社会貢献活動

### 第9回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－4』を開催

#### はじめに

当館では、平成13年度より、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆さんに身近に感じていただくことを目的として、公開授業を開催している。

第9回となる平成21年度の公開授業は、昨年度に引き続き、日本のお米のルーツとされる赤米をつくり、土器で炊いて食べてみるという内容である。今回は、埋蔵文化財資料館と山口大学農学部との共催で、吉田構内の山口大学農学部実習農場で延べ3回に渡って行い、小学生1人、保護者・一般、教育学部学生など16名、総勢17名の皆様に参加していただいた。以下、授業内容を報告する。

#### 6月20日(土)一田植え

今年は種がカビにより全滅してしまったため、急遽「紅吉兆」という品種(もち米)に変更した。このため約1ヶ月遅れのスタートとなった。当日は農学部の長砂技術専門職員に代かきをしていただいた水田に山植えを行った。参加者は、足が予想以上に泥に埋まるため動きづらそうであったが、次第に慣れてくると泥の感触を楽しんでいるように見受けられた。

#### 10月10日(土)一収穫

昨年と比較して約3週間遅れとなつたが、秋晴れの晴天の中、無事に収穫を迎えることができた。最終的に稲は長さ約80～90cmにまで成長した。今回栽培した「紅吉兆」は品種改良されているため、昨年度まで栽培していた赤米と比較して、成熟具合に差がなく、高さがほぼ揃っていたのが印象的であった。収穫には模造した石庖丁、木包丁、貝庖丁と猪の牙などを使って穗摘みを行った。初めは穗摘みにとまどう参加者もいたが、すぐに慣れてきたようであった。その後残った稲を鎌で根刈りをして、はぜ架けを行つた。

#### 10月31日(土)一脱穀・粉すり、赤米を食べる－

秋晴れの晴天の中、公開授業最終日を迎えることができた。参加者は午前中に箸こぎ、臼と杵による粉すり、てみとザルによる選別とともに足踏み脱穀機による脱穀や店箕による選別を体験した。そして、いよいよ赤米の試食を迎えた。今回は栽培した赤米がもち米ということもあり、古墳時代の甑(こしき)と釜(かめ)を模造した土器を使用し、赤米を蒸すことに挑戦した。甑の底にスノコを敷いて赤米3合を入れ、水を入れた甕の上に甑を据えて薪で強火で焚いたところ、約1時間後に無事蒸し上がった。このほか、土器でも赤米を炊飯したが、蒸した赤米・炊飯した赤米、両者とも旨ごたえがあるものの大変美味しく甘みがあった。このほか、おかずにはアユの塩焼きや、豚汁、あさりのすまし汁をつくったが、これらも大変美味しい好評であった。

#### 公開授業を終えて

今回の公開授業について、参加者からは「口噴(でき)ない様々な貴重な体験ができ、とても満足できました」「体験を通して脱穀や粉すりはとても時間と根気のいる作業であることがわかった」「古代人のお米に対する想いに少しだけ触れることができた」などの声が寄せられた。参加者には米作りの歴史や大変さを実際の体験を通して学んでいただくことができ、公開授業の目的を達成することができたと感じている。今回は種がカビで全滅するという大きなアクシデントがあったが、盛況のうちに無事終了することができた。この場を借りて、館員一同心より御礼申し上げたい。



写真175 繩ない（6月20日）



写真176 苗の説明（6月20日）



写真177 苗の観察（6月20日）



写真178 田植え（6月20日）



写真179 稲の状況（9月7日）

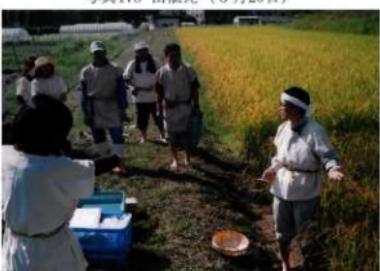


写真180 収穫具の説明（10月10日）



写真181 穂摘み（10月10日）



写真182 脱穀・粉砕の説明（10月10日）



写真183 脱穀・穂すり 1 (10月31日)



写真184 脱穀・穂すり 2 (10月31日)



写真185 穂すり後の風選 (10月31日)



写真186 穂すり後の選別 (10月31日)



写真187 足踏み脱穀機による脱穀 (10月31日)



写真188 壺と甌の使用状況 (10月31日)



写真189 ドングリクッキー (10月31日)



写真190 食事風景 (10月31日)

## 2. 中学生職場体験の受け入れ

平成20年度に続き、本学教育学部附属山口中学校生徒2名の職場体験の受け入れを行った。

1月26日(火)

午前：埋蔵文化財資料館業務の説明・出土資料(土器)の洗浄作業

午後：資料館展示室の機材搬出作業・出土資料(土器)の洗浄作業

1月27日(水)

午前：展示品(古墳時代製塙風景模型)の製作

午後：出土資料(土器)の注記作業

1月28日(木)

午前：出土資料(土器)の注記作業・出土資料(土器)の接合作業

午後：山口市朝田墳墓群第2次調査の見学・学習(山口市教育委員会の協力による)

2名とも事前に抱いていた「遺跡を発掘する仕事」のイメージと実際が異なると感じたようであるが、体験後「根気よく地道に仕事をすることの大切さが実感できた」との声が寄せられた。

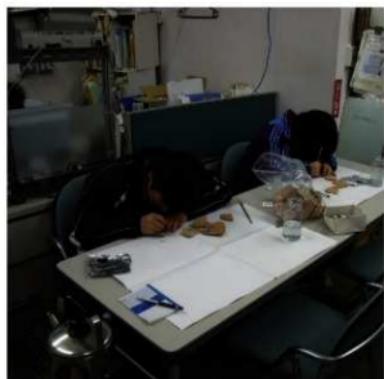


写真 191 中学生職場体験風景

## 付録1

## 山口県吉田遺跡出土植物遺体の同定調査報告

(株)吉田生物研究所

## 1.はじめに

山口県に所在する吉田遺跡で検出された遺構(平成20年度実施新教育研究棟新設工事に伴う本発掘調査SU1)の土壤試料7点から検出された植物遺体について同定調査を行ったので、結果を以下に報告する。

表14 分析試料一覧表

## 2. 調査した試料

試料は、SU1の1、2層より採取された7試料である。

## 3. 調査方法

試料を体表面鏡下で観察し、その形態から種の同定を試みた。その際、石川茂雄(1994年)、大井(1978年)、北村・村田(1979年)、中山・井之口・南谷(2000年)を参照した。

試料No.	遺構	層位
1	SU1	1層埋土
2		2層埋土
3		1層埋土
4		2層埋土
5		2層埋土
6		1層埋土
7		1層埋土

## 4. 結果

試料No.1からはカシ類、トチノキの木本類2種とタデ属、アブラナ科の草本類2種、その他に木片が検出された。

試料No.2からはツツラフジ科の蔓本類1種とその他に有機質が検出された。

試料No.3では樹皮が確認できる。

試料No.4からはカシ類の木本類1種とその他に冬芽が検出された。

試料No.5からはカシ類の木本類1種とその他に冬芽が検出された。

試料No.6からはカシ類、エゴノキ属、カラスザンショウ、イヌザンショウの木本類4種とタデ属の草本類1種、その他に冬芽、トゲ、樹皮片が検出された。また昆虫の外骨格が確認できる。

試料No.7からはカシ類、カラスザンショウ、イヌザンショウ、アカメガシワの木本類4種とタデ属の草本類1種、その他に冬芽、トゲ、木片が検出された。また魚類の椎骨が確認できる。

各種の写真を示し(背景は1mm方眼)、同定結果を表2に記す。学名は北村・村田(1979年)によった。

## [参考文献]

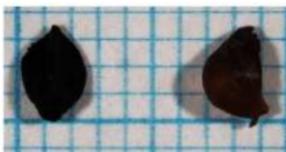
- 石川茂雄(1994年)『原色日本植物種子写真図鑑』、石川茂雄図鑑刊行委員会
- 大井次三郎(1978年)『改訂増補新版日本植物誌 順花編』、至文堂
- 北村四郎・村田 源(1964年)『原色日本植物図鑑 草本編』上、中、下保育社
- 北村四郎・村田 源(1979年)『原色日本植物図鑑 木本編』I、II 保育社
- 中山重大・井之口香秀・南谷忠志(2000年)『日本植物種子図鑑』、東北大出版会
- 牧野富太郎(1989年)『改訂増補牧野新日本植物図鑑』、北星館

表15 植物遺体同定結果

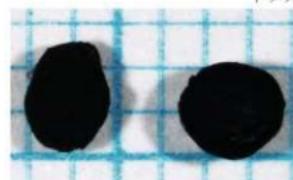
No.	遺構	層位	和名	科名	学名	種類	部位
1	1層埋土		カシ類	ブナ科	Fagaceae	木本	堅果
			トチノキ	トチノキ科	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	木本	種子
			タデ属	タデ科	<i>Polygonum</i> sp.	草本	瘦果
			アブラナ科	アブラナ科	Brassicaceae	草本	種子
			木片	—	—	—	—
2	2層埋土	ツヅラフジ科 有機質	ツヅラフジ科 —	ツヅラフジ科	<i>Metli</i>	蔓本	種子
3	1層埋土	樹皮	—	—	—	—	—
4	2層埋土	カシ類	ブナ科	Fagaceae	木本	堅果	
5	2層埋土	冬芽	—	—	—	—	—
		カシ類	ブナ科	Fagaceae	木本	堅果	
		堅果類	ブナ科	Fagaceae	木本	幼果	
		冬芽	—	—	—	—	—
		カシ類	ブナ科	Fagaceae	木本	堅果	
6	SUL	エゴノキ属	エゴノキ科	<i>Symplocos</i> sp.	木本	種子	
		カラスザンショウ	ミカン科	<i>Fagara allanthodes</i> Sieb. et Zucc.	木本	種子	
		イヌザンショウ	ミカン科	<i>Zanthoxylum schinifolium</i> Sieb. et Zucc.	木本	種子	
		タデ属	タデ科	<i>Polygonum</i> sp.	草本	瘦果	
		冬芽	—	—	—	—	—
		トゲ	—	—	—	—	—
		樹皮片	—	—	—	—	—
		葉	—	—	—	葉	
		外骨格	昆蟲	—	—	—	—
		カシ類	ブナ科	Fagaceae	木本	堅果	
7	1層埋土	カシ類	ブナ科	Fagaceae	木本	競斗	
		カラスザンショウ	ミカン科	<i>Fagara allanthodes</i> Sieb. et Zucc.	木本	種子	
		イヌザンショウ	ミカン科	<i>Zanthoxylum schinifolium</i> Sieb. et Zucc.	木本	種子	
		アカメガソワ	トウダイグサ科	<i>Malotus japonicus</i> Thunb.	木本	種子	
		タデ属	タデ科	<i>Polygonum</i> sp.	草本	瘦果	
		冬芽	—	—	—	—	—
		トゲ	—	—	—	—	—
		木片	—	—	—	—	—
		魚類の椎骨	—	—	—	—	—



1. 試料1 カシ類の堅果

2. 試料1  
トチノキの種子

3. 試料1 タデ属の瘦果



4. 試料1 アブラナ科の種子



5. 試料1 木片

写真192 試料1



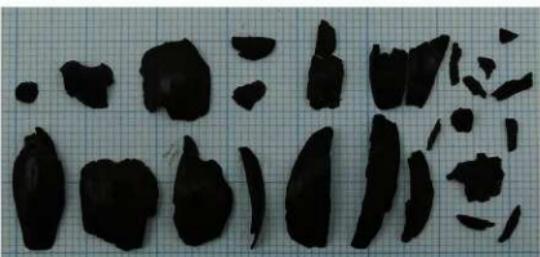
1. 試料2  
ツヅラフジ科の種子



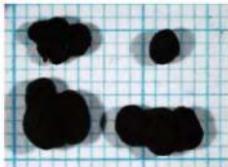
2. 試料2 有機質



3. 試料3 樹皮



4. 試料4 カシ類の堅果



5. 試料4 冬芽



6. 試料5 カシ類の堅果



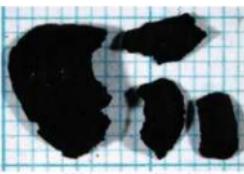
7. 試料5 嫁果類の幼果



8. 試料5 冬芽



9. 試料6 カシ類の堅果



10. 試料6 カシ類の殻斗

写真193 試料2～6



1. 試料6  
エゴノキ属の種子



2. 試料6  
カラスザンショウの種子



3. 試料6  
イヌザンショウの種子



4. 試料6 タデ属の瘦果



5. 試料6 冬芽



6. 試料6 トゲ



7. 試料6 櫟皮片



8. 試料6 葉



9. 試料6  
昆虫の外骨格



10. 試料7 カシ類の堅果



11. 試料7 カシ類の堅果

写真194 試料6～7

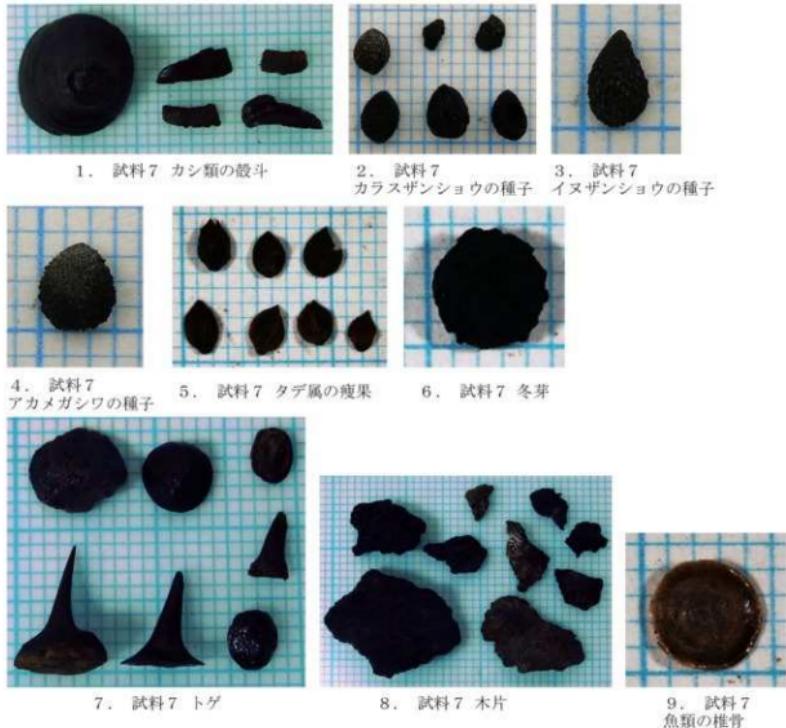


写真195 試料7

## 付篇2

## 下松市御屋敷山古墳の出土遺物

横山 成己

## 1. 資料の由来(写真196)

埋蔵文化財資料館には、山口大学構内遺跡出土資料の他に山口県内各地の遺跡から出土した考古資料が収蔵されている。その多くは本学名誉教授である小野忠熙氏が本学在任中に調査を手がけた遺跡の出土品を埋蔵文化財資料館が継承したものであるが、収蔵される資料は膨大な数に上る。

その資料群中に「御屋敷山古墳第1号墳」と注記される3袋にまとめられた資料が存在する。この内、鉄釘と見られる多数の鉄片の劣化が著しく進行していたため、平成22年度に山口大学所蔵学術資産継承検討委員会に対し事業計画を提出し、鉄製品の保存処理事業を実施することとなった。平成22年度末に事業が終了したことを受け、本稿にて埋蔵文化財資料館所蔵御屋敷山古墳出土資料の調査報告を行うこととする。

御屋敷山古墳は、下松市大字西豊井字御屋敷山にて発見された横穴墓である。昭和28年(1953)5月、御屋敷山浄水場建設工事の際に偶発的に発見され、小野氏らが下松市水道課と下松市教育委員会の委嘱を受け、発掘調査を実施している。その調査成果は小野氏により『山口県文化財概要 第4集』に掲載されているが、刊行よりすでに半世紀以上が経過した書籍であるため、現在では入手困難となっている。よって以下にその全文を転載する。

## 2. 小野忠熙氏による調査報告

## 3. 御屋敷山古墳



写真 196 御屋敷山古墳出土鉄釘  
※保存処理前の状態

この古墳は右側の後道をもつ横穴である。周防部には横穴や地下式土室の発見例が少なく、したがって詳細な調査を行われていたなかった。

昭和28年の5月、下松市西豊井の御屋敷山に浄水場の建設工事が行われた際、偶然その山腹から横穴が掘り出され、小野忠熙らが同市水道課と教育委員会の委嘱をうけて発掘調査を行った。

古墳は、下松平野の東部を流れる切戸川が平地に流れ出る谷口の右岸につくた尾根の西側の中腹、標高にして36m、山麓からの比高約16mの地点に立地している。工事が行われる以前、すでに後道の天井石と奥門が取り除かれており、それに工事によって後道の一部が損傷を蒙ったので全貌を知ることができないが、ほぼ元の状態を覗うことができる。

玄室に当る横穴は花崗岩の帆石を削り込み、その前に右側の後道が設けられていた。横穴の平面形は、幅2.54m、奥行2.18mで三昧胴形を呈し、天井の高さは奥壁で95cm、中央が98cmで玄門に低まって65cmを割り、その貯藏は後道に対して直角である。後道の長さはおよそ2.22mで玄室よりも僅かに長く、玄門に接する部分の幅が1.3m、奥門は破壊されているので明らかではないが、約70cmと推定され奥門に向かって次第に狭まっている。天井石が運存しないため、築構の構造を見ることができないが、現存部の状態から推して、天井石の高さは玄門部に近い部分では玄門より約20cmばかり高かったようである。このような古墳の内部構造や、立地の微地形から推考すると、築成当時の外貌は、山腹の狭い段状の緩斜面に低い封土を盛った小墳丘をなしていたものと思われる。(第13図)

古墳の内部の床面には、玄室義道ともに黄褐色の粘土が一面に流入し、さらにその上に黒褐色の土砂が堆積して上下両層とも玄門と後室の接合部が高くなっていた。おそらく最初にこの部分が破壊して外部から雨水と土が流れ込み、内部を擾乱したために副葬品の位置をかえたものと思われる。

副葬品や他の遺物は、玄室の床面に残しているものもあったがほとんど流入土中に混在し、2個の金環と若干の鉄釘の断片が葬道から出土した。玄室には副葬後に破損した1個の平瓶、金座2個、鉄釘9個が遺存し、玄室のほぼ中央部の東南寄りに、長さ32cm、幅13cm内外の枕石1块が置いてあった。平瓶の高さは11.9cm、底径14.4cmで口辺が歪んでいる。金座は長径1.3cmと1.4cm



写真 197 御屋敷山浄水場



写真 198 御屋敷山古墳推定地



- 1 上岡原古墳群
- 2 囲原古墳群
- 3 向原古墳群
- 4 日天寺古墳群(耳取原方後円墳)
- 5 花岡古墳群
- 6 花岡石棺群
- 7 花岡前方後円墳
- 8 惣ヶ迫古墳群
- 9 西村古墳
- 10 宮本古墳
- 11 宮原古墳群
- 12 畠森古墳群
- 13 为弘古墳群
- 14 荒神山石棺群
- 15 山根古墳
- 16 荒神山前方後円墳
- 17 須屋敷山古墳
- 18 天王森西前方後円墳
- 19 天王森前方後円墳
- 20 大河内古墳群
- 21 寺道古墳

図 78 周辺古墳分布図

の2個で、その断面は長方形を呈し、縫製の裏に金箔を巻きつけた類である。(第12図)

埋葬の遺物は何一つのこっていなかったが、諸種の条件からもとのものとの埋葬状態をある程度推測することができる。針の断片がかなり沢山のこっていることからみると、被葬者は木棺に収納して葬られたものと見るべきであろう。また枕石の長軸が玄室の長軸に直角で、しかもほぼ頭部を横位置にある点を考え合わせると、東南部に頭を置いて葬道に直角の方向に伸展葬されていたようと思われるが、木棺に石枕を入れて埋葬することの当否が問題として残される。

この横穴は横穴墳の初期の形態をもち、葬道が長くかつ石構を設けていることや、副葬品が少ないとどから考えて、横穴式石室墳から横穴墳に移る過渡期の一様式とみることができよう。

横穴がある御屋敷山の浄水場付近には、弥生式後期の末(一部に古式の上部器)の村落址や墓塚があったが、横穴墳とともにその主要部が工事のため取り除かれてしまった。なおこの地から出土した土器や漆箱は、現在下松市教育委員会に保存されている。

(文献1 15~16頁)

### 3. 御屋敷山古墳の位置(図78、写真197・198)

古くに調査が実施された遺跡ということもあってか、発掘調査報告書や研究論文等における御屋敷山古墳の位置は一定していない。一例を図78に挙げるが、御屋敷山浄水場よりはるか離れた場所にドットが落とされている。本稿を執筆するに当たり、筆者も浄水場付近の踏査を行った。浄水場敷地は立ち入り禁止区域が広く、敷地全域の踏査は断念したが、小野氏の「谷口の右岸につきでた尾根の西側の中腹、標高にして36m、山麓からの比高約16mの地点に立地している」との記述を重視し、素直に標高36m付近の御屋敷山浄水場建物下の警備された西側方面、または浄水場進入道路付近を御屋敷山古墳の旧在地と推定しておく。

### 4. 埋葬施設の構造と遺物出土位置(図79)

本墳は、「花崗岩の軟岩を掘り込み、その前に石構の葬道が設けられていた」と報告される。横穴式石

文献3掲載「第13図 横穴実測図」  
をトレース・一部加筆

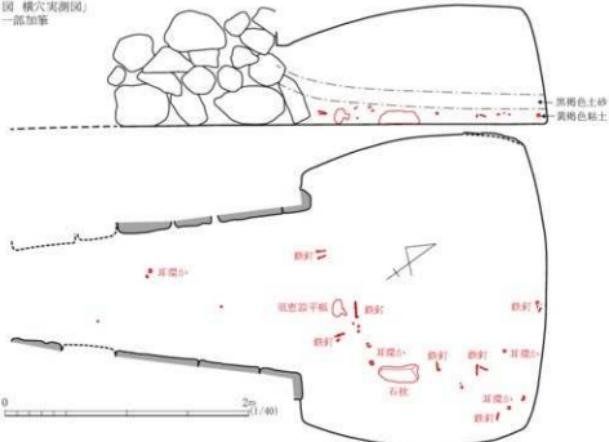


図79 御屋敷山古墳平面図・断面図

室溝道状の石組み施設は、山口県で確認されている横穴墳では特異な構造であり、御屋敷山古墳の特徴の一つと言える。一方で、図示された溝道部石組みを見ると極めて乱雑に積み上げられているように感じられる。さらに「工事が行われる以前、すでに溝道の天井石と渓門が取り除かれており」という記述が存在すること、周囲の地形を含めた溝道部の横断面が掲載されておらず、石組みがどのような工程を経て構築されているのか不明であることなどから、この石組み溝道部が横穴墓築造時に構築されたと断定して良い状況にないと考える。後述するが、出土遺物から見て後世に盗掘を受けている可能性が高く、開口後に埋葬施設以外の用途で使用された可能性を排除できない。

遺物出土位置に関しては、小野氏は自然作用による遺物の擾拌を推定しているが、遺骸の追葬を常態とする横穴墳としては極めて副葬遺物が少なく、その遺存状態も良好とは言いがたい。筆者はこれを人為的な擾拌(盗掘)と推測する。また報告文中に溝道から2点、玄室から2点出土したとされる金環(耳環)に関しても、平面図に示された遺物出土状況からはその出土位置を特定できない。平面図には環状に描かれた遺物が少なくとも6ヶ所に見られる。報告に図示された耳環は2点だけであることも混乱の一因となっている。

## 5. 出土遺物(図80、写真199～203、表16・17)

埋蔵文化財資料館に収蔵されている御屋敷山古墳出土遺物は、須恵器平瓶1点、須恵器壺1点、土師器高台付塊1点、鉄釘12個体、そのほか圓化不能土師器、弥生土器體部小片である。土器資料には小片に至るまで全て「御屋敷山(オヤシキ)古墳第1号墳」と注記されており、当墳から出土したことは確実である。なお、出土したとされる石枕と耳環に関しては、埋蔵文化財資料館では未だ確認に至っておらず、收藏の可能性がある下松市生旺学習課分室においても発見に至っていない。本稿では、現在確認できている遺物のみを対象に報告を行う。

1は須恵器平瓶。小野氏報告に掲載されている資料を再実測した。現在資料は接合・復元がなされているため、断面図内面ラインは小野氏報告図と合成した。扁平な器形であり、胸部に稜を有する。口縁一頭部は大半を欠失しているが、頭部は緩やかに開き口縁を直立気味に立たせている。口縁遺存部は片口状に窄まっているが、これは焼成時の窄みではなく、意図的なつくりと思われる。体部外側調整は、底部が回転ヘラ削り、体部下位は回転ヘラ削り後ナデ、体部中一上位は不定方向のナデが施されており、明確な回転ナデ調整は観察されない。なお、カキ目は施されていない。残高12.2cm、復元口径長軸7.15cm、短軸5.9cm、胸部最大径14.1cm、底部径3.85cmを測る。2は小型の須恵器壺で、壺G類に分類される資料である。小片であるため径の復元は困難であるが、歪みが少ない資料とすれば、底部径約6.5cm、口径は8～9cm内外に復元される。ここでは、遺跡の理解のため口径8cmで復元し図示する。平底の底部はヘラ起こし未調整であり、体部はほぼ直立して立ち上がり口縁に至る。口縁は尖り気味に丸く收め、口縁内面に回線が1条巡る。3は高台付土師器塊。高台径より反転復元を行っている。底部の大半を欠失している胴体であるが、貧弱で低い断面偏台形の高台が付く。体部は大きく開きながら立ち上がり口縁に至る。口縁端部は尖り気味に丸く收めている。器面の色調から重ね焼かれた状況を窺い知ることができる。復元口径17.5cm、高台外径8.0cm、器高4.3cmを測る。

i1～i15は鉄釘。木棺の留め具に用いられたものであろう。この度の保存処理事業により、釘頭部が遺存する個体から計測して少なくとも12個体が存在することが確認された。埋葬された木棺が1棺であれば、少なくとも12個以上の鉄釘を用いたものであったことになる。多くは頭部をL字形に折り曲げられているが、i15・i11は湾曲させており注意が必要である。ほぼ完形に遺存するi1～i5の全長は8.6～11.1cmを

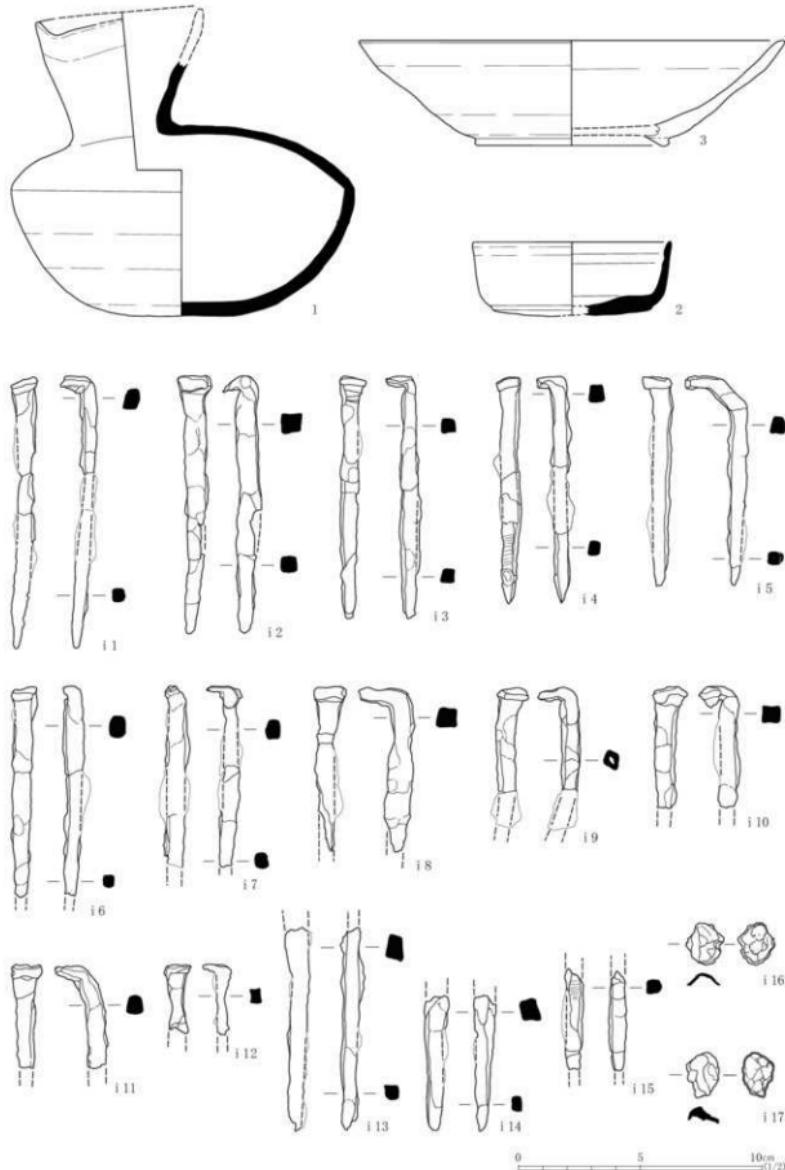


図 80 出土遺物実測図

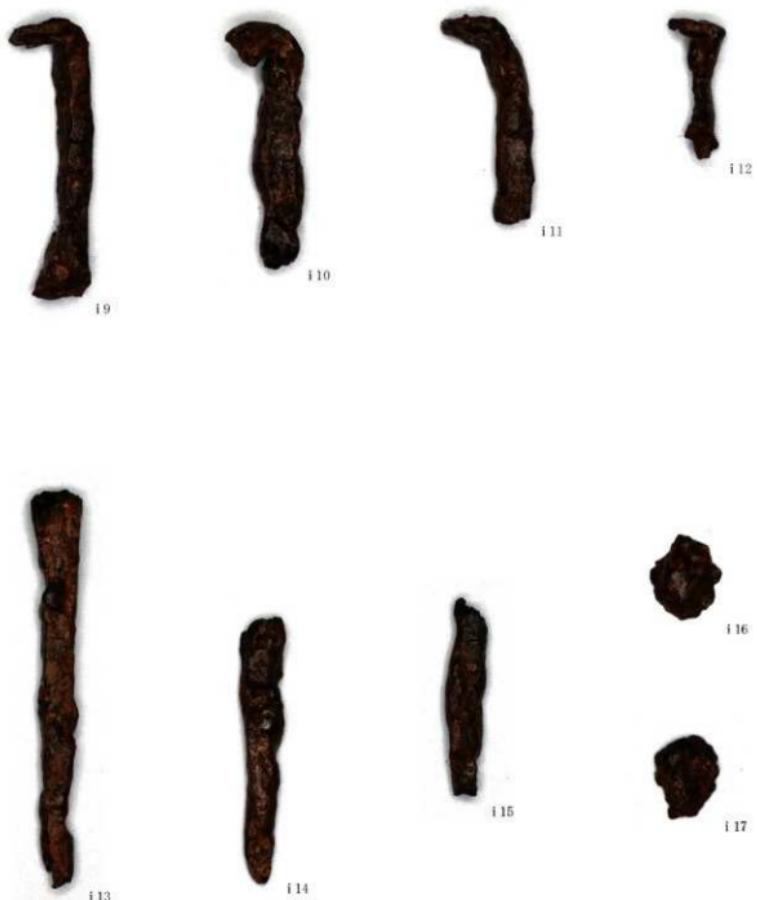


写真199 出土遺物（土器）



奈良県美術館

写真 200 出土遺物（鉄製品）①



奈良実士

写真 201 出土遺物（鉄製品）②

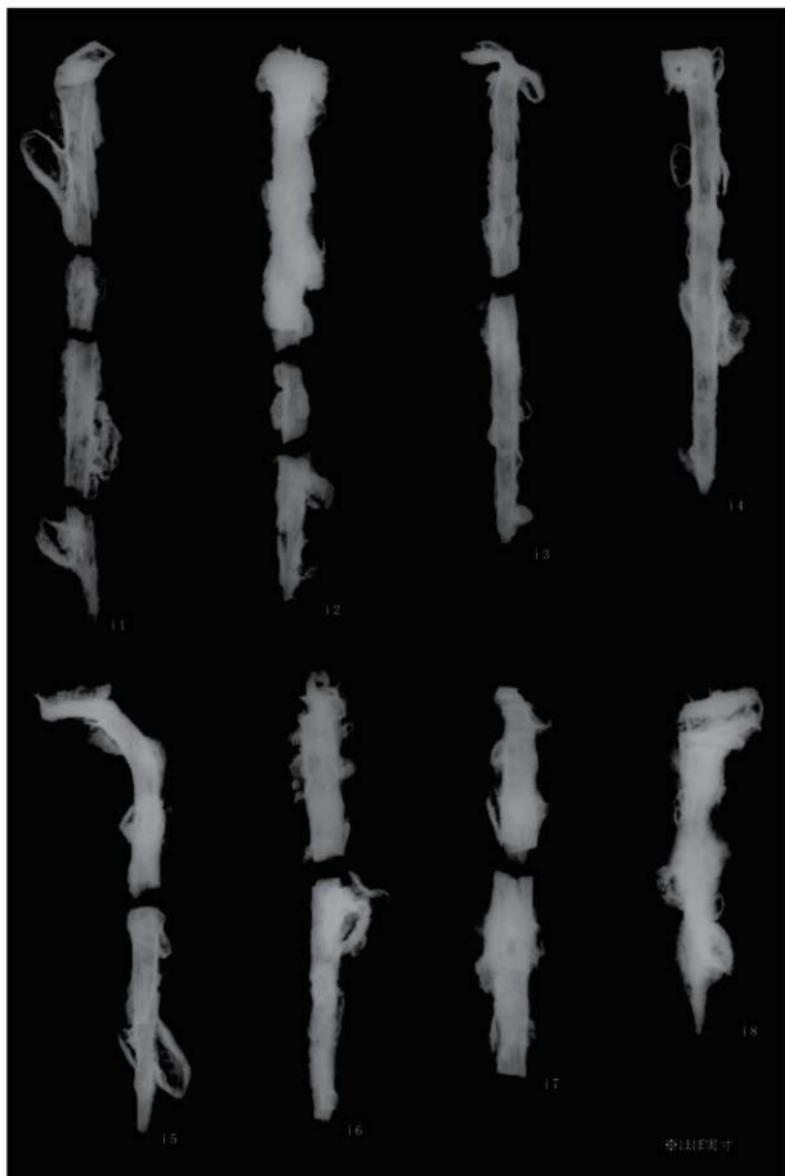


写真 202 鉄製品 X 線画像①



写真 203 鉄製品 X 線画像②

奈良県立歴史博物館

表 16 出土遺物（土器）観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)		色調 ①外面 ②内面	粘土	備考
				①口縁部	②側面			
1	御星敷山古墳	須恵器 平瓶	口縁部 完形	①7.15(長軸) 5.9(短軸)②3.85 ③12.2	①②灰色(5Y6/1)	密(2mm以下の砂粒を極少量含む)	口縁が 片口状	
2	御星敷山古墳	須恵器 杯身	口縁部 ～底部	①(8.1)②(6.4) ③3.0	①②灰色(N5/)	精緻	内面口縁下に閉縫が巡る。平底に近い底部はヘラ削し未調整。	
3	御星敷山古墳	土師器 壺	口縁部 ～底部	①(17.5) 高台径8.0③4.3	①灰色(5Y6/1) ②に5~4黄橙色(10YR7/4)	やや粗(0.1~1.5mm程の砂粒を少量含む)	底くさな高台部。口縁端部はやや尖り気味に丸く收める。	

表 17 出土遺物（鉄製品）観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	種別	法量(cm)	備考
11	御星敷山古墳	鉄釘	全長11.1 重量10.31g	
12	御星敷山古墳	鉄釘	全長10.6 重量15.48g	
13	御星敷山古墳	鉄釘	全長9.9 重量9.58g	
14	御星敷山古墳	鉄釘	全長9.3 重量10.66g	有機質痕
15	御星敷山古墳	鉄釘	全長8.6 重量11.06g	
16	御星敷山古墳	鉄釘	残存長8.4 重量10.33g	
17	御星敷山古墳	鉄釘	残存長7.5 重量12.22g	
18	御星敷山古墳	鉄釘	残存長6.4 重量12.29g	
19	御星敷山古墳	鉄釘	残存長5.8 重量9.80g	中空化
110	御星敷山古墳	鉄釘	残存長5.1 重量8.83g	
111	御星敷山古墳	鉄釘	残存長4.3 重量5.32g	
112	御星敷山古墳	鉄釘	残存長2.9 重量2.74g	
113	御星敷山古墳	鉄釘	残存長8.3 重量8.41g	
114	御星敷山古墳	鉄釘	残存長5.5 重量5.79g	
115	御星敷山古墳	鉄釘	残存長4.1 重量3.81g	有機質痕
116	御星敷山古墳	不明鉄片	残存長1.8 最大幅1.5 最大厚0.5 重量0.46g	
117	御星敷山古墳	不明鉄片	残存長1.8 最大幅1.4 最大厚0.7 重量1.23g	

測る。ii6・ii7は小片であり、鉄釘頭部が鏽れ折損した資料と思われる。今回鉄釘として報告する資料はいずれも断面方形であるが、一部資料が中空化したものもある。

## 6. 小結

御星敷山古墳の発掘調査は、第2次世界大戦後、文化財保護法が施行された直後に山口県において実施された緊急発掘調査の1事例である。自治体において埋蔵文化財保護体制が整わない中での調査であり、関係諸氏が多大なる労力をはらい、遺跡の記録保存に努めたことを窺い知ることができる。

遺跡が消滅したと推測される中、出土遺物の所在確認に努めたが、確認された資料は断片的なものであった。本墳の築造・使用時期に言及するには、須恵器平瓶と須恵器壺しか根拠がない状況にある。その状況下にあり、さらに山口県東部の須恵器編年が不定立である中で散えて築造時期を考察するならば、近年提示された青島啓氏の論考を参考したい。青島氏の論考は結果的に伝統的な須恵器編年観を重視し、かつ当県における既往の須恵器編年を考慮に入れたものとなっている。提示された編年観は主として県央部から県西部の灘内沿岸部出土品を用いたものであり、県域全てに適合するものでは

なかろうが、筆者は御屋敷山古墳出土須恵器坪G類は概ね氏の③期、平瓶は④期に該当するものと考えており、年代に関して前者が7世紀中頃、後者が7世紀後半と考えている。この年代観に即して、小野氏の「横穴式石室墳から横穴墳に移る過渡期の一様式」という考察をひとまずは保留したい。現状において山口県瀬戸内沿岸部における横穴墓の確認事例は少ないが、かろうじて近傍地と言える永源山横穴墓の埋葬施設構造、出土遺物の年代観は御屋敷山古墳事例と大きな乖離を見せており、軽々に遺跡評価を行える状況はない。

また、土師器高台付塚の存在から、吉瀬勝康氏の編年観を参考<sup>3410</sup>し、当墳は少なくとも12世紀後半から13世紀の初頭にかけて盗掘を受けているものと推測する。

御屋敷山古墳発掘調査実施より半世紀を超えて、本稿においてようやく基礎的な資料報告を行うことができた。今後も、筆者が所属する施設にてほぼ死蔵された状態にある未報告資料をできる限り公開し、世に問う所存である。

本稿を結ぶに当たり、下松市生涯学習課分室室員宮山幸治氏には多大なる協力、助言をいただいた。また、当館捕佐員である乃美由香、松浦暢昌にもトレー、表作成等において援助を得た。末筆ではあるが記して感謝の意を表したい。

#### 【注】

- 1) 収納NO.05-027、25-011、93-025(収納コンテナ番号-収納袋番号)
- 2) 遺物収納袋内のカードには「御屋敷山古墳第1号墳」の記入があり、遺物にもそのように注記されているが、現在周知の埋蔵文化財包括地名は「御屋敷山古墳」であるため、その名称に従う。
- 3) 文献3参照
- 4) 文献7「第1回 為弘古墳群と周辺の古墳の位置」を転載、一部加筆。
- 5) 文献2の御屋敷山古墳に関する報告では、筆者の推定地とする追跡地の北西隣に伸びる丘陵にドットが打たれており、かつ「他に数棟の古墳が分布」との記述も見られる。筆者も周辺地を探査したが、古墳らしき痕跡は確認できなかった。今後内調査を行いたい。
- 6) 文献3「第12回 平瓶・金環尖削図」。耳環は写真掲載を見られ、断面が付加されている。小野氏は他書にて御屋敷山古墳出土品を「金環2個、鉄釘4個と須恵器の平瓶1個」としている(文献4)。
- 7) 下松市生涯学習振興課分室での存否確認は、室員である宮田幸治氏に協力を依頼した。
- 8) 文献1参照
- 9) 分解9参照
- 10) 文献8参照

#### 【文献】

- 1) 青島幹(2012)「7世紀の須恵器生産と年代観—防長の須恵器—」,九州古文化研究会(編)『古文化研究』第67集,福岡
- 2) 宇野慎敏(2002)『山口の古墳』,九州・山口古墳時代研究会(編),北九州(福岡)
- 3) 小野忠祐(1961)「3 御屋敷山古墳」,小野忠祐・山口県教育委員会(編)『山口県文化財概要 第4集 墓藏文化財』,山口
- 4) 小野忠祐(1985)『山口県の考古学』,古川弘文館,東京
- 5) 山田康弘ほか(2000)『常森古墳群』,上井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム(編),豊北(山口)
- 6) 山本一朗(1998)『惣ヶ迫古墳』,下松市教育委員会(編),山口
- 7) 山本一朗(1999)『為弘古墳群発掘調査報告』,下松市教育委員会(編),山口
- 8) 吉瀬勝康(2004)「土師器」,山口県(編)『山口県史』資料編 考古2,山口
- 9) 渡辺一雄(1982)『永源山横穴墓』,山口県文化財保護協会事務局(編)『山口県文化財』第12号,山口

## 報告書抄録

ふりがな	やまぐちだいがくまいぞうぶんかざいしりょうかんねんぽう
書名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
副書名	一平成21年度-
巻次	
シリーズ名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
シリーズ番号	7
編著者名	田畠直彦 横山成己
編集機関	山口大学埋蔵文化財資料館
所在地	〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1 Tel083-933-5035
発行年月日	西暦2013年(平成25年)3月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 44秒	131度 28分 03秒	20090413- 20090724	117m <sup>2</sup>	経済学部東アジア研究科・ 経済学研究科棟新営工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 40秒	131度 28分 01秒	20090708- 20090728	40m <sup>2</sup>	野球場防球ネット設置工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 49秒	131度 28分 00秒	20090801- 20090820	35.3m <sup>2</sup>	教育学部A棟 改修工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 09分 01秒	131度 28分 14秒	20100215- 20100217	36m <sup>2</sup>	里山整備工事
御手洗遺跡	山口県光市 室積8丁目4番1号	35210		33度 55分 11秒	131度 58分 14秒	20090518- 20090604	107m <sup>2</sup>	教育学部附属光中学校 校舎改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉田遺跡	集落跡	弥生	自然河川・流路・溝	弥生土器・木製品 須恵器・土師器	
吉田遺跡	集落跡	弥生	ピット・溝・土壤 包含層	弥生土器・石器	
吉田遺跡	集落跡				
吉田遺跡	集落跡				
御手洗遺跡	散布地・集落跡	古墳	ピット・土壤	須恵器	



山口大学埋蔵文化財資料館年報  
－平成21年度－

平成25年3月29日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 (有)三共印刷

〒759-0204 宇部市大字妻崎開作1953-8

